参考資料２

兵庫県の将来構想に関する県民意見

2021.9　ビジョン課

目　次

1　意見聴取の概要.....1

2　未来シナリオ別意見数.....1

3　寄せられた主な意見

(1)個性の追求 3

(2)開放性の徹底 21

(3)つながりの再生.....34

(4)集中から分散へ.....50

(5)美の創生.....59

(6)次代への責任 65

(7)大潮流、その他.....78

参考　意見聴取一覧 82

1 意見聴取の概要

令和2年6月～R3年8月に、県民、事業者、地域団体など計5306人から意見を聴取した。（詳細は「参考」参照）

①ビジョンを語る会（92回 2094人）
地域団体や有志グループと地域の課題や将来像について車座形式で対話
②ビジョン出前講座（16回 1763人）
若者がグループワーク形式で兵庫の未来を考える出前講座を高校、大学等で実施
③地域未来フォーラム（7回 476人）
県民が地域の未来を話し合うフォーラムを県内各地で実施
④グループインタビュー（75人）
地域で先進的な活動をしている団体、グループ等から聞き取り調査を実施
⑤個別ヒアリング（45人）
地域のキーパーソンや事業者から聞き取り調査を実施
⑥オンライン意見交換ツール「Decidim」（338人）
誰もが気軽に意見を言い合えるオンラインによる新たな意見交換を実施

上記の他、庁内の若手職員（131人）、R3新規採用職員（306人）からも意見を聴取（別途とりまとめ）

2 未来シナリオ別意見数

県民から寄せられた主な意見について、令和3年2月に兵庫県将来構想研究会がとりまとめた将来構想試案で示された39の未来シナリオに分類した。各シナリオ別の意見数は以下の通り。

1 個性の追求			625
	01自分らしさを追求できる社会	93	
	02活力を支える健康	14	
	03あふれる学びの場	24	
	04沸き立つ起業	63	
	05磨かれる五国の個性	129	
	06ものづくり産業の革新	71	
	07進化する御食国	231	
2 開放性の徹底			325
	08多文化が入り混じる兵庫	45	
	09世界に貢献する兵庫人	11	
	10なくなるジェンダーバイアス	70	
	11活躍するシニア	48	
	12ユニバーサルな地域	108	
	13バーチャルが拓く可能性	43	
3 つながりの再生			526
	14つながりを広げ、深める家族	36	
	15楽しく子育てできる社会	121	
	16最期まで安心して暮らせる社会	9	

	17広がる縁	103	
	18スポーツが育むつながり	13	
	19進む地域経済循環	89	
	20自分たちでつくる地域	155	
4 集中から分散へ			534
	21都市と田舎の共生	137	
	22自然と共にある暮らし	144	
	23自由になる働き方	93	
	24軽くなる住まい	37	
	25快適になる移動	78	
	26進化する自治体	45	
5 美の創生			317
	27ともに創るまち	134	
	28引き継がれる風景	12	
	29甦る豊かな自然	63	
	30息づく芸術文化	20	
	31広がる生活文化産業	88	
6 次代への責任			383
	32人に投資する社会	42	
	33開かれた学校	159	
	34未知の領域への挑戦	11	
	35地域のエネルギー自立	23	
	36カーボンニュートラルな暮らし	23	
	37危機に強い地域	31	
	38安全を支える強靭な基盤	20	
	39受け継がれる地域	74	
大潮流、その他			414
	計		3124

※試案公表前に実施したビジョンを語る会等で寄せられた意見は、意見内容に応じて該当する未来シナリオに分類

3　寄せられた主な意見

（1）個性の追求

（主なキーワード）

（主な意見）

01自分らしさを追求できる社会

【誰もが持てる力を発揮し、やりたいことができる社会】

・「誰もが持てる力を発揮する」に強く共感する。年齢、性別、障害と例示されているが、それ以外も含め、本当にすべての県民が力を発揮できる状態を作ることが必要だ。

・今までの日本の風潮では、一個の事業が成功しないと自立とはいえない、独立するんだったら絶対成功させなければいけないという考えがあった。しかし、このコロナ禍で、世の中が目まぐるしく変化する中で、稼いでいたのに路頭に迷う人もいる。どうやって生きていったらいいかわからない人がすごく増えている。そんな中だから、一つに的を絞らなくてもいいと思っている。何個も可能性を持っていてもいい。

・高校生たちに話をするときに、ライスワーク、ライフワークという話をする。ライスワークは、お金のための労働、主体性はないが、お金のためにやらざるをえないこと。ライフワークは、やりがい、人を喜ばせること、周りに貢献できること。これも多少はお金になる。

・楽しいライフワークがお金になる人は少ないが、これからの時代は、やりがい、楽しいことなどが大事。この部分を追求することが個性の追求になる。そこで思うのは、ベーシックインカムが必要だということ。それがあれば、やってみようというリスクヘッジになる。2050年にはベーシックインカムの世界になっているのではないか。

・ベーシックインカムがあって、ご飯の心配がなくなると、自分のやりたいことは、クラウドファンディングで集められるので、やりがいを追求できる社会になっていく。

・なんとなく食べることができる社会になれば、チャレンジするハードルは下がっていく。すでに若い人の間では、ハードルが下がっているように思う。

・女性活躍、シニアの活躍も含めて、労働参加率はかなり高まってきている。労働参加率を上げるという観点の議論ではなくて、いかに自分らしく働くかという観点で議論しないといけない。
・淡路島は色々なことにチャレンジできるという話を聞く。都会だと考えられないようなちょっとしたプロジェクトを立ち上げることができる。続けられるかどうかは分からないが、おもしろいことができるという感覚を持っている。そういう機運ができてきている。面白い発想で色々なことができている島であればよい。
・淡路は年中明るくて年中動くことができる地域。年中活動ができる島なので、自分のやりたいことをやっているといった暮らしができていればよい。地域もそれによって活性化する。

【所得が低くても幸せな生活を】

・「人々の活動の原動力は、稼ぐことから、自分の幸せや価値を高めることに移行」というのはその通り。若い人は既にそうなってきている。所得を上げることよりも、所得が低くても幸せな生活を志向する若者が増えているのは間違いない。その意味で自分時間の拡大、ワークライフバランスなどが一層大事になってくる。

【広がる格差への対応】

・格差のグローバル化とあるが、国内では子供の貧困、格差の問題が大きい。これをどう是正していくか、再分配機能をどう果たしていくか。公益資本主義など民間の動きはあるが、格差への対応については、政府、行政がどういう役割を果たしていくかがやはり重要。
・起業するなど、主体性を発揮できる人もいる一方で、格差がより大きくなってしまうのではないかと気になる。

【主体性が求められる社会】

・この柱が一番大事だと思う。すごく変化の大きい時代だからこそ、「個の強さ」が非常に求められる時代だ。
・選択肢が増え、生き方の多様化も進んでいく。試案ではバラ色の人生に見えるが、自分で個性や創造性が発揮できない方がいる。そういった方が、ますます自由主義的な経済社会になったときに、落ちこぼれないようにしないといけない。スキルを身につける機会を提供するなど、そういう部分での行政の支援が重要になる。
・大学生も、やる気のある子と、主体性を持てない子の二極化が進んでいる。この問題をどうやって乗り越えていくのか、日々、教壇に立ちながら感じている。
・自分らしさを追求できる社会を、もしこのまま子供たちに伝えると、自分勝手にしたらいいと誤解してしまうのではないか。社会との調和を保ちながら、社会規範を守るからこそ自由が手に入るということを、自分らしさを追求することと一緒に教育することが必要だ。
・自分らしさを追求することを教育する中では、ありのままの私でいい、ということを積極的に考えることが必要。造語だが「ありのまま」の「まま」をとって「ママティブ教育」を道徳教育の中に組み込んでいけたらよい。

【安心を求める若者】

・ネットで何でも情報が入ってくるので、全部情報を見て考える、情報を確認してから行動に移すという形になっている。大学のボランティアセンターの仕事を長年しているが、以前は、こんなのがあると言ったら、じゃあ行きます、という感じだったが、最近は、それってどういうことですか、もっと詳しく教えてください、と聞かれることが多い。今の若者は、まず情報を確認してからでないと踏み出せない、よく言えば慎重な子が増えていると感じる。
・学生は文章で書いてあることだけでは安心できず、人から話を聞いて初めて安心する。みんな安心がほしい、確かめたいという気持ちがすごく強くなっている。これが将来の選択にもつながってきているように思う。ネットでは広くつながっているが、やはりどこかで安心を求めている。

【地域の個性を理解し伝える】

・地域にいる人が兵庫県の良さを理解してないと子供にも伝えられない。人生の岐路に立った時、兵庫県に帰るという選択肢があると思えるかどうかは、補助金があるからとか、実家があるからとかではなく、そこで自分の人生を賭けられるかどうかということではないか。
・何もないところなので、何をやってもすごく楽しい。東京でインプットばかりしていた人生だったが、自然体験活動や日本語教室を一から自分たちで作りあげていくというのは、下手でも自分で作り上げていける喜びがあって、それは何ものにも変えがたい。
・兵庫にどこまで関心を持ち続けることができるの

か。地域の人にとっては、暮らしぶりをより充実させるために、兵庫がそのフィールドになるかどうかによって関心を持てるかが決まる。

【若者を理解する努力を】

・まだ30代だが、学生によく、一緒にしないでください、と言われる。もっと自由に遊んだらとか、もっといろんなことに挑戦したらと言っても、僕たちはこれが幸せなんです、と言われたことがある。そんなに広げなくても、既に持っているものがある。広げること、やりたいことをやること、人と違うことをすることに、私ぐらいより上の世代はもっと貪欲だったが、今の子たちは、もう好きなことやってます、自分の持っているものもちゃんとあります、と言う。

・コロナで誰も知らない世界が突然やってきた。しかし、子ども達から見たら大人たちが困っているだけで、例えばマスクをつけることなど普通と思っているのではないか。子ども達の普通を大人が普通と思っていないという格差が生まれている。

・若者が自由な感覚を得やすい環境づくりが大切。

【生きる力を身につける】

・子供には、いい大学を出ろ、勉強しろではなく、とにかく食いっぱぐれのない人生を生きて欲しい。アイドルになってもいいし、愛嬌だけで生き抜いてもいい。とにかく食いっぱぐれのない生き方を自分で身につけて欲しい。私自身もホームページを作ってあげてお米をもらうなど、そういう姿を子供に見せている。学校などの箱物がなくても、何をやりたいかを応援できる体制があればいい。

・良い大学に入って、大きな企業で働いてという、一般に良しとされる価値観をチェンジさせる、ということを豊岡市長も良く言っているが、そのとおりだ。

【自己肯定感を高める】

・私の大学では、自分に自信を持てない学生が多いのが実情。叱られてばかりで、褒められたことがない状況で育ってきた学生が、卒論を書かないといけない。叱咤激励しながら指導している。

・地方に帰っても、仕事がないし、できることもないという学生の指導をしている。大学では、自分のできることを見つけて、地域をどうしていけばいいのかを自分なりに考えていく、肯定してあげることが大事。その経験を通じて、自分自身にもできることがあるということがわかり、失敗しても取り返せることもわかる。

・残念ながら小中高でありきたりの教育でずっと押し込まれて、受験で合格して、大学で急にしなさいと言われて無理な状態になってしまっている。その歪みが溜まってしまっている状況だ。

【個性を尊重し伸ばし認め合う】

・但馬でも不登校が問題になっているが、そうなるのは仕方がないと思ってしまう。自分は高校から帰国子女が3分の2以上いる学校にいった。帰国子女の人は日本に帰って来たときに排除されがち。自分の意見を言ったら生意気だと言われる。日本の文化を知らなくて、先輩に敬語を使えない。私の行った高校は帰国子女の人の避難所になっていて、自分の考えを持つ教育を受けることができた。

・ある大学で学生と話していて、「今まで先生のいうことを聞くこと、親の言うことを聞くこと、それが一番大事だと思って生きてきた。それが大学に入ると急に、好きな研究をしろ、どこの会社に入るかは自由だと言われて困る」と言っていた。これはいけない。教育の転換期だと思った。

・もっと個性を尊重して伸ばす。自分の意見が言える。そういう教育をしないと、これからの時代に自分の力で生きていけない人がいっぱい出てくるのではないか。

・選択的夫婦別姓を望んでいるが、今の職場で認められていない。医師等の国家資格の旧姓登録が認められておらず、自身の職場では資格の不要な医療秘書も旧姓での勤務を認めていない。

・女性も結婚までに積上げてきたものを抱えて、もっと活躍できる社会に変えていけるという期待があって、自分らしさを追求というシナリオに共感した。

・子どもの個性は多様なのに、昔からの「勉強していい大学行って」という大人の価値観があまりに強くて、子どもがそのまま個性を伸ばしていけない社会になっている。大人の価値観を変えないと、いくらいい施設や、いいサービスを提供しても、子どもの世界も、社会もよくならない。

・双子でも個性が違うのに、すべての人が一人ひとり違うという当たり前のことが分かっていない大人が本当に多い。

・大人も子どもも同じ一人の人間として認め合うということ自体が、きちんとできていない。自分の家族の一人ひとりの違いを認め、受け入れる。そ

れができてはじめて、周りの人の違いも認めて受け入れられる。そこが実は突破口だと思う。

【個性を発揮できる環境をまずはつくる】

・すごく息苦しい思いをしていたり、学校でからかわれたり、いじめられたり、自分らしさを押し込めて仮面をかぶっていたりする状態で個性を伸ばせと言われても、それは難しい。

・将来には不安・リスクも多いが、それを解消するためにもチャレンジングな人材が活躍できる環境をつくっていく必要がある。

・自分自身が豊かで、余裕があることが大切。社会全体のビジョンも「ゆとり」が大事ではないか。地域のことに目を向けながら、自分の豊かさも追求していきたい。

【大人の個性を伸ばすことが子供の個性を伸ばす】

・日本人は真面目なので、頑張って子育てしなきゃ、弱音をはいちゃだめだ、というお母さんが多い。それが、うつ病やノイローゼ、子どもの虐待につながっている。大人自身をもっと自分らしく生きられるように、ある意味育てないと、いくら子どもの個性を伸ばすとか言ってもダメだ。

・個性を出せ、自分らしくあれと言われても、実際どうしていいかわからない、という人の方が多い。大人の方がむしろ自分の個性や自分らしさについて、はっきりしない状態だ。

・子ども・子育ての問題は、むしろ大人の問題で、大人が変わらないと解決しない。第一に、大人自身が自分と子どもが違う人間であることを認めること。子どもに自分の価値観を押し付けないこと。これがまず大事だ。

【他者との関わりがあるから自分らしさが発揮できる】

・私は自分（個人）というより、まわりの皆さんとの関係性で支えられ生かされていると捉えている。「自分らしさ」という言葉に、まず止まってしまった。「自分らしさ」を「生き生きとする豊かな関係性」という意味で捉えれば、各々が自分らしさを発揮できるのではないか。まずは、高度成長期から引きずっている呪縛を解くことから始めないといけない。

・自分らしさは、確かに、相手がいて自分があって、その中で相手と自分が違う点を自分自身が把握し、受け止めたときに発生するもの。自分一人で好き勝手やっていることをあまり「自分らしさ」とは表現しない気がする。自分らしさを見つけたり身につけたりするには、他者との関わりの場を増やすことが、自分らしさを増大させることにつながる。新しいことをやりたいと思ったときにすぐに飛び込める「相手」になるものを企画デザインするといいかもしれない。兵庫県という大きな枠での部活動・クラブ活動といったイメージかもしれない。

【個性の発揮が未来を活性化する】

・個性を追求するということは未来のためになると思う。グローバル社会になっていく今、周りの意見に流されてしまうことが多い日本人は、どんどん後回しにされていってしまう。それでは損してしまうばかり。そこで、外国とコミュニケーションをもっと取れるようにすることが大事だ。

・自分の好みを追求するようなクイズや、世界中の方々と友達になって意見を出し合い、自分の意見を積極的に言えるようになるチャットアプリなどを作って発信していくと良い。更に、今私たちが学校で行なっている探求活動を小中学校、会社、施設などにも取り入れていくことで、自分を客観的に分析すること、考える力をつけることができるようになる。自分らしさを追求するためには、小さい頃から音楽や、楽器と触れ合うことも大切。音楽の好みなどから個性を見つけていけるのではないか。

・そもそも多様性が完全に認められた場合の利点は何かと考えたとき、SDGsの「誰一人取り残さない」という標語のようなものを思い出した。もし多様性が認められるなら誰もが窮屈な思いをすることなく伸び伸びと様々な人と交流ができる。さらに個性が集まり、斬新なアイデアが出れば地域の活性化にも繋がるのではないか。

・特に大切なのは、この「多様性が認められる社会」を創るために、全員に協力を仰ぐこと。例えば、今あなたはどれだけ自分を出しきれていますか、といったアンケートを実施して年齢層ごとの資料から計画していくのはどうか。最終的な目標は全員「満足している」と回答できるようにすること。

【誰しもが楽しむ権利、仕事を選ぶ権利があるのにそれに気づいていない】

・それぞれ皆が勝手に楽しむ権利を持っている。だが、それを自覚している人は少ない。サラリーマンでももっと勝手に楽しめる自由を持っているはずだ。

・地域の青年部の人たちとも同じ時間を過ごして

きたが、自分たちでも何かできるとみんなに思ってもらいたい。自分は特殊な人間だが、誰しもやってやれないことはない。私自身は、自分で選んだ仕事をしているが、人々が自由に選べる仕事の選択肢は思っているよりもずっと広い。

02活力を支える健康

【個人病院の集まりで健康・安心の街をつくる】

・最近商店街の中に病院が増えている。薬局でも、待ち時間に買い物をしてもらうようなことも考えている。認知症専門のクリニックもできた。いろんな診療科の個人病院が集まれば、一種の総合病院のようになり、高齢者にとって健康、安心の街になるのではないか。

【神戸医療産業都市の強みを発揮】

・阪神・淡路大震災の学びから神戸は医療産業都市として発展をはじめた。この意識を強めていくことが大事だ。私の会社では、コロナ検査に積極的に取り組んでいるが、こうした分野で一歩先をリードする兵庫であってほしい。

【地域資源のフル活用で健康長寿に】

・豊かな自然と多彩な食文化で100歳まで働ける健康長寿の淡路島になってほしい。

・認知症になったら家に閉じこもってしまう。在宅しながら診療を受けられる高齢者に優しいまちになればよい。

【食・健康のリテラシーを高める】

・特に食、健康の分野において情報が乱立している。今後ますますリテラシーが必要となる。

【ベースとなる医療サービスを確保してほしい】

・北播磨では子どもを夜間に診てくれる病院がない。子どもは夜12時を過ぎてから体調を崩すことが多く、朝まで診てくれる病院があってほしい。

03あふれる学びの場

【テーマ型の学びの場が必要】

・「あふれる学びの場」は尼崎市で実践している。「みんなが先生、みんなが生徒、どこでも教室」をキャッチフレーズに、地区公民館を市長部局に移管し、12か所の生涯学習プラザとして再整備した。テーマ型の学びの場をもっと地域に増やす必要がある。

・地域の中にはいろんな学びの場がある。魚屋さんによる魚のさばき方講座、八百屋さんによる野菜の見極め方講座など。学びをできるだけ幅広く捉えて、子供も年寄りも参加できる場にしていく必要がある。それがコミュニティを作っていくことにもつながる。

【信頼できる情報・考え方に触れる機会の充実】

・インターネットで情報収集が何でもできるようになって、科学的思考が苦手になっている。都合のいい情報ばかり取ってしまって、妄想が広がってしまう。科学的に立証された知識を学ぶ場、信頼できる情報や考え方に触れる機会、そうしたものが、オンラインでもいいが、ますます重要になってくるのではないか。

【学びの場の充実が若者にとっての魅力になる】

・自分らしさを追求できることが若い世代に重要。学びやチャレンジする場の確保をビジョンで打ち出すことが、若い世代に対し魅力的に映るのではないか。

・学びの場が増えることはいいことだと思うが、誰が教えるのか。教えられることが正しいことなのかどうかという視点も必要だ。

・資料の中で、阪神地域の特性として20代の若者層の転出超過が示されているが、若者の転出は、学ぶところが少ないので仕方がない。

・30年後の未来は、やはり少子高齢化が進んで、子ども達や子育て世代がマイノリティになる。だんだん法律もできて、不登校に対応した学校もできてきているが、障がいがある等、多様性を持つ子ども達は、現状では学校以外に行く場所がない。幼少期からいろんな形の教育を提供できる学校機関のようなものが、いろんな場所にできたらいい。

【リカレント教育はますます重要に】

・大人の教育、生涯教育が広がる地域は魅力的である。

・参考情報に入っているコワーキングスペースも

学びの場なのか。そもそも何のために学ぶのか。ここで言いたいのは、生涯学習なのかリカレント教育なのか。後者だろうが、生涯学習に近い内容に読める。社会人で大学院に通う人が増えているが、キャリア形成のためのリカレント教育と、趣味や自己実現の生涯学習が整理されておらず、焦点がぼやけてしまっている。学ぶことが目的化している感じがある。

・「大学の公開講座」の内容が時代遅れ。ジオパークの自然文化をいくら講義したところで、その価値を高めていくような活動につながらなければ意味がない。

・講座の中身だけでなく、やり方も問題だ。今の60代は働きながら、あるいは介護しながら学ぶ人が多い。年齢に関わらず、好きなときに好きなテーマで学べるように切り替えていくべきだ。

・高度成長期の意識が残ったままで更新されていない人が多い。それぞれの人に人生の中でインプットされた意識がある。そのバイアスに気付くのも生涯学習の大きな意味の一つだ。

【活動の原動力として「心理的資本」が大切】

・「あふれる学びの場」に記載のある心理的資本ということを、この資料で初めて知ったが、すごく大事だと思った。豊岡で行われているような演劇の授業をもっと進めていければいいと思う。やはり心のしなやかさはすごく大事。

・生保業界の大手企業の人材を3ヶ月受け入れたことがあったが、かなり難しかった。大手企業では就業規則があって、やることが決まっているのが普通だが、当社ではやることが何も決まっていない。殻を破ろうとしたが、結局馴染めずうまくいかなかった。心のしなやかさや、心理的な関係性をどうつくるかが重要だと感じた。

・「活動の原動力となる資本」に自然資本が入っていない。

【経済的支援を自己能力の向上に充てる若者が増えていけばいい】

・神戸で高校生の貧困に取り組んでいる人の話を聞く機会があり、知らないことばかりで、驚くこともあった。ベーシックインカム、稼ぎ方の議論につながるが、彼らにコロナ禍で月１万円を支給してみたら、彼らは、もらえるから働かないとはならずに、自分の能力を上げることに使うことが多く、そのことには希望が持てる。

【地域での活動が学びにつながる】

・地域でのボランティア活動やイベントなどへの参加を通して、つながりが広がり、考え方も変わり、様々な課題解決へ発展するのではないか。

04沸き立つ起業

【失敗してもやり直せる社会が起業家を育てる】

・自営業が存在感を増すという指摘はその通りで、個人事業主を増やしたい。でも日々接している感じで言うと、学生の感覚は今でも、大企業で働く人が勝ち組で、起業する人はマイノリティ。起業が就職と同じぐらいの選択肢として普通にある社会をめざしたい。ただ、どうすればよいのかは、私も長い間悩んでいる。学生向けの起業セミナーなどやっても、起業する若者は全然増えない。やっぱり日本では起業のリスクが高すぎる。失敗したら人生終わりみたいに思っている子が多く、相変わらず大学生は大企業か公務員かという発想。その傾向がこの社会経済情勢で一層強まっている。起業を増やすためには、失敗のリスクを下げる必要があり、再チャレンジができる社会、失敗しても大丈夫と安心できるセーフティネットがある社会を作っていかないといけない。そうならないと、自営業者やベンチャーは増えていかない。起業を後押しするポジティブ系の施策は近年随分と整備されて兵庫県も頑張っていると思う。だが、これから先は、失敗しても大丈夫な環境を整備することにシフトしていくべきだ。

・神戸は、若者にとって生きやすいまち。住みやすいし、子育てがしやすい。若者も生き生きとしているが、その中で、フリースペース、図書館などの若者が集まるスペースがあればもっといい。若者が働きやすい場所や、若者自らが起業しやすい環境をつくる。若者がチャレンジして失敗しても、敗者復活できる神戸でありたい。

【種々ある起業を理解して施策展開すべき】

・「沸き立つ起業」はどんな企業を対象にしているのか。これからはポジティブ系の政策だけでは十分でない。それと、コミュニティビジネスがこれからは欠かせない存在になる。対象領域は、そ

の言葉よりも広い概念で捉える必要がある。社会的企業だけでなく、「社会目的の企業」という形態が最近登場しているし、チャリティという形態もある。資金調達も、クラウドファンディングだけではなくて、もっといろんな方法、資金の流れが出てきている。

・起業の考え方が昭和的で、ステレオタイプ。兵庫県が描く起業のイメージが不明。「起業＝法人登記」なのか、個人が自分で作ったアクセサリーを売ることなのか。思い描く起業像が曖昧だからこういった書きぶりになる。

・インターネットのアフィリエイトも起業だし、中間支援も起業。兵庫県が描く起業のイメージがもっと多様であってくれないと困る。起業プラザひょうごが前提にしているような起業しか念頭にないのであれば、兵庫県に未来はない。

・普通のおばちゃんが始める託児所みたいなマイクロな起業も視野に入れてほしい。参考情報のフリーランスの記述以外は「THE・起業」の内容しか紹介されていない。もっとマイクロな起業を大切にして、いろんな生業を持つ人をどれだけたくさん集めることができるかが、都市部だけでなく、中山間部も広がる兵庫の強みになるのではないか。マイクロな起業が盛んな兵庫になれば面白い。そのためには起業支援の間口をもっと広げないといけない。

・多様な働き方の部分で、スタートアップ、ベンチャー、スモールビジネスはきちんと使い分けた方がいい。特に兵庫県では、スモールビジネスがたくさんできる環境にあるのではないか。スモールビジネスはやりたいことをやりたい方法でできる。自分プラス一人分の雇用ぐらいでビジネスができる。

・どういった起業をめざすのかというところはきちんと打ち出した方がいい。神戸は地元の起業よりもスタートアップにフォーカスしてやっている。播磨は逆に地元に根ざした起業ということでやっていってもよい。

【伴走型起業支援が効果的】

・格差はデジタルデバイドだけではない。いろんなカテゴリーにいろんなギャップがあるはず。僕が最初に地域に入ろうとしたとき、ギャップを埋めるための「伴走」をする。起業も同じ。やり方が分からずリスクも高いとなれば普通なら躊躇するところを、百戦錬磨の人が伴走してあげれば迷っている人は一歩を踏み出すかもしれない、そういう間を取り持ってくれる人がいてほしい。

・若い人が、好きな事業をどんどん起こしていくにしても、まず一人ではノウハウが足りない。ポイントの一番は、人との出会いやつながりである。

・もう一つ大きなハードルは、軌道に乗るまでの安定した収入の確保。有望な事業でも、芽が出る前に断念してしまう人は多い。最初は信用が無くて、市役所の補助も貰えず資金繰りや生活面で本当に苦労した。心も体も病んでしまう人もいる。

【起業は自分の居場所づくり】

・会社の考えと自分の考えが合わない部分が必ず出てきて、それを会社にぶつけても解決できない場合がある。自分の居場所を探しても100％合うものは見つからないので、自分で居場所をつくった方が早い。

・会社を作るのは簡単。やりたいことがあったら会社を作るというスタンスでいい。

【起業で地域課題を解決する】

・中山間地域は本当に資源の宝。それをひとつのリソースとして起業する、ないしはベンチャー型事業承継を含むようなビジネスを起こしていくことによって、課題先進国の課題自体を解決していくことができる。

・少し工夫すれば、チャンスはたくさん転がっている。「多自然地域が若者のフロンティアに」とのことだが、その通り。観光業のことしか分からないが、若い人が起業して活躍できる環境はあるし、ライバルも少ない。

・地域で起業する人が増えることにより、人口増加・活性化につながればいい。

【若者に任せる】

・うちの会社では若いうちから色々なことを経験させている。若い人はやらせたら大概伸びる。伸びるのに合わせてポジションを作る。そのポジションを作るために事業を拡大する。うちはそういうサイクルで回っている。

・若い人たちがやりたいことをやっていって事業を拡大していくのが面白い。やるかやらないかという判断が求められる際、何とかしてできないかと考えるのが面白い。

【自分で限界をつくらない】

・大事なのはどこまで行けるかの上限を決めてしまわないこと。やりたい人がやりたいようにやって、

どこに行き着くのかが私の楽しみ。長いこといるだけでは下から抜かれて居場所がなくなる。上の人間は下の人間の邪魔をしない。これだけの自由度を確保しているから、小さい規模でも成立する。

【起業プラザひょうごをもっと自由な環境に】

・起業プラザはスタートアップを支援する施設で、スモールビジネスには敷居が高い。スタートアップ、ベンチャー、スモールビジネスの支援はそれぞれ少しずつ異なるはずで、その違いを認識して役割分担していく必要がある。ここで書かれている内容は、高度な起業しか捉えていないように思う。

・サンパルにあった時の起業プラザは6時から23時まで使えて、使い勝手がよかった。現在は、9時から22時になり、土日は10時から。私たちの仕事は、自分自身でやるべき仕事は大体朝の9時までには終わらせているので、時間的に使いにくい施設になった。

・以前は、このスペースをこんなことに使えるんじゃないかと提案できていたが、今は運営への関わりしろがなくなってしまった。オフィス環境としては完璧だが、県、SMBC、コミュニティリンク、UNOPSが関わる中で、かなりガチガチな運営になってしまっている。IT、デザイン系以外の事業者には使いにくい施設だ。

【ワーケーションをきっかけにその地域でビジネスを起こす】

・福利厚生からワーケーションを始める企業が多いが、ワーケーションをずっと続けていくとなると、単なる福利厚生だけでは内部を説得できない。ワーケーションをすることで、その地域でビジネスを起こせるとか、イノベーションを創出できるといった、事業としての価値が認められなければ長続きするのは難しい。

・大学生も、実際に現場で、どのような働き方ができるのかを知る機会を求めているニーズがあるので、企業と大学と一緒に新しい仕組みを作っていきたい。

・ワーケーション事業により利用者への価値提供だけでなく、地元の若者たちが島内でビジネスを創出するきっかけづくりを目指し、淡路島の産業発展と関係人口創出に貢献したい。

【だれにでも起業のチャンスはある】

・今、ハンドメイドがすごく流行っている。ネットで売るのが簡単になり家庭の収入にもなるということで、主婦たちがハンドメイドをやっている。全国で800万人もいると言われている。

・私の後輩がハンドメイド事業で、子どもの名前シールをネットで受注し届けるサービスをはじめたら爆発的に売れた。成功したので、ハンドメイドのノウハウを教えるためのコミュニティスクールのようなものをつくって教えていて、160人ぐらいのグループになっている。主婦、子育て世代に提供できるコンテンツの一つとして考えられるのではないか。播州織もあるので、特産品とからめたハンドメイド事業の取組を進めていきたい。

【起業家マインドを育てる教育を充実すべき】

・もっとお金に対してのリテラシー教育が必要だ。運用という話ではなくて、お金とは何かということを小さい時から考えさせる。お金はあくまでも手段にすぎず、それ自体が価値を持っているわけではないが、人からもらうものではなくて、お金（＝価値）は作り出すものだ、ということを知ることが重要。そういうベースがあると、企業に雇われるだけではなく、個人事業主として自分で稼いでいくことも考えられるようになる。

・小さい時から地元の課題を認識しつつ、経験も地元でして、課題を解決したいと思ったらビジネスを作れる、将来的に戻ってくることもできる、という教育は大変重要だ。

・兵庫で創業しても、途中で出ていってしまう人もいる。そう思わせない、兵庫にいたいなと思わせる教育、環境づくりが大事だ。

【テック系の人々が起業を活性化する】

・テック系の人が、近くにいることが大事。六甲山のスマートシティ構想でITの人と関わることになって共同研究をしたが、ITの人が近くにいると色々なアイデアが浮かんでくる。テック系のビジネスをやっている人たちが街中にいっぱいいることが重要だ。

【兵庫県のポテンシャルを活かして起業すべき】

・兵庫は本当にダイバーシティ。こんなになんでもできるところはない。兵庫だといろんなことができる。行政サイドからもいろんな仕掛けようがあるので、是非色々やってほしい。

・兵庫県は穏やかな地域。経済規模の実感は、東京を100、大阪を10とすれば神戸は1ぐらい。だからこそ、”ビジネスビジネス”ではない方向でやっていくのがよい。しかも日本海、瀬戸内海両

方に面している。私は自分で日本海まで車で飛ばしていくのが好きだが、山を越えながら、これが全部兵庫県だと思うと、すごいなといつも思っている。
・農業×環境、農業×古民家などのスモールビジネスが兵庫では面白いのではないか。
・事業を展開しやすい場所を普通は考えるので、基本的には、企業誘致の補助金が強いところが有利になるというのはある。

【関係者をつなぐプラットフォームが必要】
・そこに聞けば、やりたいことの実現や課題解決に向けて、関係する技術を持つ会社などにつないでくれるようなプラットフォームがあればいい。

05磨かれる五国の個性

【地域の資源を守り育てる地道な取組が重要】
・摩耶観光ホテルが急に注目を集めているが、市民が盛り上がっているというよりは、メディアの食いつきがすごいというのが実態。何をしたらこんなに話題になるのかと聞かれるが、急に何かを仕掛けたわけではなくて、ずっと変わらず取り組んできたことが取り上げられただけ。
・地元の人向けに地域の資源を知ってもらおうという思いで「マヤ遺跡ガイドウォーク」をやっているが、東京や東北、名古屋など県外の人からの申し込みで定員がすぐ埋まる状況。
・将来構想試案に「兵庫津」という言葉がどこにもない。是非、県の新ビジョンに「兵庫津」という言葉を入れてもらいたい。こういう県の重要文書に言葉が入ることで、いろんな人の見方を変えることができる。
・今やっていることだけを書くのではなく、今なぜ歴史や遺産の話が出てきているのかを説明すべき。

【地域の多様性が人を引きつける】
・神戸の特徴は多様性。多様性を受容する街。神戸はその素地が染みついている。例えば、北野には宗教施設が十幾つもある。多様性を受け入れながら普通に生活している。
・人が観光に求めるものが変わってきており、見る観光から、より深い体験を求める観光に変わることは確かだ。単に見る観光は既に終わっている。
・観光だけで考えていてもダメで、これからは”観光×○○”で考えていかなければならない。
・神戸の持ち味はやはり自然の近さ。海と山、街をコンパクトに楽しめる。
・地域にはそれぞれ強みがある。そこを競争するのではなく、手を組んでいけば世界の中で兵庫は有名になる。そのくらいの気持ちでやっていったら楽しい。
・地域の代表的なモノを伸ばすことで多様性が担保される。
・いろんな地域カラーを持っているのが兵庫県のすごさ。都会もあれば、山も海もある。この特徴を生かしていく必要がある。

【住民が地域の価値を再認識すべき】
・加古川を中心にゼミ合宿などをして調査すると、小さな山やお寺など、本当に何でもない有名ではないところ、歴史上の人物が通ったかもしれないぐらいのところでも面白く、価値あるものがあることがわかる。しかし、それを地元の人はみんな何もないという。全国どこでも同じ問題を抱えていると思うが、何もないのではなく価値の再認識をして、自分の住む場所が実はそれなりに面白いんだということを再認識することがまず重要。
・但馬の人こそ但馬を知らないということがあり、「但馬力高め隊」ということで地域力を上げていく活動を但馬夢テーブル委員会でやっている。
・県内の各地域について理解を深める手段として「県民手帳の創刊」を提案する。2021年現在、41県で県民手帳が発行されているが兵庫県では東京都・大阪府と並び、かつ「県」では唯一これまで全く県民手帳を発行したことがない。折しも県では昨年秋に小学生向けの『ひょうごけん学習帳』を発行しており、この事業のノウハウを活用して県民手帳へ新規参入することは大きな話題作りに繋がるのではないか。
・地元の人が地域の魅力を知らない。インスタ映えするスポットを教えあったり、若い学生が街歩きをしながら魅力を発信するなどして、もっと地域の魅力を共有すべき。

【地域の魅力を掘り起こす】
・国宝の鶴林寺は、大河ドラマ「軍師官兵衛」で注

目され、女性もご朱印帳のコレクションのために来てくれる。今はそれ以外に人を集めるような資源が地域で見当たらないのが残念。インバウンドも、姫路城には来てくれるが、鶴林寺や西国街道と言ってもピンとこないだろう。

・もっと目玉になるような地域資源を新たに創っていくことも大事だし、自身も今の魅力を分かりやすく市民や子どもたちに継承していきたい。

・豊かな景観や、三ツ矢サイダーなど、川西の地域資源を、まちづくりやツーリズムに活かしていきたい。

・三田はポテンシャルが高い。レストランやシェフの誘致に、エスコヤマ小山シェフと一緒に取り組むことで、日本全国のトップシェフや一流のクリエイターたちに声をかけることができる。

・三田は抜群のアクセスを活かして、日帰り者をターゲットに、もっと空き家・古民家を活用すべき。しかし、市街地開発の規制が厳しすぎる。その点、丹波は資源活用がうまくいっている。

・県内はどこも行ってみるとめちゃくちゃいいところだ。それに意外と近い。豊岡も高速で行けば2時間。案外その近さが知られていない。各地域がもっと尖っていくと、もっと面白い兵庫県になる。

・西国街道なども面白い。今では国道2号のただの裏道という感じだが、ずっと同じぐらいの幅の道路で小倉までたどれるのがいい。それは陸路だが、シルクロードのような、川の道、陸の道を再びたどれるようになれば、地域のつながりをもっと感じることができる。

・どんな地方でも、地域の資源を活かして、付加価値を生み出すことができる。地方に多い廃校跡は工場にしたり、レストランにしたり、沿岸部に多い工業遺産の造船所跡などはジャズを聞ける場所にしたり、アイデア次第で、いくらでも新しい使い方は考えられる。

・世界一の吊り橋をもっと観光に活用すべき。バンジージャンプやジップラインができないか。すぐにできそうなのは橋の下を歩けるようにすること。できれば主塔にも登れるように。鳴門大橋に続いて明石海峡大橋にも自転車道ができれば更に面白い。

【そこでしかできないことをやる】

・ここじゃなくてもできることをここですべきではない。例えば、玉ねぎの栽培であれば、新宿で玉ねぎを作ってもほとんど同じ。もっと明確に色分けしてやっていくべき。

・それぞれの地域が一番よいと思うことを目指すことが、兵庫県にとって一番よいことだと思う。日本海、瀬戸内海で気候が違うように、地域、地域で人々が大切にする文化が違う。

・城崎のような、その地域に行ってこそできる体験でないと人を呼び込めない。

・竹野もジオカヌーは人気が高い。一方で、観光旅館でよくある、小物づくりなどの小さな体験サービスは、これが旅行者の欲求を満たすものなのかと疑問に感じる。

・きれいな景色を残す、それがある場所では、それをやったらいい。北淡路は観光で振り切っていくべき。農業でも、観光に絡めた農業であればいいといったような形で、土地の有効活用をしていく。そうすることで、世界の人から注目される、価値のあるものになるのではないか。

【近場の観光地は今こそ伸ばすチャンス】

・但馬の宿泊業はコロナの影響で、売上を伸ばした方である。今まで、海外や沖縄などへ旅行していた新しい客層が、「コロナでも県内なら」ということで、たくさん来てくれて、「案外県内でも良いよね」と言ってくれている。コロナによる近場観光の流れはチャンスだと思っている。

・兵庫県は、日帰り集客事業のポテンシャルが非常に高い。大阪・京都・神戸から車で1時間圏内に素晴らしい自然が広がっている。1時間と2～3時間は相当な差。マイクロツーリズムも追い風。

・グランピングなどは、それ自体が「宿泊してでも来たい」と思わせるポテンシャルを持っている。これまで日帰り客のポテンシャルしかなかった地域にも可能性を与えてくれる。

【規制を取り払って新しい動きにつなげる】

・廃業した空き旅館を活用した事業の可能性として「無人チェックイン」ができれば、事業の幅がかなり広がる。民泊などの規制も緩和されれば、新しい人が入ってきやすくなる。

【変化しないことも大切】

・兵庫は、そんなに変化をしなくてもいい気がする。あまり変化を求めると、それぞれの地域の良さがなくなりそうだ。

【打ち出し方にも工夫を】

・五国とは何か。ただ五国と言っても興味を持つ人はほとんどいない。五国推しをしたいなら、例えば、四国に対して、うちは五国。四国vs五国の

ような形で、何かをアンカーにして見せるようにした方がわかりやすいし、おもしろい。

【地域の違い・特徴を明確に打ち出す】

・五国それぞれに大きなビジネスチャンスがあると思う。例えば、五国ごとにこういう市場を狙うんだという、明確なビジョンがあった方がいい。医療であれば神戸となるが、では、食をするならどこだろうとなったときに、自分で探しに行かないといけない。つまり、地域の色がわかりにくい。地域の特性を明確にするために、例えば、各地域にSDGsのロゴを当てはめてみてはどうか。

・「集中から分散へ」にも関わることだが、分散することを意識しすぎると大切な「ひょうごらしさ」を失い、日本各地どこでも陥りそうな蛸壺状態を生み出しかねないと心配される。重要なポイントは、分散させることだけではなく、多様な個性を持つ地域が協調したデザインとなること。ここに未来の行政の役割が見えてくる。

【持続するツーリズムづくりを】

・ツーリズムは持続可能性が課題。ほとんどの観光地は、一度行ったら、もう十分で来て貰えないなかで、アニメの聖地になれば、コスプレーヤーが季節を変え、衣装を変えて、何回も来てくれるそうだ。

【何かに振り切った戦略で人を呼び込む】

・淡路は結局どっちつかず。観光でいくのか、島内で自立していく道を進むのか、方向付けを明らかにした方がいい。

・都市にないものを打ち出すべき。淡路の強みは食と癒し。そこを強化するしかない。

・「癒しの島」のネックは専門人材がいないこと。リゾート人材の交流ができないか。例えばバリ島のエステティシャンの誘致ができないか。そして島の中でエステのプロを育てる。それができればスパとエステの島としてブランド力向上につながる。

06ものづくり産業の革新

【成長4分野に力を入れる】

・環境・エネルギー、DX、健康・医療、航空・宇宙の成長期待4分野を伸ばさないと、兵庫の産業の未来はない。

・航空機産業はコロナから必ず復活する。また長い投資サイクルだから、今の投資は短期的には会社の首を絞める。中小企業も同じ。今すぐに航空機をやろうと思っても無理だが、技術面、ビジネス面でも、将来を見据えて、力をつけていく必要がある。

・水素産業推進の大きな意義は、船舶やプラントなど、それを支える中小企業の仕事が広くあるということ。水素運搬船一つをとっても、それを作るために色んな中小企業が関わることになる。

・エネルギーの世界は、トップを走らないと意味がない。一番手が総どりすることになっている。我々が一銭にもならないことを必死でやっているのは、一番手になる使命があるから。

・兵庫県として成長期待4分野を推していくのか、色んな分野をたくさん言うのかはお任せするが、そこは選択と集中のなかで、行政もリードしていかないといけない。誰が担うのかという問題もあるが、水素も、航空機も、健康医療も兵庫には素地がある。

【中小と大手をつなぐ政策を考えてほしい】

・ビジョンに水素社会と書いてあるが、その実現には、とんでもないエネルギーが必要で、しかも行政、大企業、中小企業の連携が必要。大手企業と、中堅・中小が、WINWINの関係で裾野の広いピラミッド構造をつくって、シナジーを効果的に創り出す必要がある。これは成長期待4分野すべて同じスタイル。この構造は、ビジョンの参考になるのではないか。

・中堅中小のすそ野を広げて、そこと先端を走る大手とをつないで、オール兵庫でシナジーを出す仕掛けづくりが必要。中小企業の現場の人が、DXやロボットを急に導入しようと思ってもそれは無理。少し理解できるようになってもすぐに新しく変わってしまう。そこのサポートが大事。

【中小企業のDXを強力に推し進める】

・大企業ではDXをやっていない企業はない。逆にやらない企業はダメになっていく。問題は中堅中小企業。例えば、DXにはロボットの導入が必要だが、今のロボット産業は量を売ることができる大企業向けになっている。一方、日本は中堅中小企業でもっている。そこの生産性を上げ

ることは至上命題。

・中小企業に最高級の技術までは不要である。ペイしないから。とにかく、その会社がペイするような提案を行っていく必要がある。

【企業集積を促す特区を兵庫につくるべき】

・企業集積を促すための特区制度を進めてはどうか。産業クラスターをつくるとしても、インセンティブがないとできない。

・産業界は、行政に背中を押していただいて、1歩を踏み出してしまえば、走り出すのは速い。経済性が成り立たないと動き出せないから、皆が待ちで、何かあれば飛び出すような状態。第1歩を躊躇している間に、周りに総取りされてしまうことのないよう支援してほしい。

【人の流動性を高めてイノベーションを起こす】

・「世界に存在感を示す産業」とあるが、神戸の医療産業都市はコロナ禍で存在感を示したか。地元企業は何をしたか。そこが寂しい状況。なぜ日本でワクチンが作れないのか。たぶん問題は人の流動性が低いことだろう。人材が集まらないところには世界の投資マネーも回ってこない。もう少し先見性のある産業構造の形成を考えないといけない。

・これまで県内にない珍しいもの、最先端のものを作ろうとすると、この地域から外に出たことのない人だけでいい仕事をするのはやはり難しい。UJIターンの人、海外の人などを混ぜて、ダイバーシティの高い職場を作らないといけない。

【サーキュラーやサステナブルがこれからの経済の方向性】

・個々の産業がどうなるかはわからないが、産業社会ではサーキュラーエコノミーへの移行が一つの大きな方向性。ただサーキュラーエコノミーがいいというだけでなく、兵庫でどういう仕組みや制度を作っていくのかを考えないといけない。

・以前、神戸市の企業誘致のパンフレットに応募した際に作成した絵だが、経済資本主義である東京、大阪と比較して、兵庫・神戸には、社員の健康や暮らしの充実を目指している会社、商品も健康を重視した商品を売っているような、豊かで持続可能な社会、サステナブルなエコノミーをめざす企業が集まるイメージが合うと思う。自然が近くにあるロケーションで、あらゆる場所でリモートワークができる、魅力的な中心部もある、このような空気感、イメージを打ち出して企業誘致をした方がいいのではないか。

【元気な企業は独自の技術を開発し続けている】

・丹波のものづくり企業を見ても、独自の技術を開発し続けている企業は元気である。一方、どこにでもできるものを単に製造しているところは厳しいという声も多く聞く。分野というよりも、企業それぞれで状況が違っている印象。

・我々の時代はモノづくりの時代で、作れば作るだけ売れたり、買ったりする時代。今後のモノづくりでは、組み立てよりも、素材の発見や新しいモノを生み出す生産設備を持つことが大事で、社会の経済的資産として大切にしないといけない。

【ダイバーシティが強い産業を生む】

・イノベーションの元になるのはダイバーシティ。ではダイバーシティとは何か。それは顧客のあきらめている問題を捉えることだ。当たり前を疑い、自分の頭で、なぜそうなのかを考える。それがダイバーシティだ。

・世界の情報を知ること、日本のことを知らない外国人と交わることがいかに大事なことかを知る必要がある。

・アメリカの強さの源泉はダイバーシティだ。アメリカは一つのカルチャーの国ではない。いろんな文化を受容し、比較し、考える素地がある。人とは違うオリジナルな発想に価値を求める。人と違うことを恐れる日本とは反対。

・移民の国でもない日本でダイバーシティを担保するためには自ら世界の情報を取りに行くこと、自分が外国人になったつもりで考えてみることが必要だ。

【付加価値の高いものづくりをめざせ】

・大事なのはGDPの規模ではなく、一人当たりの付加価値だ。そこを上げようとすれば、今後はもっと高級品を作る方向にシフトしないといけない。

【土地利用の自由度を高めてほしい】

・課題は、地元で設備を拡張できる土地が確保できないこと。自社をはじめ、倉庫や工場として設備投資を拡大したいところはあるが、農地転用が難しい。もっと土地利用を柔軟にできるように規制緩和が必要。

【生活文化系の産業をもっと伸ばせないか】

・神戸は外国人の生活インフラがある強みもあり、海外の生活文化系の企業の誘致に成功してきた。こうした生活文化系の産業をもっと伸ばすべ

き。兵庫県、神戸市、阪神間のイメージをもう一度ブランディングして、東京、大阪から企業を呼び込む。その中に、コミュニズムの発想を入れて、そういう発想を持っている企業、日本支店を持っている外国企業、デモクラティックコミュニズム的思考を持っている企業が集まるとおもしろい。

【見せるものづくりも大切】

・ものづくりを美の観点で見ると、仕事の美しさも一つの美だと思う。ただ単に精密にものをつくるのではなく、機能美を加えたものづくりができる会社を兵庫県で実現したい。私どものような小さい会社でもできるということは、やる気になればどのような会社でもできるのではないか。

・たつの市の工場の隅にギャラリーをつくりたいと思っている。兵庫県ゆかりの作品を集めているので、地域の人にごく自然に見てもらえるように、工場と一緒に開放して、美術品のそばに、私たちが作った製品を展示するようなことをしたい。

【新しい物流システムで変化に強い経営が可能になる】

・他社と連携した物流システムを構築して注文があれば工場か倉庫から直接出荷できるようにしたので、固定費用なしで物流ができる。準備は面倒くさいが、今のうちにやっておけば、オフィスがなくなっても、売り上げが上がっていっても、そのまま拡大していける。逆に、大きい会社は、自社倉庫と自社工場を持つので、何かあってもすぐに変えにくくなる。早いうちに、状況の変化によって、いつでも体制を変えられるようにしておくことが大事だ。

【モノが少なくなる社会では製造業は小さくなる】

・部品などの「モノ」が少なくなっている。東京都の太田区や東大阪市の中小企業を見ても、金属加工の事業所が確実に減っている。この先どうなるか、事業をやっていけるのか我々の方が教えてほしい。

【物質的に残る分野でものづくり事業を展開する】

・人間や物質がある限りモノが完全になくなることはない。例えば、医療分野は手術等の行為自体は残る。経営者としては、物質的に残る分野はどこかと考えながら事業を行っていくしかない。ただ、生産工程のオートメーション化は進むだろうから、雇用の受け皿としての製造業は縮小していく。

【日本のものづくりの優位性はもはや無い】

・技術的熟練者が減って、日本のものづくりに危機感を覚える。一方、世界人口が増加し、海外のマーケットが広がるなかで、海外のものづくりのレベルは着々と上がっている。

・30年前、深圳に進出した当時は、中国には精細なバネを生産する技術がなかったが、日本企業の優位性はもはや無くなっている。東南アジアもすぐにそうなる。

【現在の延長線上で考えていてはダメ】

・価値観や行動の変化が大きくなってきていて、その変化に対応する新産業が今後30年でたくさん生まれているだろう。しかし今、それが何かを言うのは難しい。

・我々は5年、10年先を見ている。30年先のものづくりが、どんな姿になっているかは、全く想像できない。今までの30年とこれからの30年は変化のスピードが格段に違う。

・大手自動車メーカーが静岡でやっている実験都市がなぜ兵庫でできないのか。兵庫には、こんな産業がある、あんな産業があると内向きに国誉めを言っているだけではダメ。2050年と言いながら現在の延長線上の姿しか示せていない。

・豊岡かばんのような地場産業でも、ブランド化して頑張っているが、未来のことについて明確にビジョンを持てている訳ではないと思う。

・頭の片隅でいつも、今のままではいけない、新しいことをしないといけないと考えている経営者を増やしたい。そういう思いを人に伝えて、ディスカッションできる場がほしい。

07進化する御食国

【地産地消・旬菜旬消をめざすべき】

・人と環境にやさしい農業と書いてある。ずっと私が言っているのは地産地消、旬菜旬消である。フードロスもそうだが、相当数の規格外品が捨てられている。路地栽培とハウス栽培では、かかるエネルギーが4倍違う。地元の旬のものを食べると、移動コスト、エネルギーも使わない。フードマイレージという表現もある。東北で作ったものを

スーパーに行って買うのは、時代に逆行している、と次第になってくるはずだ。

・旬のものは健康にいい。弱点はその時一斉にできるので、食べ飽きる。だが、それが自然の理にかなっていて、エネルギーも余計にかからず、結局楽である。そういう旬菜の食べ方を給食の時間に、こんな食べ方があるとか、栄養がいいとかを教える必要がある。野菜の切り方一つでも、食べられる、栄養ある部分を切って捨ててしまっていることがある。

・規格外のものを生かさないといけない。遠くに送るのではなく、地元で生かす、そういう社会になっていかないといけない。

・淡路は日本農業遺産に認定された。三毛作を行っていて、年中畑が動いている。牛を飼って、その堆肥を農業に使って循環させている。そういった文化が昔からあったことが評価された。

・農業の過少保護よりも、サプライチェーンのあり方を問題にすべき。生産から輸送まで全体をどう循環型にするかということが大事。

・流通経路を変えないといけない。地産地消のモデルを作るとともに、オンラインで丹波のものを神戸でも、大阪でも買える状況を作っていく必要がある。

【大産地をめざせ】

・地産地消は甘い考え方だ。兵庫でちゃんと栽培したら大産地になれるのに、最初から地産地消では、自分からハードルを下げてスタートしているようなもの。その領域は趣味でやっている人たちに残しておいて、本気の農家には大産地をめざすように持っていくべきだ。

・果樹にしても何にしても産地は集中している方がよい。大産地は北海道か九州と決まっており、そこには大規模なプランテーションがある。お客様から見て安く、効率的に作れるのであれば、それが正しいと考えた方がよい。

・産地を作るべきで、今色々な作物がごちゃ混ぜになっている。その構成自体がおかしいという認識を農業改良普及センターが持つべきだ。トマトはこの地域以外は禁止する、その枠でやる農家には、こういう助成がある、という形にしていく。「荒れくれ者兵庫」のような形で、もっと大胆に変えていかないといけない。今まで守られていた人が焦るようなことをもっとやるべきだ。

・残すべき農業の振り分けをするのは、早ければ早い方がいい。人口が減っていき、あらゆるものがシュリンクするという前提の時に、放っておけば人がいなくなるような場所に人を持っていくような施策はやめた方がいい。

・農政が大規模化・法人化だけの路線になってしまうと、兼業農家で、自給＋αの食べ物を作れたらよいと思っている人たちの居場所がなくなってしまうので、その領域も一定残すべき。両者が共存できる環境を作った方がいい。

【産業として成り立つ農業をめざすべき】

・オランダは強ければ残す、弱ければ残さないという政策を取ったことで、農業が主力産業の一つになった。都市近郊産地では、鮮度感に特化した品目の生産拠点を作るなど、その土地のポテンシャルを最大限生かすようにすべき。関西の産地は、どこもしょぼくて、プレイヤーもグダグダ。農業も雇用を生み、きちんと納税できる産業にしないといけない。

・法人化と大規模化は分けて考える必要があって、まず必要なのは法人化。法人化して軌道に乗れば、必ず大規模化に移行していく。優良農地を集めて一気に耕作するという風に自然となっていく。

・農家の課題は、十分な収入が得られないことと、安定しないこと。経費等を差し引いた手取りで、最低500万円ぐらいの年収があれば良いが、一部、施設園芸などを営む農家で元気なところはあるがなかなかそこまでいかない。

・今までの農業は、定年退職後にサブ的にするもの、というようなところもあった。しかしそうではなく、事業として自立した農業ができるようにしていかなければいけない。

・多品種で混作したり、複合的に事業をしたり、戦略的に展開していかないと、単作でやっているところは、生活や教育にお金がかかるなかで自立して農業を続けていくのが厳しくなる。

・誰のために何のために、ということを最初に決めないといけない。今の農業の状態は、県民の負担の割に返せているものが少ない。相当の税金が入っているのに、農業者にその自覚がない。そんな状態のままで、兵庫県の中で農業に価値を見出せるのか。

・大事なのは、何人来るかではなくて誰がくるか。1人でずっとやっていく人ではなく、100人雇えるような人材に来てもらう必要がある。そういう土俵

を用意するのが行政の役割だ。

・デジタル化だけでは多くの人が食べていけないので、農業を産業政策のもう一つのメインに据えるべきだ。農業は大きなイノベーションが期待され、現に米中がスマート化で鎬を削っている。人工衛星の活用が一つの鍵だ。兵庫県は北から南までいろんな条件の地域があるので、もっと農業で稼げるはずだ。

・農業を変えるために、まず、今のままの農協とは縁を切る。それぐらいのことを考えないといけない。

・今後日本の食料自給率の低さがシビアな問題になる。日本は大型化、スマート化すれば、もっと農業で稼げる国になれる。

・スーパーで売ってもらうという発想自体が古くなり始めている。スーパーで買い物する時代は近いうちに終わる。

・農業のイノベーションの方向ははっきりしている。いかにおいしいものを人の手をかけずに効率的に作るか、それをいかに直接消費者に届けるかだ。うまくやればめちゃくちゃ儲かるビジネスになる。これを徹底し、規制は特区で取り払う。兵庫の新ビジョンがその戦略を示すものになれば素晴らしい。

【農地をフルに活用する】

・農地の活用は、基本行政がやることになっているが、ほとんどできていない。もっと民間を使うことを考えるべきだ。民間が入ることで転用されて悪い用途に使われてしまうことも起こり得るが、そこは制限をかけて、地域を守る仕事に行政が集中し、農地の有効活用自体は、もっと民間に委ねていくべきだ。

・今は農地情報の基盤が県と市町で共有されていないために、県がマネジメントできない体制になっている。システムの統一化ができてはじめて、県が市町に指導・助言できるようになる。

・農地の集約に県の中間管理機構を活用しているが、なかなか集まらない。高齢者がそこまでたどり着かないということ。農業は地域とかなり関係が根強いため、地域の人でないと貸してもらえない。

・衛星データを使えば、耕作放棄地のデータマップが作れるし、AIの画像識別で植物の育成状況や、圃場の土質もわかる。衛星データの活用はものすごく大きな可能性を秘めている。

【県民皆農でみんな元気に】

・スペースがあったら各家庭で簡単に作物を作れるような技術の普及も大事だ。

・たくさんある空き家を壊して、畑にしたら補助が出るなどの取組も考えられるのではないか。田舎の人たちは、うちは何かあっても食べるものがあると言える。農業をみんながやることで、お年寄りも、生きがいが得られ、リズミカルな暮らしにもつながって、自然とともに暮らしていく感覚は、体を元気にすることにもつながる。

・市民農園が昔以上に人気が出ている。あれは本能的な回帰だと思う。県民皆農、みんなが農業のプチ知識を持つようになればよい。

【スマート農業で誰でも働きやすい農業に】

・「下町ロケット」の自動運転トラクターは既に現実にある。実はトラクターでまっすぐ走るのは大変だったりする。特に田舎に行くと高齢化で助けてくれる若者がいないと、お年寄りがトラクターを走らせるのは相当大変。そういうところでテクノロジーが必要。

・徹底したDXで一次産業の固定概念を払拭してほしい。農村の魅力も向上させることができる。

・農業は長時間労働が課題。全自動化すれば今の課題は全てクリアする。全自動化することで農地の価値も上がる。

・農業がフルオートになれば、食べ物に一生困らない。これがもう一段進んで、出荷までしてくれてお金まで自動的に入ってきたら働くという概念そのものが変わる。

・スマート農業は、誰もができるわけではない。スマート農業ができるかどうかは、デバイスの問題ではなく、データを使えるかどうかだ。膨大なデータがあっても使えなくては意味がない。みんながデータを使えるとは思わない。やれる人がやればいい。ただ、できるようになれば、作れる規模、創出される価値の量が大きく違ってくる。

・スマート農業について、「土に触る大切さがある」ことを否定するものではない。では、日本の農業の衰退を議論するときに、必ず言われるのは儲けられない、生活が出来ないということ。その事実をどう変えるのかを考えるときに、スマート農業も一つの選択肢だ。テクノロジーで一つの課題が解決できれば、自然の土にさわる農業の方も、もしかしたらもっとより良くなるかもしれない。

・スマート農業を進めることで障害者の方が働き

やすくなるのではないか。儲けるためのスマート農業ではなくて、弱者にも働きやすい農業を支援していくべき。

・皆がプチ農園を持つようになると、今農業している方の職はどうなるのかと思った。特殊な野菜や付加価値のある野菜など、スマート農業も駆使して、誰にも育てられない作物に特化していくのが専門の農家の方向性かなと感じた。

【スマート農業にも課題は多い】

・スマート農業は資本金がいる農業であり、兼業が多い兵庫県の特性からも推進すべきではない。

・自分の手で土を耕すことに価値観を持っている若者も多い。スマート農業とかフルオート農業といったハイテクは、人から豊かさを奪ってしまうこともある、ある意味で危険なものでもある。

・スマート農業が進むと、都会に大植物工場ができるようなことにもなるが、それでよいのかなと感じる部分もある。未来に託していく課題と感じた。

【ブランド力の強化】

・山田錦など北播磨の特産品も、ブランド力を高めていかなければ生き残れない。さらに、最先端の技術を活用し、農業の大規模化を図りながら競争力を高めていく必要がある。

【水の確保が大切】

・農業は、水、温度、光が重要で、特にその中でも水が重要。水がないと光合成ができない。

・水がないと生産量も確保できないので、県としては、配管事業に注力すべき。淡路島の農業がうまくいっているのは水の確保ができているから。新規就農するにしても、水利組合との関係などが大変な負担になる。

・米は儲からない。技術を勉強すれば、果樹や野菜で生活できるぐらい稼ぐことができる。しかし、やはり水がネックになる。農業の基盤である水を確保できれば、どんどん農業者が参入してくるはず。実際に京都では、自治体が整備して、すぐに参入してきた。

・うちでは、水を確保するために、300万円以上をかけて井戸を掘った。環境制御のハウスでの園芸販売で20作ぐらいする。

【農業をおもしろいと思う人がもっと増えてほしい】

・夢は、農業が面白いと思ってくれる人がもっと増えればいいなということ。普通の会社では一個のことをやるだけだが、経営から物を作るまで一連してできる。やったことが結果にそのまま出てくる。その辺が面白い。大変さ自体に面白さを感じる。

【育種にもっとお金をかけるべき】

・育種にお金をかけるべき。県独自につくりだせば、県外にお金を生む。それをうまく進めているのが、山形県で、ブランド化している。

・加西の研究所も全然育種をしていないので、育種に力をいれるべき。

・兵庫県は、樹形改良など、小規模で効率的に行う技術に長けている。今ある技術をうまく使えばいいが、それを指導する人材がいない。補償も強みを持っている部分に投入すべきだが、薄蒔きになっている。

・苗で収益が全然違う。篤農家に苗作りを集約させる形で育苗センターを作り、イチゴならこの苗と選択と集中をして、利益が出る苗だけを使った方がいい。特に新規就農の人が困るのは苗なので、良い苗を使える環境を県として作った方がいい。苗にとことんこだわり、世界に通用するブランドを立ち上げられたら面白い。

【農業の効率化を】

・JAのハウスの予算はかなり高い。自主施工すれば安く済む。今考えているのは、若手の農家は冬暇になるので、50人ぐらいでハウスをつくるチームをつくろうと考えている。ハウスは高齢者にやさしく、人も雇いやすい。

・補助金を使って農機具を一軒ずつ持っているが、無駄。70代の高齢者の組合員が持っていても、管理する人がいない。中古でもいいから貸し出しを行った方がいい。これもパッケージ化すれば、参入してくる人も喜ぶ。

・露地栽培の農繁期は偏っているが、ハウスなら年間収穫できる。また、農業と別の産業を結びつけるなどして、年間を通して人を雇える環境をつくらないといけない。

【有機農業は難しさを理解した上で取り組むべき】

・有機農業は出荷率が低く、3～3.5割しかない。普通の農家は7～8割。つまり倍植えても一緒の量が取れない。

・マーケット調査で有機野菜をいくらまでだったら買うかを聞くと、一番多かったのは、通常の野菜と同じ値段だった。なぜ3分の1しか採れないのに、同じ値段なのか。そもそも有機をやる意味は何なのか。有機の商品は回転が悪いのでスーパーの棚で真っ黒になって転がっている。これは違うのではないか。

・行政が有機農業を進めたいのなら、自分でやってみろと思う。言うのは好きにしたらいいが、やらせてその人の人生がどうなるのか、責任取れるのかまで考えないといけない。
・県が有機を推進して、誰が買うのか。有機農業をやる人は労働時間が長く収入は低い。本人は好きでやっているからよいが、家族はそれでは済まない。そういう情報を正しく伝えることで、ミスリードすることを防げるのではないか。ちゃんとやれば、ちゃんとご飯が食べられるのに、もったいない。

【淡路の地の利を最大限生かす】
・スペインのサンセバスチャンがすごいというが、淡路島もそのようになれる可能性がある。こんなに条件に恵まれた淡路島で新規就農に失敗するような人は、日本中どこに行っても失敗する。条件の良さでは神戸西か淡路島か。自分で好き勝手やりたい人には淡路島は最高だ。
・淡路島がそれだけ特別な理由は、販売チャネルの多さ。就農してすぐに「淡路島」という下駄をはける。流通が複数あり、神戸までマーケットに入れてしまうと、結構な数の直売所もある。
・新規就農者に対しては、淡路島や神戸西で農業をした場合の収入を計算すると、他地域よりいい数字が出るので、本気で就農して欲しければ、そういった点も言っていくべき。
・農業でうまくいっているのは、但馬と淡路ぐらい。特に淡路は、米、たまねぎ、レタスの3毛作で一年中収穫できる。これは日本一の手法。

【農福連携に工夫を】
・農福連携について危惧している。農家が収穫の指導を考えないといけない状況は無理がある。それよりは選果場で箱の組み立てを行う方が良い。作業所で単調な箱作りをする方がよい。農家は箱作りをするのも大変なので、作業所に発注するはず。その方がマッチしている。

【助け合いで農業を楽に】
・実家が農業をしていて、自分も将来的には農業に従事すると思っているが、一人でやるとしんどいと感じるので、みんなで助け合いながら農業ができる、そのようなコミュニティがあればいいと思う。
・春夏忙しい農家と秋冬忙しい農家が近くなら、パートの行き来ができる。農家同士の繋がりができれば、もっと雇用しやすくなるのではないか。

【植物由来肉の可能性に着目する】
・植物由来肉については、日本は世界から見るとおかしな方向に進んでいる。日本の大企業がこぞって大豆ミートの開発に力を注いでいるが、欧米では、大豆ミートは大豆くさくて、食べるにも、揚げて中華風にしたり、味付けでごまかしたりする。むしろ、大豆以外の素材を使うのが世界の主流になっていて、大豆にしても、きのこや海藻で旨みを足して調整している。
・大豆ミートは日本の得意分野ではあるが、あまり広がっていない。すでにアメリカでは魚の代替食品もスーパーで買えるようになっている。乳製品の代替品なども、もっと増やしていかないといけない。

【県内企業ネットワークを活かして物流コストを下げる】
・食品については、県内の小口物流基盤が整備され、企業側の物流コストが減ると、資金力に乏しいアーリー期のフードテックは自然に集積してくると考える。
・食に関しての記述をもっと入れてほしい。兵庫県の食品事業所の数は全国で2番目ぐらいに多い。北海道が一番多く、その次に静岡、愛知ときて、兵庫県も同じくらい。2番手が3県横並び状態なので、「2番目ぐらい」という言い方をしている。
・事業をするに当たっても、組む相手が県内に多く、工場同士が近いので、物流のコストが下げられる。兵庫県は結構有利な環境にあると思う。

【和食の文化を大切に育てていくべき】
・御食国と言われるが、若狭、志摩と比べて和食が弱い。和食の文化を大切にして育てていく必要がある。和食の職人を養成する場所を作れないか。

【「シェフインレジデンス」を県内でできないか】
・城崎のようにアートインレジデンスで盛り上がっている地域を見ていて思うのは、シェフインレジデンスができないかということ。五国それぞれ食材も違って豊富なので、一流のシェフが県内を巡回しながら、各地の食材を使って新しい料理を作り、地域の人と一緒に楽しむようなイメージだ。シェフインレジデンスの拠点になるような場所が各地にあったらいいと思う。泊まる場所にキッチンがあってもいいし、スーパーの空き床などを活用することも考えらえるのではないか。

【都市農業をもっと推進すべき】

・食料自給率を高める必要がある。そのためには、もっと効率化しないといけない。つまり工場化していかないといけない。それをどこでやるのかという課題がある。理想としては、日々野菜を運んでいて、流通コストがすごくかかるので、都会で作った方がいいと思っている。例えば兵庫区の空き地にハウスを作って水耕栽培を行う。こうした都市農業を産業化すべき。固定資産税の減免や補助金で誘導すべきだ。国も都市農業に力を入れ始めている。この領域でイノベーションが起きるだろう。

・パリにアグリポリスという事業者がいて、パリの街中のビルの屋上で農園を作っている。周囲2km圏内の人が買いにくる。その場で採って買うので、めちゃくちゃフレッシュ。こういうのを実現したい。コストはギリギリでやっているようだが、結構巨大な農園もできている。

・日本でアグリポリスの農園をやろうとしたら、風が強いので、風対策が重要。でもブロックで塀を作ってハウスを建てたらできるのではないか。神戸市内の市街地の空き地で進めていきたい。

【フードロスをなくし食が行き渡る社会に】

・賞味期限1/3ルールは1970～80年代にできたルール。店舗では長期間商品を置きたい、あるいは新しいもの置きたいという傾向があり、消費者は手元に置いておいて長く使いたいという思いもある。そのため、賞味期限ぎりぎりより長いもの買う傾向が強い。消費者側からしたら良いと考える人もいるが廃棄量は増えるし、結局、食品価格に転嫁されている。

・誰にでも食料が行き渡る社会を行政も考えないといけない。一人親は自己責任という風に長い間、片付けられていた。福祉フェアでブース構えて活動を説明していると、年配者からは一人親は自己責任ではないかと指摘される。逆に私ら高齢者に回してほしいといわれた。そういう考えを持つ人は多い。近年、自己責任だけではない、という考えが広まり、国、自治体も一人親に対する給付といった支援の流れができてきた。

・個々の人たちを支えるところを食で支える必要があると考えているが、食品を送ったところで根本的な生活の状態は改善しない。我々の活動は、一つのツールでしかない。

（2）開放性の徹底

（主なキーワード）

（主な意見）

08多文化が入り混じる兵庫

【外国人との共生は兵庫の課題であり特徴】

・長田区は中国、韓国、朝鮮、ベトナム、フィリピンの方がたくさんいて、言葉の問題、文化の問題がある。日本に溶け込んでもらうという考えもあるが、文化も言葉も日本とは全然違うことに留意する必要がある。

・昔は外国人を蔑視してしまうという問題もあった。神戸は特に外国人が多く外国人学校もある。多文化だけではなくて障害者の方ももちろん含めてそういう人たちと一緒にどう暮らしていくかというのは神戸、兵庫の1つの課題である。

・神戸は、中国やインド、イスラムの方など多国籍で、その宗教や文化を受け入れている。この寛容性をもっと伸ばしていきたい。

・世界の一体化が進み、地域産業の担い手として外国人の存在感が高まっていく。旧来からの住民だけでなく、こういう新しい人や外国人との交流が大切。

・北播磨地域は、外国人が急増しているが、無意識の偏見をなくして、多様性の先進地になっていく必要がある。地域コミュニティとしてのつながりをつくったり、幼少期からの英語教育も率先して行ってはどうか。

・神戸に本社を置く大手医療機器メーカーには海外籍の社員が多く、兵庫・神戸が大好きでこれからも長く居続けたいという声を聞くことも多い。開かれた街として今後も活性化して欲しい。

・学習教室で外国人の子どもたちに勉強を教えるボランティアをしているが、ナイジェリア、パキスタン、ネパールなど今までにない国の人が集まっている。労働者、技能実習生、留学生のお子さんだったりするが、2050年はもっと増えている。多様性に富む兵庫だからこそ、そのために何ができるか考えていかないといけない。

・外国人の従業員も何人かいるが、すごく優秀である。地域の産業を支える人材として、外国人が増えてくると思う。昔の日本の「24時間働けますか」の時代の勢いがある。日本人は負けていくのではないか。

・国内で多様性に触れ、解決することで、多様性を受け入れる力がついてくる。ビジョンの中にも国際性や多様性をさらに盛り込んで欲しい。

・ミックスの子どもが、学校へ行っても言葉が通じなくて、勉強が分からなくなってしまうのはすぐ分かることなのに、それを救おうとせず、言葉が通じない子は県立高校に入れないといったことが起こっている。現実は勉強ができる子だけ来てくださいという運用になっている。
・神戸は外国人が多いはずだが、近くにいても接点がなく、なかなか交わる機会がない。
・当社では関西大学の留学生を受け入れている。大学のコーディネーターにお世話になっていて最初にビジネスマナーなどを教えている。そういったコーディネーターがいたら、もう少し接点が増えるのではないか。
・これから人口が減って働き手が少なくなっていく。そんな時に、移民を受け入れていくことで、働き手の問題は解決され、兵庫県としての多様化も進展していくだろう。しかし、移民を受け入れることで、言語や文化面での問題が発生し、トラブルが増えてしまう。そのトラブルを起こしたままにはせず、コミュニティを増やしていくことで、相手を見る目が変わったり、お互いに理解出来るようになるのではないか。
・外国人が多い企業に勤めているが、神戸は住環境も良く、医療産業都市など最先端の産業があることも素晴らしいと言っている。多様で多国籍なまちづくりに期待している。
・黒人差別やアジア人差別をメディアを通して見る中でやはり深く考える必要がある。また、在日外国人が多くいる兵庫県ではより深く考え、互いの文化などを理解し合い、尊重する必要がある。
・娘の学校で外国人へのいじめがある。いじめを受けた子どもが誰にも相談できずに閉じこもってしまうのが心配。子どもが頼れる場所が必要。
・大阪のIRが実現すれば、巨額の経済効果、新規雇用が見込まれる。さらに、海外から多くの外国人が来る。阪神地域も、地域に外国人を積極的に受け入れて活性化していかなければならない。どうすれば外国人が入ってきやすくなるのか、課題を考えていきたい。
・伊丹は大阪、京都、奈良にも近い点でポテンシャルが高い。特に最近は、ビジネスで外国人が増えてきたことを実感するが、伊丹は海外との窓口になり得る場所。姫路城や神戸など兵庫全体で発信力を高め、人を呼び込むことで、伊丹も豊かになる。

【多様な価値観を学ぶ場が必要】
・多様性に配慮しない発言をした地位のある方々への苛烈なバッシングが見られる。こうした発言を放置すべきではないが、発言した人を叩くだけでは解決しない。アメリカでは差別的な発言をした人に対して「多様性研修」を受けさせる会社があり、なぜ、多様性が重要なのか、なぜ人種差別はいけないのかといった、新しい価値観、考え方を学ぶチャンスがある。兵庫県でも、こうした取組を是非やってもらいたい。

【移民のあり方を真剣に検討すべき】
・東京への一極集中が相変わらず加速している。人口が減少し就業人口が減って地域経済が痩せ細っていくことが心配。外国人の雇用を考えないといけないということもあるが、では、どのような形で受け入れるのか。移民なのか、単に労働力を確保するだけなのか、この辺りを考える必要がある。
・国は出生率を上げると言いながら、まったくできていないが、他国を見ても少子化対策がうまくいっている国はほとんどない。女性が働くようになると、出生率が下がる。人口減少を解決するのは移民しかないということは世界を見てもはっきりしている。
・人口減少による労働力の減少対策としては、海外からの移民を多く受け入れ、外国人労働者として日本人同様に働ける環境をつくっていくことが大事だ。
・ダイバーシティを高める上で外国人の存在は大きい。シンガポール、オーストラリア、カナダがやっているような知識人、技術者などに絞った選択的な移民政策をやるべきだ。

【外国にもっと興味をもつべき】
・日本人の生徒は、外国に興味がなさすぎるのではないか。興味があってもアメリカぐらい。もっと外国の文化に興味を持ってほしい。

【共生の前に交流がいる】
・最近「共生」について改めて思った。日本人が支援するだけなのは「共生」ではない。こちらも頼ったり助けられたりして「支え合う」視点が必要。「多文化共生」より一つ手前に「交流」が必要。
・日本人も、世界を知ることで人生が豊かになる。外国に行かなくても、外国を感じられるし、良い経験を与えてもらえる。日本人はそうした人生を変えるようなチャンスを活かしきれていない。

【外国人とのコミュニケーションのハードルは必ず下がる】

・言語の壁は、心の距離の一つの要因であるが、既にポケトーク（翻訳機）はかなり使える。おそらく30年後は、色んな言語の人が集まっても、特に設定などせずに、多言語を自国の言語で聞くことができるようになり、コミュニケーションのハードルは間違いなく下がるだろう。

【海外での事業展開もリモートで可能性が開けている】

・製造業や食品関係でも、タイ、中国、ベトナムなどに工場を持っており、コロナ前は必ず現地を訪問して指導していた。今はリモートで生産管理をしているが、今まで出張にいっていたことが不思議なくらい可能性を実感している。海外には若い力がある。今後世界と連携して食糧問題など社会課題を解決するというビジョンも考えられるのではないか。

09世界に貢献する兵庫人

【国内でも生き方の選択肢があることに気づくことが大切】

・若い時、日本に活躍の場がないと思っていた。海外に出て働きたいと思っていたので、日本の企業で働くことを選択しなかった。その後、いろいろな国で暮らし、働く経験を積む中で、日本国内で頑張っている人達を見て、国内で自分にもできることがあると分かった時に初めて自分にその選択肢があることが理解できた。

・学生のうちにたくさんの刺激を与えて将来の夢を広げるべき。日本の教育は「将来何になりたいか」といったことを語らせるため、職業を1つに絞らせがち。そうではなくて色々な刺激を学生に与えていけばもっと夢が広がるはず。

【相手を尊重してコミュニケーションをとれる人が世界で活躍できる】

・海外に行って活躍できる人材をどうしたら作れるか。アメリカの大学在学中に、コミュニケーションをとるという部分で躓いて帰国した日本人を何人もみた。教育の問題なのかもしれないし、自分の考えが世界のスタンダードだと思ってしまったのかもしれない。私自身も丹波で育ったのでそういう感覚をもって外に行って、だめだということに気づいた。

【世界との接点を持ち続ける】

・海外には日本と違うそれぞれのルールがあって、それに対応しないといけないので、かなり作り込んでからでないと展開は難しい。そういう意味では、普段から海外の方と接点があると、その国の独自ルールを知ることができるので、接点の必要性を感じる。

【海外から日本の教育を見る】

・SDGsで途上国支援がまた見直されているが、海外出身の方の意見も聞きながら、若者が活躍してくれたらと思っている。そういう活動をしてもらえるように、私たちが伝えていくことが大切。海外から、日本の教育がきちんとできているのかということを見るのことも大切。

【兵庫という枠にこだわることに意味はない】

・ボーダーレスで世界中がつながる時代に、いつまで「兵庫県が」と言い続けるのか。もう「地球人」でよいのではないか。地域性を強調する意味がなくなっていくと思う。

【世界から選ばれる地域をつくる】

・これからは世界とつながっていく時代。世界中どこにいてもつながっていく。世界の中から選んでもらえる地域でないといけない。

【リテラシーを高める】

・今したいことは、田舎であり世界の課題先進国である日本から課題を解決していったことによるデザインのあり方を輸出すること。意識を少し変えるだけで、ものすごく課題だったものが輸出までできる可能性もある。そこの壁は結局はリテラシーの問題だと思う。

10なくなるジェンダーバイアス

【意識は変化しているが依然として大きな課題】

・ジェンダーギャップは難しい問題。僕らも親世代のそういう姿のを見てきた世代であり、まだ男は働いて妻は家庭を守るといった感覚を持ってい

るが、そういう意識は、大分薄らいできていると思う。ただ、いまだに育休、産休が取りにくいというようなハードルはかなりあり、また、徐々に縮まってきてはいるが、同じ年齢、キャリアであっても男女で収入格差がある。

・私は皆さん方の親世代で、「男は仕事をがんばる」「子育ては女性の仕事」という時代を生きてきた。だから孫を育てるのに意識が食い違ってくる。女性が本気になったら男性なんて及ばない。すごい力を持っているのが女性。それと情け深い。愛情、人に対する思いやりはやはり女性には敵わないとつくづく思う。

・男女平等は我々がもっと勉強していかないといけない。人を大切にするというのは、やはりそういうところから始まる。女性男性分け隔てなく一人前として認めなといけない時代である。

・アメリカ人の夫とは、家庭で、今のままではこの国で娘を育てられないと話している。それぐらい女性が一人の人間として尊重される環境がない。だからこそ私たちが声を上げないといけないと思っている。リテラシーの問題である。

・古い価値観が当たり前の時代に生きてきた人に、考え方を根本的に変えなさいといっても難しい。私自身、外で働く父と家庭を守る母という環境で育っているので、そういう考えが自分の中でも浸み込んでいて、共働きでも家事の割合は私の方が多い。同世代の友人の話を聞くと、夫が料理や掃除を担当している家庭が多く私もびっくりする。自然と変わってきていると感じる。

・海外の事例をもっとたくさん子どもに話して、日本人の特性や海外の考えなどを教育に取り込んでいくのが良いのではないか。そうすることで世代が変わるにつれて変わっていくのではないか。

・ジェンダーの問題は、高校生の時というよりも、もっと小さい時に周りの大人が関わっていかないといけない。対話というのはすごく大事なので、議論していったらいい。海外の教育がすべてだとは思わないが、日本の教育にも良いところも沢山あるので、海外の良いところは取り入れて議論していく。多様な国の人々、様々な世代の人々と対話をしていくことが重要。どれだけ色々な価値観に触れられるかということが大事ではないか。

・夫婦別姓をどうにかして欲しい。地方にいくほど家族が一蓮托生に見られる。子供のパートナーシップ制度があってもいいのではないかと思う。仕事をしていく上での課題もある。

・ジェンダーについて、意識的に女子を取り込み、明確に押し出していかないといけない。

・本当に女性が活躍できる社会になるのか悩んでいる。自分の経験から、会議でも女性が一人だと、意見を言ってもスルーされるので、女性が3割以上いないと変わらない。

【性的マイノリティへの理解がまだまだ不足している】

・最初はLGBTの４文字だったが、自分がそこに入らないという人もいる。Qを足すと、そういう人も含む包括的な言い方になるし、これに「+」を付加すれば、更に包括性を持たせられる。

・開放性の徹底で一番大事なのはLGBTの話だ。ここが進むかどうかで全然未来が違う。

・人口の10％前後は性的マイノリティと言われている。今の日本は、性的マイノリティであることが生きづらさや貧困と結びついてしまう社会。性的マイノリティの存在を認め、同性の結婚を認めるなど、前向きに支える旨を明記すべき。

・兵庫県は広く、性的マイノリティの施策が進んでいない地域もあるが、そういう地域にも当事者はいる。県のビジョンで性的マイノリティについて明記することには大きな意義がある。

・法令や公の制度ではLGBTQ+は存在しない人とされている。自治体のパートナーシップ制度は具体的な効果もさることながら、存在を受け止めてくれるという心理的な効果が大きい。

・病院で家族扱いしてもらえるようにすることが、パートナーシップ制度導入の大きな理由。事実上夫婦なのに、病状を聞けなかったり、死に目に立ち会えなかったりということがある。

・性的マイノリティは潜在的には人口の8％程度といるとされているが、自分から言わないと普通はわからないので、ほとんどそういう人を見たことがないという人が多い。

・言えない裏には性的マイノリティに対する偏見や差別への恐れがある。それが潜在的にいると言われている数字と、実際見えている人が本当に少ないこととのギャップの要因だ。逆に言えば、人知れず苦しい想いをしている人がどれほどたくさんいるかということだ。

・SOGIE（SO：Sexual Orientation（性的指向）、GI：Gender Identity（性自認）、GE：Gender Expression（性表現））の考え方を広めたい。自

分は男と思うか、女と思うか、恋愛対象として異性が好きか、同性が好きか、あるいはそのどちらでもないといったことは、すべての人に関わることで、SOGIEは誰もが持っている性の要素だ。性の問題は、みんなの問題である。
・SOGIEという言葉を使うことで、全ての人にとって自分事にしてもらいやすくなる。男らしく、女らしくという言葉に苦しめられてきた多くの人に関わる問題として捉えることができる。
・LGBTQ+の中で困りごとのタイプが異なることを知る必要がある。トランスジェンダーの人は、自分が本来こうだと思う性別で生きようとすると、見た目を近づけるなど性別を移行していく期間が結構かかるので、苦しい時期が長くなりがち。
・2020年施行のパワハラ防止法で性的指向、性自認に関するハラスメントも禁止された。自治体や企業には、パワハラ、セクハラと同様にソジハラ防止の対策を取る義務が生じている。
・年配の特に男性ほど、性の多様性に関して抵抗感を示す調査結果がいくつも出ている。若い人の方が多様性全般に関してオープン。世代間での価値観の違いは大きい。
・性的マイノリティ、性的少数者、LGBTQIAなど、いろんな言葉が出てくるが、全部イコールなので、用語は統一すべき。
・「性的指向に関わらず」よりも「SOGIEに関わらず」や「性のあり方に関わらず」といった表現の方がより包括的でよい。
・現実に差別があるので、単独条例を定めるところ、男女共同参画の条例に含めるところと対応は分かれているが、SOGIE差別禁止を盛り込んだ条例を制定する自治体が出てきている。
・教育が肝だ、いろんな人がいていいよね、違いがあっていいよねという教育の中で、性の多様性についても伝えるようにすべきだ。違和感を持って誰にも言えずに苦しんでいる子供がいる現実があるので、早い段階から始めていく方がよい。
・みんなが安心していられる環境に性の多様性は必須の要素だ。特にLGBTQ+の当事者にとっては、その環境がないことが、自殺にもつながる死活問題になっている。
・自分が男と思うか、女と思うかと聞かれて、それは男だとしても、100％男かと聞かれたら、実は90％ぐらいかなといったことは誰にもあることだ。性のあり方をグラデーションで捉える見方がこれから求められる。好きになる性別も、基本的には女性が好きだが、男性をいいと思う時もあるなど、各人がチューニングの幅を持っている。そのグラデーションの考え方が世の中に共有されていない。
・同性でも結婚できるなど、性別に関係なく生きやすい社会は、「誰も取り残さない」に必須の要素。これが自治体のビジョンの中に入ると、潜在的に悩んでいる人々の希望になる。
・県で婚姻制度を変えるのは無理だとしても、パートナーシップ制度を県内すべての市町で実施するよう促したり、国に制度改正を働きかけたりすることはできるはずだ。
・LGBTへの対応は、お金をほとんどかけずに、制度を変えるだけでできる施策。若い人たちへの大きなメッセージにもなる。

【LGBTQへの差別をなくすため多様性の教育が必要】

・LGBTQの問題は日本ではまだまだ浸透していない。差別をなくすため小学校から多様性についての教育を充実させる必要がある。

【性別は関係ないと言いながら性別を意識した記載になっている】

・LGBTQは認めるような感じを出しつつ、女性の管理職比率は上げると言う。性別は関係ないよねと言いながら、性別は関係あるように書く。こんなことをあえて書く必要があるのか。

【相手を理解するには大きな労力がいる】

・変わっていくことができない背景には、やはり根本的な男女差がある。女性は子どもを産んでいる間は仕事ができないし、その間、仕事で穴をあけるのは変えられない事実。そこを平等に扱ってくれというのは難しいこと。重大なポストを任せにくいというのも感覚的にはもっている。男女差がある中で相手を理解することに労力が必要となり面倒という感覚もあるのではないか。そこを理解することは大変なこと。それだったら排除してしまおうという感覚になってしまっていたのではないか。
・ジェンダーギャップを解消するというよりは、お互いに尊重し合える社会、風土づくりが大切で、女性の管理職を増やしても何の解決にならない。
・兵庫県は外国人居住者が多いので、同じ地域に住む外国人と言語問題や文化の違いが原因

でトラブルが起きないように、特に対策をしておく必要がある。お互いに相手の文化を理解し合い尊重することが大切。これらの問題は、何か一つのことをして解決できるような問題ではなく、人々の理解を得ることが必要で時間のかかる問題。少しずつでもいいから問題解決に向けて対策を行っていく必要がある。

・まずは一人一人の女性や外国人に対する意識を変えなければいけない。またこれは兵庫県だけの問題ではなく、日本そして世界の問題でもある。一人一人がしっかり意識をして、より良い兵庫、日本そして世界になってほしい。

・お父さんは好きで草刈りをしているわけじゃないかもしれないこと、そして、家事を担当している人が好きでしているわけでもないということをお互いに知って　感謝して励ましあったら今と同じ分担であっても気持ちよく作業できるのではないか。

【「らしさ」を消す風潮はよくない】

・昨今、マイノリティへの配慮を過度に推している風潮を感じる。女性の中には私は女性らしく生きたい、男性の中にはやっぱり男性らしくありたいという人もいるなか、そういう「らしさ」が置き去りにされているのではないか。

・最近ではディズニーの世界でも、ミスターとかミセスという呼称がどんどん消されていっている。多様なマイノリティの思いを否定するものではないが、マイノリティだけが優先されていくことに違和感を感じている。

・女性の活躍というところも、男性、女性それぞれが向いている仕事もあるので、バランスの柔軟性を持たせないといけない。

【男性視点の社会システムを根本から変えなければいけない】

・なんで女性、女性と言うのか。出生率は上げないといけないのか。産めといいながら女性に活躍しろという。本人が望んでいないのに出世させる。女性だから出世しなかったわけではなくて、その方々が選んで出世しなかった。それが、女性だから出世しなかったにすり替えられている。その時々に選んだことを許してほしい。活躍したいときに活躍させてもらいたい。そうなっていない社会構造の方に問題があるだけ。教育プログラムを変えること、時間をかけてステップを踏まないと昇進できない評価システムを変えること、得意なことがきちんと評価される社会に変えること、それが大切。とにかく男性視点だ。

【ジェンダーギャップは都市部だけの問題ではない】

・地域の中で女性の役割が増している。ジェンダーを都会の問題と捉えている人がいると思うが、地域の中でこそジェンダーの意識を拡げていくことが必要。

・豊岡市では「但馬では女性は補助的役割しか与えられない。だから若い女性が都会から帰ってこない」と言って、ジェンダーギャップ解消のプロジェクトを立ち上げている。うちも、一緒に取組みながら勉強している。

・地域では、ジェンダー格差は年齢が高いほど大きいという意味で”年齢のかけ算がある”と言われている。

【地域コミュニティでも女性の活躍が必要】

・シナリオの女性活躍について、「政治、行政、経済など様々な分野のリーダー」とあるが、地域コミュニティも入れて欲しい。

【海外の取組からも学ぶべき】

・2010年に文科省が主催する低年齢児童への公的支援をテーマに掲げた指導員交流会に参加し、ドイツに派遣された。ドイツは先進地と言われているが、西と東で子育てに関する考え方が全然違うし、男性と女性の考え方も大きく違う。ドイツのやっていることは、男女共同参画などこれからの日本を考えるためのヒントになるのではないか。

【価値観を共有できる企業を増やしていく】

・我々は女性にとって、働きがいがあり、働きやすい企業を増やそうとしている。同じような価値観を共有する企業を増やしていくことで、女性も帰ってきやすくなるのではないか。

【社会全体で固定観念からの脱却を】

・特性を生かして役割を持ち、自分の好きで選べる世の中でないといけない。固定概念で役割が決められている社会の仕組みを変えていくべき。そのためには個々の固定概念からの脱却が必要。

・家事をしている話をすると「女子力高い」といわれ、他にも「お弁当男子」「イクメン（子育てする男子）」など、これらは男性に対するほめ言葉なのか。マスコミが作った造語の数々をほめ言葉のように女子から言われるのに違和感がある。これこそ、ジェンダー平等ではない。子供達が授

業でジェンダーの問題を勉強して帰宅しても家庭の中がジェンダー問題にあふれていたら、教えられることと家庭内のギャップが生じる。この問題を自分自身、解決したい。

11活躍するシニア

【多くのシニアが地域課題の解決にも参画している未来を描いてほしい】

・これから人口は減り、高齢者が増える中で、元気な高齢者が多いにも関わらず、その行き先が、病院、デイサービス、パチンコなのはもったいない。多くのシニアがビジネスだけでなく、地域の課題解決に挑戦していると書いてほしい。

・社会参加の意識は高いが、それは人とつながりたい欲求があるからではないか。神戸北野のボランティアは日本で一番高齢化が進んでいる案内所と言えるのではないか。

・シニアが現役で働くのではなく、脆弱になっている自治会や地域づくりなど地域で活躍することが大切。

【シニアの活躍とあわせて100歳以上のリタイア世代の増加にも言及すべき】

・超高齢化では、活躍するシニアが増えるという話だけではなく、100歳以上人口が増えることで社会がどう変わるかといった新たな課題の指摘が必要。

【人とのつながりが活躍の場を広げる】

・私は今70歳だが、今の活動を在職時からやっている。在職時から始めて、少しずつつながりができて、つながりの中から次のつながりができ、またそれが新しいつながりを生むという形になってきて、今や大変忙しいが、すごく楽しい状況だ。やっぱり人のつながりが大事だ。それもこの年になって思うことで、昔は面倒なことをさせられて困るということもあった。

・姫路には60歳以上の人が入れる好古学園があって、大学院まで行くと6年通える。私はそこに行っていろんなつながりができた。そこに行くという最初の一歩は、その人が踏み出さないといけない。そのきっかけが何であっても構わない。とにかくまず自分から踏み出す、出ていく、ということだろう。行ったら何か面倒な役をやらされるといったイメージで、ひいている人が多いと思う。そこは個人差が大きいと思う。

・関係を広げる場はすでにいくらでもあるわけなので、一歩踏み出せる環境をどう作るかが大事。

・人とつながっていたいという欲求があるので、マッチングにはいろいろな可能性がある。

・何か余暇活動を持っていることが大事だ。以前テニススクールに通っていたが仕事が忙しくなってやめたら、それで関係が切れてしまった。働きながら一つでも何か仕事以外の活動をすることが、年を取って別の動きをしていくときに活きてくる。

・高齢でも働ける場所や、自分の趣味を見つけて充実させたり、社会・地域への奉仕活動や仕事で得た知識などを自分の経験を生かして後輩に繋いでいったりすることが大事である。生涯学習大学のようなところを早めに用意しておかないと、間に合わないと思う。

【活躍の場を先につくる】

・高齢者大学と関わる中で感じるのは、若い時にしたいことができなかった人たちが、定年退職をしてから、自分のしたいことができるというオーラを感じる。そういう層が今後増えていくのではないか。

・出口がはっきりしたら、それに向けて力をつけようとする。高齢者に活躍してほしいと思っているが、先に活躍できる場を与えるということも考えられる。

・定年を迎えてもなお労働意欲のあるシニア世代の方が働く場をつくる。まだ社会に出ていないということもあり、具体的な仕事は思いつかないが、遠隔操作ロボットやパワースーツを県から安価にレンタルできる制度をつくったらどうか。在宅で給仕や棚出しの仕事が出来るような未来があってもいい。労働意欲のあるシニア世代が年金を払う・払っていく世代の負担を少しでも減らせないものか。

【シニアアントレプレナーをめざせ】

・今、私は42歳で、55歳からはアグリビジネスをもう一度起業したい。1回起業して終わり、就職して退職して終わりではなく、いかに起業を繰り返していくか、シニアアントレプレナーのような生き

方をシニアになっても続けることができるかが大切。土壌とリテラシーの改革が重要であると感じている。
・資金や資金調達先を持ち、いかにコネクションを使って若い人と組んで、新たな事業展開をするかという、シニアの起業に向けた土壌づくりをしないといけない。

【老人クラブは変わらないといけない】

・これだけ高齢者ばかりの地域になっているのに、地域の老人クラブの会員は減っている。クラブ自体が時代に合わせて変わっていく必要があるのに、全然変わっていない。デイサービスの練習みたいな老人クラブに人が集まるわけがない。老人クラブのあり方は、それを誘導している行政の補助金の出し方と関係している。補助金があるので、この活動をやらないといけない、といったことがある。是非見直してほしい。

【いつまでも活躍したい人ばかりではない】

・人生100年と言うと聞こえは良いが、死ぬまで働かないといけない社会になるのではないか。
・活躍することを全てのシニアが望んでいない。シニアだけを誇張するのはどうか。
・2050年には私は米寿であり、活躍したくてもできないし、活躍したくもない。

【もっとわがままに働きたい】

・今年66歳で働かされ続ける。シニアが働くのはいいが、もっとわがままに働ければいい。あまり責任を押しつけず、上手に使うことが大事。新隠居、半隠居、半休半業など、戦略を練る必要がある。
・「活躍できるシニア」という表現の方がよい。フルで働き続けなければならない社会がくるようにも受け取れるので、活躍することもできるし、自由に生きることも選択できるという含みをもたせるべき。

【70代でも地域を守る力はあるがその先が心配】

・若い人がいないから地域を守る力がないかというと、そんなことはない。70代の人たちの知力と体力は頼りになる。この人たちがいたら十分。ただ、今はいいが30年先の将来はどうかというのが今回のビジョンで考えることだと思う。

【ITを使えるシニアをもっと増やせ】

・テクノロジーの活用は非常に重要。ITを使えるシニアを増やして、地域産業の担い手として活躍してもらいたい。
・高齢者がパソコンなど、デジタルを使いこなせるように支援することが必要。どんどん技術は進むが、メールさえ自分で打てない人は多い。
・高齢者が働く上での問題点として、体力的、能力的な衰えが1番に挙げられる。テレワークや発展した通訳機能などを積極的に活用でき、課題をテクノロジーで補える仕組みを整えられたら良い。大人でもインターネット等を学べる機関をつくる、そういう取組を行う企業への投資などを行政などが手助けしていくことが必要。

【シニアの活躍を支える中間支援が必要】

・地域において、シニアに働いてもらうには、きめ細やかな中間的に動ける人が必要。また、責任を押しつけずにシニアに働けるようにすることの意義はわかるが、現役として、シニアに働いてもらうなどバランスが必要。

【シニアの健康を支える取組がいる】

・50年後の日本は社会保障が揺らぐ時期でもあるので、年金に頼らずに自分で稼げる社会になって欲しい。高齢者の活躍には、体力の衰えをサポートするようなサービスを行う必要がある。

12ユニバーサルな地域

【不登校は1つの選択肢として理解する】

・不登校の出現率が高まっているが、それは子供自身の不登校傾向の高まりというよりは、不登校しやすくなったからだと見ている。2018年に教育機会確保法ができて以降、不登校をネガティブに捉える傾向が弱まり、不登校が一つの選択肢になってきた。昔のような「不登校＝不適合」という認識ではなくなってきている。
・「精神障害やひきこもり、不登校など心の健康を損なっても」という表現は改めた方がよい。「不登校＝心の健康を損なった状態」という認識ではなくなってきているし、不登校系の活動をしている人に間違いなく引っかかる表現だ。冷静で平常な心で学校に行かないという選択をしているだけのことだと言われる。

【生きづらさや孤立への対応が課題】

・生きづらさや孤立への対応が今大きな課題で、最近ではヤングケアラーの問題も出てきている。都市と地方で県の果たす役割が違うということも意識しておいてほしい。

【行動に移すことが大切】

・エンパシーの捉え方が違うと思う。共感性と共感行動は違う。大事なのは共感行動ができることで、それがエンパシーである。心の中で何を思っていても、そういう行動ができればよい。共感行動は一種の技術であり、それを育む教育が必要。

・30年前、三ノ宮駅にエレベーターは構造上設置できないと当時のJRは言い切っていたが、兵庫県の福祉のまちづくり条例ができて、その後、駅の真ん中にエレベーターができた。アクションを起こすことで30年後なら変えられると思う。

【格差はなくならないが、その差を埋める努力をひたすら続けることが大切】

・格差は生まれ続ける。なくならない。しかし、埋める努力はする必要がある。差を埋めるというのは、例えばワクチン接種の予約で学生のお助け隊を組織したような取組のこと。いろんな差を一つひとつ埋めていく、手をつないでサポートする、こういう取組をひたすらやっていくしかない。

【2050年に残る大切な価値は人の温かみ】

・30年後の2050年にも残る大事な価値は何かと考えたときに、それは人間の温かみだと思う。一人になったらどうなるかわからない。でも誰かがいるなら安心。いくら便利になっても、AIが出てきても、僕らは人間。心の持ち方、愛という言葉がテーマになるのではないか。隣の人を助けることから始めないといけない。

・ものすごく人に頼りにくい社会だ。でも、東京から関西に来ると、関西の人は関東よりずっとオープンマインドで、おせっかいな人も多いので、そこの壁が低いと感じる。

・人の温かさを体感できる場、人を孤立させない環境を自分たちが暮らす地域でどう作っていくかということを、もっとみんなが考えないといけない。

【伴走型支援を一緒につくっていく】

・強い側から弱い側へ、できる側からできない側へ、これがいるでしょ、これでどうぞ、と押し付けるのではなく、一緒に作っていくことが大事。「一緒に作る」、これが非常に大事なポイントだと思う。同じテーブルに座り、対話の中で一緒に考え、一緒に決める。話し合うことが大事で、これをオープンにやることがまた大事。そういうことができる仕組みを作っていきたい。

・ユニバーサルのシナリオをよく読むと、障害者に「便利になるので1人で頑張ってください」と言っている感じがするが、そんな簡単に社会に入っていけると思わない方がよい。ユニバーサルな社会を目指すのであればもっと障害者が参加できるような形、内容を考える必要がある。

【最新でなくてもいい。使いやすいものを使う】

・どんなに技術が進化しても、最新のものがよいわけじゃない。三世代前ぐらいの技術の方が実はこなれていて使いやすいということはよくある。人間にとっては最新である必要はない。最新を売り続けないといけないのは企業の論理。我々は別にそれについていかなくてもよい。最新を押し付けないことを、私は仕事の中でも大事にしている。

【マイノリティの声が届いていない】

・最近ではマイノリティの方も、声を上げる方が多いので認知されているとは思うが、LGBTや発達障害の方の声が届いていないのではないか。実際に会って交わってみることで、多様性を受け入れる力が養われると思う。自分もOK、あなたもOKという広やかな心が明るい社会をつくっていくのではないか。

・日本は、マイノリティの人たちを目に見えないようにしている。街が受け入れていない。家庭に閉じ込めて、ケアする人もいなくなってしまう。但馬でも、すべての人に対し、そういった意識をどう埋め込んでいくかという議論を行った。ビジョンにおいても「すべての県民にとって」という形でのメッセージの伝え方をすればいい。

・行政や政治が社会的弱者のことを第一に考えないと社会は円満にいかない。

・LGBTQに対する姿勢や、外国人、特に技能実習生に対する態度などでも感じることだが、救うべき人の声を県がきちんと聞いていないという現状がある。

【つながりをつくり意見を言い合い価値観を共有する】

・変えていこうと思ったら多世代が、意見を言い合って、なぜそういう発言を不愉快に思うのかということについて言い合わないといけない。

・自分たちでつながりあう。多様性を認め合う。結

局そういうことを地道にやっていくのが幸せへの近道だ。全員を一気に変えるのは難しい。まず自分が変わる。すると家族が変わる。友達も変わる。そういう形で広げていくしかない。

・自己も他者もひとつの命。互いに認め合うことで、横のつながりを大切に共創できる未来をつくる

【「救う」より「生かす」ことを考えるべき】

・閉じこもっている人をどう社会に参加させるのがよいだろうか。ちょっとしたステップを踏んでやってみるのがよいのではないか。抜本的な解決をめざすのではなく、目の前の人とどう関わっていくかを考えて行動できるようにしていく必要がある。自然体験などを経験してみたり、困っている人の声を聞いたりする。行政は交わる場づくりをする。「救う」よりも「生かす」方向で考えるべきではないか。

【引きこもりでも社会が多様になれば活躍できる】

・一人一人が違うということを認めてあげればいい。引きこもりの子達がコロナで助かったと言っている。コロナの中で、人に会うのが苦手で引きこもっていた人たちが活躍している。引きこもった子が、親が仕事で使うZoom操作を手伝ってあげた、というようなことも起きている。多様な時代が来たら出てこられる。出てくるきっかけ作りをしてあげたらいい。

・未来は想像もできない世界で私たちは生きていることになる。元気に動いている人たちがみんな鬱になった時に、今、引きこもっている子達が活躍する時が出てくるかもしれない。

【「よそ者」に居心地の良い地域をつくる】

・但馬は、他の地区に比べて移住者、転入者、外国籍を持つお母さんが目立つ地域である。多様な方々を、どうやって地域に取り込んで、居心地良く、みんなで幸せを実感しながら暮らしていくか、それが、私のいる朝来市での大きな課題になっている。

・地域にはいろんな考えの人がいるので、いろんな人が入って来やすいように間口の広いフラットな場を作る必要がある。

【「分ける」より「混ぜる」インクルーシブ教育を】

・兵庫県はこの10年で特別支援学校を10校も作った。イニシャルコストだけでも1校20億円かかる。その予算があれば、普通校のバリアフリーがたくさんできたはず。特別支援学校の整備は、分ける発想がベースにあり、インクルーシブの考え方とはむしろ逆方向だ。

・障害者がいるのが社会の普通の姿なので、大切なのは健常者と障害者の双方向の関係づくりであり、両者が一緒に学ぶ場を作ること。なのに、なぜ特別支援学校ばかり作るのか。

・私ぐらいの年齢の人はわかると思うが、昔は発達障害という言葉はなかった。違う感じの子がクラスの中にいて、なんとなく対応していた。だが、2000年ぐらいから発達障害という言葉が広がり、この対応として特別支援学校を増やす方針になった。「特別な配慮が必要＝別の学校が必要」という声が大きく、その要望だけが通っていく。

・そもそも、「特別支援教育＝特別支援学校」ではない。特別支援教育は普通学校でできる。現場の先生が対応できないから、分けようということになる。病院も一緒。地域の診療所では障害者の子どもは診られないと断られる。教育や医療の現場だけではない。どこにでもこのロジックが働いている。

・発達障害の人が増えていると言われるが、特別支援学校ができるから増えるという見方もできる。要するにどこで分けるかの問題。本当の特別支援教育は非常に手間がかかるものだが、そこに蓋をしてしまっては、インクルーシブ教育は進まない。特別支援学校を増やす前に、課題は何か、何を修正すべきかを洗い出す必要がある。

・私が住んでいる加東市では、障がいを持っている児童や学生が入学する前（春休み）にその子その子に合わせた教室のリフォームをして校舎を整える。学習の習得度合いで特別教室になる児童もいるが、肢体不自由なことで別の学校に行くこともない。そもそも近くにない。教育の格差があるという話もあるが、田舎は特別なことを嫌う一方で、特別な人たちを支援して生活している面もある。

【学校と福祉部局の連携をもっと密にすべき】

・最近ヤングケアラーという言葉をよく聞くようになったが、これも前からあった話。学校の担任なら、最近宿題忘れが多いとか、ちょっと臭うとかで、どの子がそういう状態にあるか、気付くはず。母子家庭だったら市役所の家庭支援課が知っている。要するに学校と福祉部局がきちんとすり合せをして動いたら対処できるはずの問題。それを新しい言葉を作って、今まで気付いてこなかった新しい問題のように言うのはおかしい。

【疎外しない社会をつくる】

・疎外しない社会にしないといけない。少しこの人おかしいと思ったら、何らかの理由があるはず。そこに誰がどう介入するかを、きちんと考えられる仕組みがほしい。いろんな人がいて当たり前の社会が共生社会。排除してきれいにする社会を共生社会とは言わない。

・つながろうと意識している人が多い地域には、自然とつながりが生まれる。つながりがあれば不安が減り、不安の少ない地域には人が集まる。

【制度があっても十分に活用されていない】

・国の交付金制度は、市町が実情に応じた柔軟な支援を行えるようにするという狙いはよいのだが、問題は手挙げ方式であること。つまり、やる気のある市町しかやらない。セクションが細かく分かれている大きな市は課同士の連携が面倒といった理由で、手を挙げない。結局、制度はあっても、住む場所によって「誰ひとり取り残さない」からこぼれてしまう人がいるのが実情。

【「産福連携」を進めるべき】

・「産福連携」を進めてほしい。すべての産業とすべての福祉の連携だ。そうすれば、もっと社会が活性化し、雇用も内需も拡大するはず。例えば伝統工芸。自閉症の人の中には非常に細かい作業が得意な人がいる。アール・ブリュットとして知的障害の人の書いた絵が最近注目されている。

・産業界と福祉が手を組み、働く形を作ることによって新しい価値を生み出せるし、正規雇用や8時間労働といった従来の働き方とは違う世界を提示できるようにも思う。

【ICTは期待できるが、課題は現場での活用が進んでいないこと】

・ICT機器の開発は進んでいるのに、現場での活用が進んでいない。例えば、タブレット学習も、アクセシビリティーはAppleの方がいいのに、Microsoftの安い中途半端な機器を使うといった対応によって、結局使えない、といった話になっている。

・大事なのは、できない人が、いかにできるようになるかということ。ICT一辺倒ではなく、ハイブリッドに使いこなすことが重要。ICTにはメリットもあれば、デメリットもある。そういう部分をよく見て進めないといけない。

【障害者にとって多様な働き方や自由な移動を実現させ、本人が生き方を選べる社会にすべき】

・これまで多様な働き方がなかった。障害のある人はかわいそう、気の毒と世間の人たちは言うが、働けなくしておいて、かわいそうというのはおかしい。いろんな働き方を生み出し、いろんな場所へ行ける、いろんな生き方ができる、いろんな人といろんな交流ができるようにしないといけない。

・初期の頃に重度障害の子から仕事をしたいと相談があった。だが、こういう相談をしたことを家族に言わないでほしいと言う。お前の面倒は父さん、母さんがみてやる、働くようなむちゃなことを考えなくていいというのが親のスタンス。親でさえも働けないと思い込んでいる。いまだに、子供に障害があるとわかった瞬間にプラス要素は何もない、未来は終わった、と思う人が多い。そう思わないでよくなる時代にしたい。

・自分の子供が障害をもって生まれてほしいとは誰も思わないが、生物である以上、一定の率で標準値から外れた子供を授かってしまうことは仕方のないこと。それでもこういう道筋があるという世の中にしていく必要がある。しかし、最初の一歩のところで、親がそう思えていない時代というのは本当に変わらないといけない。

・私たちの活動の目的はユニバーサル社会の実現。ユニバーサル社会とは、すべての人が自分の持てる力を発揮できる、力を発揮して仕事が得られて社会に貢献できる、社会から守られるが自分も貢献できる、すべての人がそういう状況にあることではないか。

【公共施設のサインや一般文書にはUDフォント・ユニバーサルカラーデザインを使うべき】

・公共施設のサインや公文書・通知、学校教材など広く一般の県民が利用するような印刷物・表示にはUDフォントを使用する、ユニバーサルカラーデザインに基づいた配色とする、などのガイドラインを制定し「ユニバーサルな地域」の実現を図るべき。また、自治体や企業へのUDフォント導入、ユニバーサルカラーチェッカーの補助を県が行い、導入の推進を図ってはどうか。一部業界では既に導入が始まっている。都道府県として先駆けて統一ガイドラインの制定と補助を行う事が「ユニバーサルな地域」のフラッグシップとして影響力を発揮できると考える。

・おしゃれなデザインと、ユニバーサルを意識した

デザインは、真逆で両立しようとしてもうまくいかない。ただ、視覚障害の人にはインターネットによって世界がものすごく広がっているのも事実。

13バーチャルが拓く可能性

【デジタルデバイドの解消を】

・「テクノロジーの進化」ではデジタル格差の問題をきちんと書き込むべき。

・高齢者などデジタル機器になじみの薄い世代や、使うのが苦手という人のためにも、地域コミュニティなどに頼って互いに助け合うようにする必要がある。

・デジタル化が進んでいるのは事実としてわかるが、一方で、非デジタル世代への支援策が必要であることを記載すべき。

・北播磨でも、コロナ禍により大阪などからテレワークや移住に関する問い合わせを多数受けたが、通信基盤が十分整備されていない。新しい暮らし方・働き方に取り残される人が出てくる。

・eコマースは本質的に田舎の人のためのサービス。だが、田舎には年寄りが多い。だからAlibabaは農村にタオバオを作って、そこに行けば農民でもeコマースができるようにした。なぜこれを日本でやらないのか。これこそ行政の仕事ではないか。

・高齢者がデジタル機器を使えないというのは思い込みにすぎなくて、そこにこそ自治体がカバーして新しいサービスを作る余地がある。これができれば、田舎の人が生活に困ることが少なくなり、買い物難民を減らせるはず。

・デジタルを使えない人にどう使えるようにするか、デジタルが使えなくてもつながれる仕組みをどうつくるか、この辺りが行政の大きな仕事になる。デジタルを活かして地方の暮らしをどう豊かにしていくかは、行政がもっと考えるべき問題だ。

【リアルとバーチャルを上手く使い分ける】

・人間関係の濃さも、リアルな関係とバーチャルな関係では明らかに質が違う。やはりリアルな関係の方がいいと僕は思うのだが、これは世代間にギャップがあり、今の若い人は、そこにあまり違和感を持たない感じがする。それが今後どうなっていくのかが気になる。

・AI・バーチャルに頼り過ぎず、五感を刺激する兵庫の良さを伸ばす方向を示してほしい。

・過剰なICT礼賛には気を付けること。

・コロナ禍で子ども達の遊びはゲーム上に友だち同士で集まって交流することが主流になっている。30年後はリアルで会うことが特別な機会で、基本的にはバーチャルで友達や仲間に会ったり、仕事をしたりすることが主流になるのではないか。バーチャル上で地域の観光地やリゾート施設などを作るのも面白い。

【バーチャルの可能性を最大限生かす】

・今後デジタルは必須になる。VRが観光で活用されているが、呼び込むためにはいいツールである。自分自身も観光案内所で映像をみて、生でみたいと思って実際に訪れた。可能性は大きい。

・バーチャル化が進んで、今後地域のコミュニケーションがどうなるのかに関心がある。会話はネットワークを通じないとしないようになるのか、祭りはバーチャルになるのか。どうなるか先が見えないからこそ重要なポイントだと思う。

・リモートワークが広がっているが、さらにバーチャルリアリティが実現すれば、田舎の図書館に部屋だけ用意して、そこで仕事をすることが可能になる。都市部に住む意味が薄まる。自然環境の中で人間らしく生きようという議論をしている。

・VR映像に街並みをプログラミングし、道案内や店の情報などを映し出せば観光客が増え経済も活性化する。

・高齢者世代や障害をもつ方のみならず、誰もがロボットなどのサポート器具を当たり前に選べる時代を目指したい。

・コロナ禍もあり、現地に行かずとも行った感覚になるVRコンテンツを開発した。更にSNSを活用したPRに積極的に取り組んでいく。

【バーチャルの副反応にも留意が必要】

・大変良い未来がたくさん書いてあるが、副反応もある。例えば、テレワークが浸透したことは良かったが、一方で、コミュニケーション不足であったり、労務管理が難しかったりなど、負の側面が置き去りにされているようにも感じる。こういうことも

起こり得るとの記載もしてほしい。

・バーチャルが開く可能性について、現場、現実、現物で判断してきたためバーチャルという言葉に対して違和感がある。バーチャルは共感度の少ない単語。

・バーチャル空間での活動を中心とする社会で経済が本当に回るのか心配になった。

【より先のことを考え記載すべき】

・シナリオの「バーチャルが拓く可能性」は既に今やっていること。これを新しいと言っていたら古い。この数年の間にもっとすごいことになる。30年後は、この次の話になっている。移動も、今の移動の概念とは全然違っているだろう。

・車いすには乗らない、手や足はいつでも取り換えられる、脳みそ以外は取り換えられる、脳みそ自体も刺激を与えたり、DNAに働きかけたりが普通になっている。そんな未来になっていると思う。今の人の想像を超えるようなことがいろいろ起きているのは間違いない。技術的にテレパシーのようなことも可能になっているのではないか。

【使い方も含めたソフト面の充実が不可欠】

・地域BWA（地域広帯域移動無線アクセス）は画期的だが、デジタル技術をどのように活用するかが課題。

・デジタルのハード面の整備はいいが、使い方やソフト面をどうするか考える必要がある。

・今後の社会を考えていくときに一番大事なのはデジタルをどう使うか。これからの経済はどうなるか、人々がどうつながっていくか、すべてデジタルなしでは語れない。

（3）つながりの再生

（主なキーワード）

（主な意見）

14つながりを広げ、深める家族

【個々の家庭の状況の見える化自体が難しい】

・コロナ禍による休校で給食がなくなった期間に家庭に弁当を届ける取組をしたことで、これまで虐待、ネグレクトまで行かないと把握できていなかった家庭の状況がわかるようになってきた。

【三世代同居を拡げたい】

・三世代が同居し、親子が互いの話を聴けるようになれば、弱い人を置いていかない地域に近づく。家庭がオアシスになる関係になればよい。

【人と人のつながりのベースは家庭にある】

・人と人のつながりが一番大事だが、そのベースは家族にある。家族から始めて、いろんな社会につながっていけることが大切。

【出会いや結婚の形は不変ではない】

・結婚観や出会い方の変化、恋愛観、家庭観の変化を事実として記載する必要がある。

・インターネットで出会うことは普通になっていて、海外の人と出会うこともできる。例えば、兵庫県と北海道の人がインターネットで出会って結婚したとして、一緒に住むのか、どこに住むのか。

・結婚しても一緒に住まない人もいる。結婚の形が変化している。

【個の自立の足枷になる支え合いは無用】

・若い世代が「支え合う家族と地域」を望んでいるのか。支え合う、助け合うは昭和の発想。個々人が自由に生きる中で、できること、やりたいことをできるようにしていくことが大切。

・助け合いや支え合いの弊害もあって、その方が大きいと思う人もいる。行政は個の自立よりも、支え合いを過大評価しがち。30年後は個々人がもっと自由に生活する社会になるはずだ。

【子どもの二極化が進む】

・子どもが二極化している。親が十分に子どもの面倒を見て習い事で忙しくしている子と、親が共働きで子どもに時間をかけられない子だ。

【ニュータウンを住みたくなる街へ】

・ニュータウンに若い世代を引き留め、引き込むために、子どもを巻き込んだ地域の体験に取り組んでいる。街の中で人と人のつながりを生む核となる資源を見出していく必要がある。

【ロールモデルに語ってもらう】

・「つながり」も「開かれた家族」も言葉だけでは、

いつまで経っても他人事。魅力的な暮らし方をしている人をロールモデルにして語ってもらう。そんなビジョンにできないか。

【自分たち全部やらないといけない病の家族】

・昔は家族を周りで見ている地域の目があって、家族を支えていたが、今は本当に家族が孤立している。むしろ家族は孤立しないといけないと思い込んでいる。自分たちで全部やらないといけないという思い込みがあまりに強い。

【孤立し、困窮した若者のデータがない】

・孤立し、困窮した若者が増えている実感がある。統計は存在しないが、当法人が現在約5,000人の登録者から相談を受けている状況を考えると、おそらくものすごい数の人がいる。

【つながり・金銭・住まいをセットでサポート】

・貧困には大きく3つ、「つながり」「金銭」「住まい」の問題がある。住まいの確保が難しく、居場所も頼れる人もなくて孤立してしまう、そして金銭的に困窮する。この3つが相互に関連し合って問題が起こっている。

【個人情報よりも大切なことがある】

・若者の支援で問題になるのが個人情報の壁。情報共有はできるはずで、教育と福祉など、自治体の部署間の連携を促すことが大事だ。

【母子家庭にいろんな問題が凝縮されている】

・国際的に見ても日本の貧困率は高く、特に女性の一人親世帯は、経済的に厳しく、孤立しがちなので、支援が必要。離婚が増加しており、これから母子家庭はもっと増えるはず。

・母子家庭の貧困率をOECD諸国と比べると、日本は突出して高く、そこにいろんな問題が凝縮されている。母子家庭をサポートするビジョンを示せたら素晴らしい。一番しんどい部分を支える姿勢を見せることで、他府県との差別化もできる。

【住まいへの支援が足りない】

・困窮者が住居を失いやすくなっている。一人暮らしに追い込まれている子たちがいる実態をまず知らないといけない。

・貧困状態にある人たちの住まいの問題は、もっときちんと対応しないといけない。住まいと生活をセットで支援していくような対応が望まれる。

【世帯支援から個人支援への転換が必要】

・国の支援制度が「世帯支援」中心に組まれている。生活保護を受けるにも、世帯を分離しなければならない。家から出ないといけない状態になったら使える制度がないのが現状。世帯支援から個人支援に切り替える必要がある。

・子どもへの支援も、結局は世帯支援で、子ども主体の支援ができていない。例えば虐待を受けた子どもが家出をしたら対応ができない。

【孤独・孤立対策はもっと複層的に】

・孤独・孤立の当事者の状況にもっと目を向けないといけない。制度が届かない人、制度はあっても情報が届かない人、情報が届いても行動に移せない人が山ほどいる。

・孤独・孤立対策は行政だけではどうしようもない。公的な制度から漏れる人がどうしてもいるので、民間のセーフティネットを厚くする必要がある。

【助けてと声を上げること自体が難しい社会】

・助けてと声を上げてもいいと思える社会に変える必要がある。

15楽しく子育てできる社会

【子どもは地域を元気にする】

・子どもたちが走り回る姿は地域を元気にしてくれる。でも、子育てには相当な労力がかかる。だからこそ、じいじやばあば、地域の支えが必要。

【小手先では少子化は止まらない】

・少子化をどうするかが重要な論点。問題は結婚が相互の生活水準を下げるイベントになってしまっていること。ましてや子どもを産んだら、更に生活水準が下がるリスクが高まる。こういう社会経済構造になってしまっていることが問題。

・未婚化、少子化を経済の側面から見ることが大事。国際的に低い水準にある子どもや若い夫婦への給付を充実させられるかどうかがポイント。社会の再分配機能をどうするかという問題だが、少子化を抑制したいのなら、子どもと若い家族への給付が少ない現状を変える必要がある。

・家族関係支出だけでなく、教育関係支出も日本は少ない。要するに子どもを産み育てることに対する施策の優先順位が低い。この状況は韓国と一緒。政府が家計に依存しており、家庭の経済

力の格差がより一層子どもの育ちに影響する構造になっている。教育、子育ての優先順位を高める方向で政策転換をしない限りは、格差の連鎖の問題はなかなか減っていかない。

・日本全体で子どもと子育て世帯に対する支援が圧倒的に足りていない。未来のために教育、子育ての予算を思い切り拡充し、子ども主体の支援を抜本的に強化する必要がある。

・楽しく子育てできる社会は、最終的にお金の問題に行きつく。日本は子育てや教育に振り向けられる税金が少ない国だ。そのベースには、それは家族で賄うものという国民の認識がある。

【子育てにお金がかかりすぎる】

・子どもを持つかどうか、結婚するかどうかの判断の分かれ目に経済的安定の問題がある。子どもにお金がかかりすぎ、ますますその傾向が強まっている。子育てが外部のサービスを使う世界になっていく中で、その負担をどう下げるかを社会全体で考えないといけない。でないと、安定した職につくまでは結婚できない、子どものことも考えられない、となる。この問題をどうするかが新ビジョンの一つ大きな課題だ。

・付き合っている人はいても、結婚となると、自由がなくなる、使えるお金が減るといったことを心配する若者が多い。ネット社会なので、結婚でいくら、出産・育児でいくらと、何でも情報が得られるので、子どもを持つものすごくお金がかかるという先入観を若者が持ってしまっている。

・「結婚したいのにできない」「子供を産みたいのに産めない」などのハードルを取り除くことが行政の大事な役目。

・好きなことをさせてあげようと思うと教育費がかかる。小学生も習い事をたくさんしている。

【出生時よりも成長に合わせた給付が大切】

・教育にお金がかかるので、出生時の給付よりも、成長に応じた給付が大切。特に大学進学時のまとまった給付を充実させるべきだ。

・大学無償化はむしろ逆方向に進んでいる。私立大は物凄い授業料だし、それに合わせて国公立大の授業料が上がってきている。

【住まいの狭さが子どもを諦める一つの要因】

・子育て環境で一番大切なのは「住まい」だ。子どもの教育環境を考えると、住まいにある程度の広さが必要で、住まいが狭いことが子どもを持つのを諦める要因になっている。

・子育て家庭への住宅手当を充実させるべきだ。都市部のUR住宅で月7～8万円かかる。住宅手当を5万円ぐらい支給してはどうか。

【子を持つ多様な形をどこまで社会が許容するか】

・「婚外子が当たり前」は一部の人から反発を招くだろう。日本はまだまだ子どもを作るのは結婚が前提の社会。もちろんそうしたあり方自体を変えるべきという提案はあるわけだが。

・親が法律婚か事実婚かの違いで子どもが不利益を受けることがないようにすることは大切だが、無責任な出産を許してはいけない。

・特別養子縁組をもっと普及させるべきだ。

・婚外子や養子縁組など様々な形で子どもを持てる環境にしていくために、偏見や差別をなくす活動を進める必要がある。

【子どもの教育の根本は家庭教育】

・先生に余力がなく、学校教育だけに任せておけない。根本は家庭教育であり、お父さんお母さんの教育から始める必要がある。遠回りのように見えるかもしれないが、その方が早いと思う。

【子どもを介して地域とつながる】

・子どもができると、身近な助けが必要になり、子どもを介したつながりが地域でできていく。つまり、単身者や子どもを持たない家族と、子どもがいる家族で、地域とのつながり方が大きく変わる。

【子育ては楽しさの前にまず安全安心】

・子育ては決して楽しいことばかりではない。これからの社会を考えるとますます「楽しい」と言っていられるのかという不安がある。何よりまず安全であり、安心できる社会であってほしい。

・「楽しめる」よりも「安心できる」子育てであることの方が大切。

【地域差がある男女の役割分担意識】

・「子育て＝お母さんの仕事」というイメージが但馬ではまだ強い。都会に行くとお父さんが抱っこ紐をしているが、但馬ではほとんど見ないので、うらやましい。まだまだそういうギャップがある。

【お母さんの負担感をちょっとでも軽く】

・「楽しく子育て」は、例えばカフェの隣に子どもの遊ぶスペースがあり、子どもを見てくれている人がいて、お母さんはママ友と横でお茶を飲みながら話ができるみたいなイメージ。そんな感じの、お母さんの責任をちょっと軽くしてくれる場がもっとあったらよいと思う。

・子どもを預ける先との信頼関係が大切。何かあ

っても信頼関係の中で対応できるような関係が必要で、少人数で良いので、そういうつながりを持つことがまず大事だと思う。
・在宅で子育てしているお母さんにも自分の時間が絶対必要。後ろめたさを感じて言い出さない人もいるが、リフレッシュは必要だ。
・社会の負担をすべて母親が背負っている。楽しみたくても楽しめない。

【子沢山な社会になるかも】
・突然子沢山な社会になるかもしれない。もっと未来志向で考えた方がワクワクするビジョンになる。

【そもそも子どもを安心して産める環境がない】
・子どもがほしいと考えた時に、例えば近所に産婦人科がない。こども園、小学校も統合されて家から遠い。そんな地域で人が安心して子どもを産もうという判断できるのか心配だ。
・経済効率優先のままでは、いろんな施設を維持できなくなる。しかし、そもそも器がないと、子どもを産むという将来を考えること自体が難しくなる。
・新温泉町には産婦人科がない。出産は車で40分の鳥取の病院でする。それでも周りには3人、4人出産されている方が多いのだが。

【共同保育は一つの方向性】
・保育士の疲弊が進む一方なので、知り合い同士の子育ての方向性に共感する。ただ、転入者にとっては最初、地域に知り合いがなく、頼れる人がいないという視点を忘れないでほしい。

【三世代同居・近居も一つの方向性】
・三世代同居や近居によって、親が安心して仕事に出られるようなことも考える必要がある。

【地域ぐるみの子育ては若者には響かない？】
・民間がいろんな子育てサービスを出してきている。地域で子育ては昭和の発想で、若い人はそれに期待していない。子育てしやすい地域になったら人が集まるという発想自体が古い。
・地域の企業や団体なども関わりながら、巻き込みながら子育てをしていくという視点が大事。
・子育てサークルに参加していたからこそ母親の思いがよく分かり、次はスタッフとして手伝ってくれる人がいるので、活動が継続している。

【子育ての課題は全世代で取り組むべき】
・子育て世帯だけをターゲットにしても子育ての課題は解決しない。親になる前の世代やシニア世代の理解を深める取組も大切だ。

【情報がありすぎて逆に不安になる】
・今は情報がありすぎて何を選んだらいいのか、何が正しいのかわからず、逆に不安になってしまう。何十年も前から親を孤立させてはいけないと言われているが、今も状況は変わらない。

【豊かな人間関係の中で子育てを】
・ネットやロボットで便利になるのは全然構わないが、子育ては一人ではできないので、人との関わりが絶対必要。そこは30年経っても変わらない。豊かな人間関係が子育てには必要。

【早いうちから子育てについて学ぶことが大事】
・中高生のうちから子育てについて学ぶべき。子育てについての理解が広がれば、もっと良い社会になる。
・親になる前に子育てについて学んでほしい。将来が見えやすくなるし、知っていることでストレスが減ることもある。
・子どもと関わった経験のない人は子どもを敬遠し、子どもと一緒に遊ぶ経験を積むと子どもがほしくなる。そういうものだ。
・家族って何、子どもを持つことってどういうこと、といったことを若い人たちに早いうちから考えさせることが大切。

【子どもを遊ばせる場所がない】
・身近に遊び場がない。あっても整備がされていなかったり、古かったりで、使いにくい。子どもが外で遊べる場所が近くにほしい。
・子どもが外で伸び伸び遊べる環境がない。子どもの目線で地域の環境を見る必要がある。
・年齢別の公園を作ってはどうか。
・子どもの遊び場が減ってきている。唯一の市民プールもこの先閉鎖されるようだ。次世代の青少年のために遊び場を確保する必要がある。

【子どもファーストの社会へ】
・昼間に子育てのイベントがあっても働いているお母さんは行けない。でもそれは仕方がない。むしろお父さんも含めて休みを取りやすい社会にすることが大切。
・子育ての主人公はお母さんと子ども。お母さんと子どもの目線で必要なものを早く整えていかないと、30年後は子どもがいない世の中になる。
・不登校の話をよく聞くが、親が自分の価値観を押し付けるばかりで、子どもの心に寄り添えていないせいもあると思う。

【男性の育児を当たり前に】
・男性の育休取得率が5％前後と世界的に見ても

低い。制度はあるのに取らない人が多い。制度の問題ではなく、理解、認識の問題だ。
・男性の育休は会社が強制的に取らせたらどうか。
・子どもを持つ親が安心して働けるように、在宅勤務を増やすなど、働き方を見直す必要がある。
・いまだに男性は仕事、女性は家庭という固定観念が強い。特に男性の育児への理解を深めることが大切だ。
・お父さんが労働時間を減らし、子どもと向き合う時間を増やす必要がある。
・在宅勤務できる仕事は在宅勤務にシフト。これにより子どもと過ごす時間を作りやすくなる。
・父親の育児参画が必要。残業をなくす声がけなど、企業も取り組む必要がある。

【子どものペースを大切に】

・子どもが自分の興味関心から動き、自分のペースで探究できる実感を持てるようにすることが大切。それが、人やモノへの愛着、学びの意欲、生活全体の態度を自然と高めていく。

【いろんな大人と接点を持てるようにする】

・子どもを多角的に見ていけるよう、大人の眼差しを磨いていくことが大事だ。また、子どもができるだけたくさんの多様な眼差しに触れることも大切だ。特にユニークな大人との出会いが重要だ。

【経済支援に自治体間で差があるのはおかしい】

・自治体間で子育て家庭への経済支援に差がある。私のいる市は15歳まで医療費無料だが、隣の市は18歳まで無料だ。皆が同じように支援を受けられるようにしてほしい。
・認可外の幼稚園に通っているが、認可外だけ無償化の対象にならないのは変だ。
・子沢山の家庭が多いと自分も産みやすい。

【子どもファーストの職場環境を】

・妊婦や子育て世代を大事にしてくれる職場環境を整えてほしい。出産経験のある人は理解があるが、子どもがいない人や男性は理解がない。
・育休よりも時短勤務を普及させて、継続して子どもと関われるような環境整備をしてほしい。フルで働きつつ、週に何日か時短を取るのが当たり前の世の中になってほしい。
・教員は時短勤務は無理だと言われている。担任を持つと朝から晩まで仕事で手一杯。自分の家庭をどこまで犠牲にして仕事をするのか。教員の労働環境を改善してほしい。

【PTAの負担を軽く】

・コロナ禍でPTAの仕事がなくなって快適だった。PTAがなくても特に問題がないこともわかった。PTAの負担は軽くすべきだ。

【地域ぐるみの子育てを】

・子育て支援を充実させ、地域全体で子どもを育てていくシステムの構築を進めるべきだ。
・子育てで悩む親のために、気軽に相談できる役場以外の場所づくりが必要だ。
・登下校時間に大人が声掛けをするなど、地域ぐるみで子どもの見守りを進めたい。
・情操教育に力を入れるべき。教育のデジタル化が進む中だからこそ、人間本来の五感を子どもの頃から鍛えることがますます大事になる。
・親が地元の活動を一所懸命やる姿を子どもが見るのは、子どもの成長にも良いと思う。

【家族もリアル・バーチャルの融合で考えるべき】

・2050年は人間が今以上にバーチャルな世界に浸っているはず。「開かれた家族」「団らんの時間の拡大」「社会とつながり孤立を防ぐ」いずれもそのトレンドに逆行する提案。バーチャルとリアルの融合で形にしていく努力が欠かせない。

【子育ての悩みを語れる場自体が少ない】

・カフェでお母さんが集まる場を作ったら、保育園や行政の窓口では言いにくい悩みや相談事がどんどん出てきた。こんなにもたくさんの人が悩んでいることにその時気付いた。
・子どもが通っている園や学校とは違う場で、お母さん同士がフラットに話せる場が求められている。
・母親同士の交流の中から、自分ももう一人育ててみようと思う人も多い。地域の中に子育て系の交流拠点があることは大きな意味がある。

【子育てを頑張りすぎる親が多いことが問題】

・親たちはポジティブな意味で早く白旗を挙げた方がいい。どうせ自分たちだけで子育てをやりきれない。もっと周りに頼っていい。周りに頼るのはタブーのように思い込んで、全部自分でやりきろうと頑張る親が多すぎる。

【つらい親子は見えている以上に多い】

・一人親、貧困、不登校、発達障害の陰に隠れているつらい親子がいっぱいいる。お金はあるが、両親の夫婦関係が終わっている子。一見真面目で大人しいが、心に闇を抱えている子。支援を必要としている子は見えている以上に多い。

【子育てを楽しむことが少子化対策の出発点】

・子育て大変という話ばかりする大人を見て育っ

て、若者が子どもをほしいと思うようになるわけがない。いろいろあるけど、やっぱり子育ては楽しいという社会の空気を作る必要がある。そのためにはまず、大人の態度が変わらないといけない。

【親の余裕が子どもによい影響を与える】

・親も自分らしく伸び伸びできる環境が大事。親がストレスなく生きられる環境が子どもにもよい影響をもたらす。「余裕」のあることが大事だ。

【いろんな形の家族があってよい】

・いろんな形の家族があってよい。LGBTQ+、里親、シングルマザー・ファザー、同性カップルで子育てしている人。どんな家族の形であっても排除されないということがすごく大事だ。

【県単位のパートナーシップ制度導入を】

・県単位でパートナーシップ・ファミリーシップ制度を導入してはどうか。当事者としては、どこに住んでいても制度があることが重要だ。

【保育士の獲り合いが起こっている】

・自治体間で保育士の獲り合いが起こっている。保育の質ではなく、家賃補助などで保育士を集めようとする自治体もある。

16最期まで安心して暮らせる社会

【隣近所で気遣い合う安心感】

・田舎に何もないわけではなく、いろいろある。病院の心配もないわけではないが、大きな病院で見てもらえる安心よりも、調子が悪い時に隣近所の人が気遣ってくれるという安心感がある。

・非常に高齢化した街で、向かいもおばあさんの一人暮らしだが、こちらをよく覗いてくれる。逆に今日おばあさん来ないなとなったら、こちらから声をかけに行くような関係性が生まれている。

【デジタル化で暮らしにくくなっていないか】

・デジタル化が進んで暮らしにくさを感じている人も多いはずだ。インターネットでの病院の予約などは高齢者にとっては難しいだろう。若い世代の利便性を求めるだけでなく、高齢者も安心して暮らせる社会になるようにしていくべきだ。

【地域の中に寛げる居場所がほしい】

・病気で苦しんでいる人や精神的に疲れている人が、そこへ行けば穏やかな気持ちになれ、少しでも心の安定につながる、そんな場所がほしい。

【老人クラブのアップデートが必要】

・社会とのつながりが絶たれると、認知症のリスクが高まるとされている。老人クラブは居場所の一つとして大きな役割を果たしていると思うが、会員の減少が続いており、苦慮している。

【地域内で介護し合う】

・60～75歳の人に講習を受講してもらって、登録し、地域で介護に従事してもらってはどうか。

【安心できる社会保障制度へ】

・2050年は高齢者が増加し、認知症も増える。貯蓄の少ない今の若い世代が、今後介護される側に回る。県の財政も縮小して支援も期待できないとなると、未来に明るいビジョンが描けない。思い切った社会保障改革が必要になる。

【福祉が支える暮らしやすいまち】

・町の広報は出生よりお悔やみの方が多い。人口流出も止まらない。福祉の面から暮らしやすいまちを作っていくことがまず基本だ。

17広がる縁

【地域コミュニティに期待しすぎない】

・地域コミュニティに少し期待しすぎていないか。これからはテーマ型のコミュニティをどう伸ばしていくかが重要で、その方が実現可能性も高い。

・地域コミュニティが役に立つ地域と、そうでない地域があり、地域の中も一色ではない。都市には、昔からの地域コミュニティと、地域コミュニティが嫌で都市に来た新住民がいる。地方には、地域コミュニティをポジティブに捉えている人と、地域コミュニティは嫌だけれども、いろんな事情でそこから脱却できない人がいる。無理に一緒にせず、分けてサポートしていくべきだ。

【バーチャルなコミュニティを活かす】

・これからはバーチャルなコミュニティの存在感も高まっていく。敷居が低く、子どもに限らず大人でも、オンラインなら参加できるという人もいる。

【すべての人にサードプレイスを】
・大人だけではなく、子どもや若者のサードプレイスも必要。自力でサードプレイスを確保できない若者と高齢者のサードプレイスを作ることが公共の役割として緊急度が高い。
・街の中にいろんな交流の場があれば、そこから思いもよらないつながりが生まれていく。
・身近に人が集まれる場所が必要。月一回とかではなく、いつでも気軽に行ける場所が身近にあればいいと思う。

【居場所が心のゆとりを生む】
・自由に自分自身が出せる寛ぎの居場所が持てると、精神的なゆとりが生まれて、人生をより豊かに過ごすことができるのではないか。
・サードプレイスを持つことで、異質な人と共に過ごす力、自律的に活動できる力などを養うことができる。心身のリフレッシュ、自己肯定意識の向上が期待でき、孤独感の解消にもつながる。

【テーマ型に限らないもっと多彩なコミュニティ】
・テーマ型コミュニティというよりも、もっと広くいろんなコミュニティのあり方があってよいという意味で、多彩なコミュニティといった表現の方がよい。

【脱組織の潮流】
・つながりの再生というと、組織を用意して、そこを中継点にしてつながりを作るという考え方になりがちだが、今起こっているのは組織に背を向ける動き。プラットフォームでつながり、活動だけしたら、すぐに解散。そうした組織を軽量化していく流れをきちんと踏まえる必要がある。
・勢いのある人ほど組織に属さないで活動する。組織に属さない個人の活動が、いろんなネットワークの中で展開される世界になってきている。

【つながりの新しい形】
・若者のつながり方が変化している。今の若者は薄く広くつながった中で、維持不要の関係は何かという「引き算」で世界を見ている。つながりがありすぎる中で、捨象される部分に地域やNPOが入らないようにしないといけない。
・つながりというと、一対一の全人格的な濃い関係を想像しがちだが、これからは、もっとフレキシブルな緩いつながりをイメージした方がよい。

【地域のつながりは希薄化】
・嫁いできた40年前は鍵をかけずに外出できた。しかし今は必ず鍵をかけないといけない。昔を知っている者としては淋しい気持ちもある。

【つながりの「再生」ではなく「創造」】
・つながりの「再生」とあるが、大事なのは昔あったつながりを再生することではなく、新しいつながりを作ることだ。新しいつながりが生まれる場をあちこちに作っていくことが大切だ。

【新しい関係づくりに慎重な若者】
・最近の若者は、SNSで古い関係が残り続ける。その結果、わざわざ新しい友達を見つけようというモチベーションが沸かない。
・今の子たちは優しくて、関係を壊さないようにしようとする。新しい関係を作るのに慎重だとも言えるし、用心深いとも言えるだろう。

【つながりは人を成長させる】
・若い人たちの世界が広がっていかないと、社会全体が小さくなっていきそうで心配だ。
・不安や緊張はあったとしても、新しい関係を作ることの楽しさ、面白さは必ずあるはず。それが感じられる場をどれだけ作っていけるかが課題。
・狭い関係性の中で安定してしまうのではなく、つながることには不安もあるが、面白さ、楽しさもあるとわかる環境をどう作っていくかが課題。
・若者も結構しっかり自分の将来のことや、地域のことを考えている。地域の中に多世代での交流の機会があることも大事だ。

【広がるジェネレーションギャップ】
・若者に向けてモノを言うときの踏み込み方が難しい。感覚が違い過ぎて話がかみ合わない。

【都市と田舎の違い】
・作り手がわかって、豊富で多様な食材があって、料理の作り方を教えてくれるお母さんたちがいて、近所の人と楽しく喋りながらご飯が食べられる。田舎には都会にない幸せがいっぱいある。
・田舎は多様性を認めない、関係が息苦しいなどの課題がある。伝統や文化を残す一方で、やりたいことが実現できる田舎にならないといけない。
・田舎の排他性を変えないといけない。新しいことをしようとしても足を引っ張られることも多い。若い人に入ってきてもらうためには、開放性を高めないといけない。

【公園を中心につながりを生む】
・公園がいろんな人が自分なりに楽しくいられる居場所になり、この地域にいてよかった、この公園は面白かったと思える関係性ができてきた。
・使っていない土地などを広場や公園にし、誰もが楽しく参加できるスポーツイベントやバザーな

ができれば、多世代が交流する場となる。

【ICTは情報格差を生む】

・IT社会になっていくと、情報がパーソナライズされることによって、ある情報が届く人と届かない人が出て、情報格差が広がる可能性がある。

【ICTは集団の同質性を強める】

・IT社会では、特定の価値観の人たちで集まって同質性が強まり、違う立場の人たちのことが抜け落ちて、分断が生まれやすくなるのではないか。

【人と人をつなげる仕組みが必要】

・人と人がつながる仕掛けをAIにシステムとして組み込んで、今日はどんなつながりがあるかを楽しむ。そういうAIの使い方を考えられないか。
・AIに「リアルに人をつなぐ」という目的を持たせて運用する研究・実践を兵庫で進めるべきだ。
・地域にいろんな人が育ってきているのに、それが見える化されていない、自分のやりたいことははっきりしているが、誰とやったらいいかわからないという人が多い。そこをつなげたい。
・コミュニティコーディネータのような人を増やすこと自体が必要ではないか。
・高齢者も含め、誰もが使える、つながれるツールが必要だ。誰一人取り残さないIT化が重要。
・課題があってどうしようだけではなくて、もっとこういうことがしてみたいと、夢のあることを話せる場がいろんなところにある社会にしていきたい。
・活動している人は地域にいっぱいいるが、その情報が届いていかない。行政、民間含めいろんな選択肢の情報もキャッチするのが難しい。地域情報の共有が課題だ。
・行政の催しは行ける人が限られていて、参加者がいつも一緒。新しい人が来るにはどうしたらいいかを考えるべき。事業者やサラリーマンが来たら、もっと違うつながりができるはずだ。
・縁を増やすには沢山の人と関わる機会を増やすしかない。

【趣味のコミュニティをつくろう】

・趣味から新しいコミュニティができる。例えば、阪神ファンばかりを集めた町をつくって、優勝した日はみんなで喜ぶ。そんな新しいコミュニティのつながりがこれから先、自助に頼らない社会をつくることにつながっていくのではないか。

【内向きな細かいケアも大切】

・開かれていなくても、内向きで、孤独やいじめなどの細かいケアができる地域であることの方が重要ではないか。

【試案は貧困の視点が弱い】

・子どもの貧困やニートの問題が抜けている。
・格差が広がっている感じがある。貧困や辛い立場の人をビジョンの中でどうやって救い上げるのか考えることが大事だ。
・地域のつながりが薄くなることで、地域の中で困っている人が見えにくくなっている。

【最初の一歩を踏み出す】

・地域SNSに参加することで、本来出会うことがなかった人とバーチャルで知り合い、リアルなオフ会などで交流を持っている。そのことで、自分の暮らす地域をもっと知りたいとか、何か地域の役に立つことは出来ないかと思うようになり、生涯学習などに生きがいを持つようになった。
・高齢者大学の受講者は、卒業後に地域を巻き込んだ活動の展開を期待されているが、ステータスを持つことで止まってしまっている人が多い。

【能動的な関係を作ることが大切】

・形式的な連携ではなく、互いが能動的になれるような、仕事や研究の枠を超えた人間同士の密な関係をつくることが大切だ。

【人との距離感が近い地域にしたい】

・九州から兵庫に来て思ったのは、人との距離感があるということ。知り合いはいても友達がおらず、休日に遊ぶ相手がいないような状態だ。

【つながり方を学ぶことも大切】

・つながりの場を作ることも大切だが、どのようにすれば自分も相手も気持ちよくつながれるのか、「つながり方」を学んでいくことも大切だ。

【人間同士のつながりを生むことに時間を使う】

・仕事がAIやロボットに代替されることによって、他のことにより注力できるようになる。そこで生まれた時間をバーチャルな形ではない人間同士のつながりを生むことに活かせれば、よりよい暮らしを実現できるように思う。

【温かさで地域が選ばれる時代】

・自由に人が移動できるようになれば、住む場所を選ぶ基準は「どこ」ではなく「誰と」住むかになる。困ったときに助けてくれる温かさを持った地域に人が集まるようになるのではないか。

【バーチャルなつながりの負の側面】

・コロナ禍で子どもたちのSNSトラブルが急増し、不登校になった子もいる。学校ではオンライン対応を進める一方で、学校に行けない子どもたち

のケアに力を入れる必要がある。

【居場所にもなる小さな活動団体】

・NPOには事業をする以外に、参加者にとって、そこが居場所になるという意味がある。居場所としてのNPOという意味では、法人格は問題ではなく、むしろ小さな団体に価値がある。

【支え合いが生きている地域は強い】

・人間同士の支え合いが生きている地域が強いとわかっているからこそ、ボランタリー活動を大事にする必要がある。

18スポーツが育むつながり

【スポーツクラブの活性化以外の切り口が必要】

・スポーツクラブの活性化をしようという話は少し違う感じがする。今増えているのは、SNSでやろうと言って集まって、終わったら解散、そのメンバーはもう二度と集まることはないかもしれないし、またやりたければもう一度集まる、という活動。そういう流れを射程に入れたビジョンが必要。

【スポーツコミュニティへの参加を強制しない】

・スポーツは言葉の壁を越えて人と近くなれる素晴らしいものだが、スポーツコミュニティに参加することが強制になると不幸だとも思う。

・問題が多いのが学校の部活。団体スポーツの人数が揃わないからと、子どもが半強制的にスポーツをさせられているケースも結構ある。

【学校を地域のスポーツ拠点に】

・学校施設のナイター設備の充実を進めていくのも一つの案だ。

【スポーツと文化の融合領域を伸ばす】

・ダンス、スケートボード、BMXなどスポーツと文化の融合領域が今元気だ。練習場所に苦労しているが、伸ばしていきたい。

【スポーツでつながるシニア】

・老人会は元気がないが、グラウンドゴルフは一所懸命されているので、場所の整備は応援しないといけない。100歳体操も結構人気だ。

・市の体操教室の参加者が元気高齢者に偏っていて、本当に体操が必要な人に行き渡っていない。

19進む地域経済循環

【サーキュラーエコノミーの概念が重要】

・シェアリングエコノミーよりも、もう一段大きな概念のサーキュラーエコノミーの言葉を使うべきだ。

【ビジネスの手法で共助を作っていくことが大切】

・これからは共助が強い地域が生き残る。そこをボランティアで支えてきたのがこれまでだとすれば、これからはビジネス的な手法で共助の形を作っていくことが大切だ。

・地域づくりに「経済」の視点を取り入れることで、共助・互助がより発展するのではないか。

【地域側の伴走者が必要】

・僕たちのような伴走する存在を育てていこう、取り込んでいこうという人が地域にいたということが地域の活性化に大きな役割を果たしたと思う。

・何も知らなかった僕たちを、地域ってこんなところだよ、こんなふうに回っているよ、と伴走しながら教えてくれる人がいて、最初の大事な時期に、うまく地域に入っていくことができた。

【地域で活動することは人とのつながりを作ること】

・入口が見えないので、最初の橋渡しをする地域側の誰かとつながる必要がある。地域で活動するということは人とのつながりを作ることだ。

【地域づくりはテンプレート化できない】

・地域づくりはテンプレート化できない。そこに行って話す、そこからすべてが始まる。

【ローカル志向の高まり】

・地域に関心を持つ人が増えている。そういう人専門の求人サイトがあって、うちもそこに求人を出したら、非常に多くの人が来た。

・今地域に関心を持つ若者はパワハラ、セクハラ、ジェンダー、SDGsなどに敏感で、アンテナの高い子が多い。僕の世代は、まだ稼いでなんぼ、みたいなところがあるが、それとは全然違うベクトルに向かっていると感じる。

【お金の循環が見える地域に】

・試案に、お金の循環の議論がないのが気になった。理想はいいが、実態が感じられない。ふわっとした空虚な感じを受ける。

【小さな仕事で地域とつながる】
・社会的に弱い立場に置かれた人のつながりが問題。その受け皿となってきた従来型の地縁組織の弱体化は、中小企業、自営業者の減少によるもの。だからこそ地域に小さな仕事を作っていくことが大事。地域にある仕事が、社会的に弱い立場の人たちの参加につながり、従来型の地縁組織の強化にもつながる。

【ワーカーズコープは有望】
・ワーカーズコープは女性の働き場所や地域の問題解決の一つの受け皿になり得る。

【収入が得られる産業がないと暮らせない】
・どんなに自然が豊かで、ゆったりとした田舎の良さがあっても、産業がしっかりと特徴を持って自立している地域でなければ暮らせない。
・買い物はネットでできるが、地方で暮らしていくためには、安定した収入が得られる産業の活力が不可欠だ。

【シュタットベルケを日本に根付かせる】
・シュタットベルケこそ地域でやるべきことだ。これが一つ事業として走れば、それにつながる住民サービス的なこともしやすくなる。自治体の事業の一つとしてやることもできるはずだ。

【経営にチャレンジする人を増やす必要がある】
・地方の課題は経営にチャレンジする人が少ないこと。ソーシャルビジネスをやりたい人が当事者となって取り組む必要がある。

【ローカル経済の時代が来る】
・これからの主流は、効率化されていない、ローカル経済だ。材料は自分でつくるか、フェアトレード。商品は自分で作るか、知っている人に作ってもらう。組合的コミュニティに参加して、海外も含め顔の見える人と取引をする。ローカルで仕事を作り、雇用をコツコツ増やす。スタッフが独立して、師弟ネットワークができ、ノウハウがその街に蓄積される。新しい雇用が生まれ、若者や移住者が移ってくる。こうした流れを作っていくべき。
・大企業中心ではなく、10～20人ぐらいの中小企業を主流にしていくべき。大企業が作るビールではなく、麦もホップも自分たちで作ってクラフトビールを作る。地元の工務店に県産材を使って家を建ててもらう。そんな動きを一つひとつ応援してローカル経済を強くしていくべきだ。
・5000人の雇用を生む大企業1社よりも、10人の会社が500社集まって5000人分の仕事を生むのが、これからの時代の仕事の考え方だ。小さな会社でも、ニッチのグローバル企業になり得る時代。そういう会社を育てることが大事だ。

【県は中小企業の応援に特化すべき】
・大企業のサポートはやらなくてよい。中小企業の応援をすべきで、それによって地元の雇用が生まれるし、弟子も集まる。
・若者がやりたがる、企画の面白い仕事は中小企業でこそできる。県は若者が働きたくなるような中小企業型の仕事をどんどん育てるべきだ。

【値段の安さだけで経済を考えない】
・値段が安いからという理由で大企業主流の経済に行ってしまっているが、長い眼で見て持続可能な堅い地域経済を作っていきたいのであれば、中小企業をじっくり育てていかないといけない。

【希望はお金に囚われない若者の増加】
・大企業主流の経済から離れられない人もいるが、今の若者が求めているのは、役立つ仕事、充実感のある仕事、自分が成長できていると感じられる仕事だ。お金に囚われない若者が増えている。

【クリエイティブ産業を育てたい】
・兵庫県の仕事を東京の大企業に発注し、神戸のクリエイターがその下請けに入っている。最初から地元のクリエイターに発注することに知恵を絞らないと、特にクリエイティブ産業は県外に流出するばかりだ。効率ファーストではなく、ローカルファーストの経済に切り替えるべきだ。

【顔の見える経済が求められている】
・豊かさの定義が変わり、顔の見える経済が求められている。人口は減っていくのだから、より楽しく人口減少していけばいい。お金目当ての若者が減って、普通に生活できたらいいと考える人が増えていく。そういう時代になっている。
・資本主義の限界の議論が盛んだが、2050年には資本主義ではない新しい概念になっている可能性がある。元々農村がしていたような、新しいコミュニズムの形が生まれたら面白い。

【働く人がリスクをシェアする仕事の仕組み】
・仕事をする組織は労働者組織のようなものが主体になっていくのではないか。経営者だけがリスクをとるのではなく、みんなでリスクをシェアする仕組みが確立されていってほしい。
・コープや農協のような協同組合的なものが、組織運営の主流になっていくのではないか。大企業中心ではない新しい経済が兵庫で広がれば、

それに共感する人が集まって、もっとワクワクする地域経済の形が作れると思う。

【海外にお金を流出させないためには】

・カリフォルニアにお金を吸い取られているが、国内の企業にお金を払いたい。ネットインフラを国産にしないと、海外にお金が流出するばかりだ。

【新しい経済の形に合わせた規制を】

・市街化調整区域がネックで、企業は別の市町に行ってしまう。今こそ規制緩和が必要。人を呼び込む思い切ったまちづくりを進めたい。

【地域と共に発展する観光業】

・ホテル事業は場所がすべて。一旦建設するとその土地と共に発展する必要がある。人が住んでみたいと思える地域を作るという目的は同じなので、観光に携わる企業と地域・行政が協力して力を付けていかないといけない。

【何でも競争すればよいというものではない】

・地方創生は頑張る地域が報われるという形で、地方を競争の世界に追い込んでいるが、それよりも、地方経済をある種の護送船団方式のような形で地域の中で守り育てていくことが大切だ。

【地域の中で「応援経済」の形を作る】

・地域で自立的に経済を回していく仕組み、地域の中でお金が循環する形を作らないといけない。例えば地域の商店から買うことでその店を応援する「応援経済」がこれからは重要だ。

【非営利活動の首都をめざせ】

・兵庫県がもう一度民間非営利セクターに目を向け、日本の「非営利活動の首都」と言われるようになってほしい。それが結局、誰もが生き生きと生きられる社会を作ることにつながるはずだ。

・小さな団体も大切だ。近年、有給職員ゼロの小さな団体でも、すごく意味のある活動をしようとしている例が増えている。

・国も自治体も、場当たり的にNPO施策を実施してきたが、民間非営利セクターどう育てるかは、大きなグランドデザインがいる。

・兵庫県のNPO施策は、震災の遺産でやってきただけ。一人一人の市民の参加という大事な部分で何もできていない。

【会社とNPOの違いをきちんと認識する】

・ソーシャルビジネスのように企業のやり方を取り入れることも必要だが、それ以上に、NPOにしかできないことは何かを考えることが大事だ。

・NPOの本質は非所有であり、みんなが参加するということ。通常の会社と違って効率性で動く組織ではないことを認識する必要がある。

・NPOは住民が組織する団体である。市民のニーズを吸い上げる機能を担っており、その存在自体に価値がある。発注者・受注者という関係で仕事をする企業とは違う。

・民間非営利セクターの活動にも成果主義を求める傾向がある。短期的に成果が見えにくい活動にまで成果が出ていると表現することにエネルギーを使わないといけない。

20自分たちでつくる地域

【元々市民が自分たちで作ってきた地域のはず】

・これから大事なのは他人任せではなく、自分らで考え、自分らでやること。兵庫の街は元々自分たちで自分たちの街を作ってきた。この部分を今後につなげていきたい。

【地域という場の開放性をもっと高める】

・コミュニティが古くて新しい活動ができないという話がよくある。それを考えると、地域という場の開放性を高めることが一つ大きな課題だ。

・地域で活動したい若者は確実に増えているが、固定的な考え方を持つ声の大きい人の意見で進んでしまう地域がまだまだ多い。外から見たら高齢化だが、内実は若手がいないのではなく、若手が活躍できない地域であることが多い。

・やる気のある若者は活動できそうな地域に入るので、本当にしんどい地域がそのままになってしまうという二極化の問題が起こっている。

・自治会が非常に封建的。古くからの農家で権利意識の強い人も多く、農地の集約・整理などの新しい展開をしたがらない。そんな場には、若い人や街に働きに出ている人は出てこない。

・肩書や立場で人を見るのではなく、その人が持つ意見の中身をきちんと受け取れる人が地域にいるかどうかが鍵になる。

・地域の問題について多世代の意見が反映できる仕組みづくりが必要である。

・中には理解のある人もいるので、いかに早くキーパーソンに出会えるかが大きなポイントだ。

【地域の中にいる若手の力を引き出す】

・長老支配になっていて、若手の声を受け止められているか疑問の地縁組織も確かにあるが、40代、50代、更には60代でも、地域をなんとか良くしようと頑張っている人はたくさんいる。

・地縁組織の支援は、外から変えようとするのではなく、中からの、もっとよくしたいという気持ちを引き出していくことが大事だ。地道に時間をかけて支援していく必要がある。

【組織よりも緩やかなつながりで動かす】

・緩やかなつながりが大事だが、「誰がトップだ」「規約はどうなっている」とうるさく言う人もいる。地域の若手が参加しない理由は、そういうことを聞かれるのがしんどいからではないか。

【地味で難しい問題をどう解いていくかが課題】

・社会起業家的な若者は入りやすい地域に入ってうまくやっていくが、地域の成り立ちや歴史を踏まえたきちんとした対応が必要な、地味で難しい問題はそのままになっている。

【地域自治組織の見える化が必要】

・自治会、まちづくり協議会が何をやっているのか、外から見えないところが大半。そういう地域は見えないままになり、見えやすいところに若者が流れる傾向があって懸念している。

【単なるつながりではなく課題解決ための連帯】

・コミュニティにつながりはあるのか。つながることの意味は何かを議論する必要がある。

・大事なのは「連帯」という意味でのつながり。ただつながりがあればよいという話ではなく、人と人のつながりが新しい課題解決の力を生むというところが大事なポイントだ。

【問題に合わせて行政のサイズが変わる】

・地方分権で大事なのは、問題のサイズに合わせて対応する行政のサイズが変わればよいというマルチレベルガバナンスの考え方だ。例えば貧困対策は市町村単位よりも、府県レベルのスタンダードでやった方がよい。問題解決ができる多様なレベルの仕組みがあることが大切だ。

【再び住民が自分たちでまちを作っていく時代】

・住民が自分たち自身で地域を支えていかないといけない時代が来ているのに、今の日本には、その仕組みや枠組みがない。その形を作ること自体が大きな課題。

・主体的に活動する市民がもっと増えないといけない。もはや行政が公共サービスで地域を支える時代ではない。市民が自分たちの力で地域づくりしないと地域社会が良くならない。

【地域に仕事を返していく時代】

・高度成長期を通じて、行政は「何でもやりますよ」と地域から仕事を取り上げてきた。これからは逆に、行政から住民へ、丁寧に話をしながら、仕事を返していく作業が必要になる。

【共同体として地域を作り直す時代】

・行政もお金がなくなっていくので、県民に自立してもらわないといけない。自分たちで道を直したり、橋を直したり、昔みたいにやってもらわないといけなくなっていく。そうした時代をより楽しく迎えられるようにしていくべき。共同作業をみんなでやっていく社会をポジティブに捉えたい。それはお金との決別とも言える。

【新しい自治組織を作らないといけない】

・前例踏襲の今の自治会では成り立っていかず、新しい形の自治組織が必要なことは明らか。自治体が職員を地域に配置して、地域にあった新しい自治組織の形を作っていく必要がある。

・地域自治協議会だけが小さな自治の姿ではない。地域運営組織など違う形態もある。

【自治組織の広域連携は不可避】

・人が少なくなって自治機能を維持できなくなったときには、やはり広域で自治機能を統合するなどの対応をせざるをえないだろう。

【いろんな自治組織が複層的にあることが大切】

・地域運営組織ができたからといって、単位自治会がなくていいということにはならない。担う機能に合った適切な規模というものがあり、小さい規模だからこそ果たせる機能がある。

・いろんなサイズのコミュニティが重なり合って補い合う形を作ることが大切。小学校区単位の地域運営組織は、あくまでそのサイズの問題解決に合った一つの単位でしかない。地域コミュニティにも補完性の原理を働かせる必要がある。

【細かな工夫を積み重ねる】

・地域運営組織の事務局員の人件費に市が年間200万円出している。いかに持続的な組織にするかをいろいろと考えた結果、200万円で2名以上配置する条件になった。

・責任者の名前を「所長」から「エリアマネージャー」に変えた。この名前だと、その施設のことだ

けをしていたらよいとはなりにくい。

【個人が参加できる地域の受け皿が必要】

・都市部も中山間地域も両方地域運営組織はあった方がいい。世帯単位ではなく、いろんな考えを持った個人が地域に参加できる形に変えていくためにも、地域運営組織が受け皿になり、地域のプラットフォームになる必要がある。

【政治よりも自分でできる問題解決を】

・若い人たちに政治に関心を持って参加してもらわないと、社会は分断に向かうのではないか。

・今の若者は政治に興味がないのではなく、そもそも政治に期待していない。だから、自分たちで起業しようとか、自分の周りの人たちの問題から解決していこうという感覚を持っている。

【若者・学生は労働力ではない】

・大学との連携では学生の活動が継続する関係を作ることが大切。問題になるのは学生が使われて疲弊してしまうこと。地域が学生の立場や専攻分野を理解して関係を作らないといけない。

・地域の人が外部の若者を労働力と勘違いしている。年配の方々は、ボランティアが来てくれない、と言って悩んでいるが、労働力として使われに来たくないという若者の気持ちも分かる。

・ボランティアだとしても、お金じゃなくても何か得るものを持って帰りたいという思いを叶えてあげないとお互い悲しい結末になる。

【自分が楽しめる範囲で緩くはじめる】

・ポイントは楽しめること。住民の参画と言っても、住民に義務感や使命感を求めるだけでは限界があって、地域離れが進む。

・人は楽しいことしかやりたくない。自分も楽しくなければやっていないし、楽しくあるべきである。

・地域活性化を意識すると、しんどくなる。自分たちが楽しいことをやることが大事で、良い雰囲気を作れたら、そこに人が集まってくると思う。

・成功しないとダメだというマインドセットが強いと、活動自体がしんどくなる。誰も来なくても、自分が楽しけりゃいいやと思ってやるぐらいがよい。身の回りからワイワイやり始めたら、何をしていいかわからなかった人たちが寄ってくる。そうやって地域は変わっていくものだ。

【昭和の発想を払拭しないと若者は付いてこない】

・30年後の社会はもっと個人主義的な自由な生き方、働き方の方向に行くはず。それなのにこの試案には保守的な昭和の発想があちこちに出てくる。誰のために作るビジョンなのか。若い人向けなら、もっと振り切れないとダメだ。

【頑張っている地域も抱える課題は同じ】

・いろいろ面白いことをやっていると言われるが、人と人とのつながりが希薄化しており、まちづくりの担い手が不足しているのが実情。

【若手が関わりやすい形を作ることが大切】

・まちづくりの担い手は地元商店主や個人事業主が大半。サラリーマンは少ない。特に若手は仕事で忙しく、活動への参加が難しい。その結果、仕事の第一線から退いた高齢者ばかりが関わっており、活動の見えづらさにつながっている。

・担い手が減少し、参加メンバーが固定化している。ボランティアを有償で募集しても人が集まらない。普通のサラリーマンが働きながら関われるような活動の仕方を考える必要がある。

・若者が意思決定段階から、まちづくりに加わると地域の活力に大きなインパクトをもたらす。課題が山積する地域で力を発揮してくれる。

【スペースの利用が意外と難しい】

・イベントを開催するためのスペースを利用する際に必要な制度や手続きが、若者に十分に伝わっていないという問題もある。

【まちづくりもITを使いこなすことが必須】

・まちづくりの担い手が高齢になると、IT化に対応しきれず、周辺地域から取り残されてしまうのではないかとの危機感がある。

【生活のために働く高齢者の増加】

・近年では高齢者でさえも収入のために働かざるをえなくなる人が増加しており、まちづくりの担い手不足に拍車がかかっている。

【まちづくりには出入り自由の緩さが大切】

・まちづくり活動には「出入り自由」という気楽さが不可欠である。比較的小規模な形で、やりたいことをやりたいときにやるからコンスタントにまちづくりに携わることができる。

【地縁組織も出入り自由のライトなものに】

・地縁組織に一回入ったら抜けられないイメージがあることも確か。出入り自由で、自分の好きなことや得意なことでライトに楽しく関われるような形を作っていかないといけない。

・住んでいなくても、その地域が好きで関わりたい人はウェルカムという形にしていくことも大切だ。

【行政が入ってくると活動が重くなる】

・活動に行政が介入してくると、規模が大きくなっ

たり地域に重い役割を期待されたりして、当事者にとって活動が負担となり、しんどくなって続かなくなってしまう。

【自由な話し合いの場が起点となる】

・まちづくりのアイデアは、まちづくりに関心のある市民や地元企業が集う会議で生まれている。そこは各々がやりたい活動を自由に話し合う場となっている。

【仲介役となるキーパーソンの存在が重要】

・まちづくりのアイデアを持った人と行政を結びつけるキーパーソンの存在が重要。取り組みたいことがある人の情報をキャッチして直接市役所と話をつけたりして、思い付きのようなアイデアを形にするサポートをしている。

【地域にお金を巡らせるイベント】

・イベントを実行委員会に委託することで、経営感覚のあるイベント運営が可能になっている。グッズやドリンク類の販売で得た収益を次のイベントに繰り越すことで、財団の出費が抑えられる。Tシャツなどはよく売れて、結構な収入になる。

・イベントの資金は、協力金、助成金、クラウドファンディングなど多様なルートで確保している。特に企業の協賛金は大きな割合を占める。

・イベントを開催すると、その運営だけでなく、会場の装飾やステージ設営など多くの人が関与する機会が生まれるため、地域経済の面でも大きな波及効果をもたらすことができる。

【文化事業もコスト意識を持ってやる】

・スポーツ系の財団との統合により、「よいものにはお金がかかる」としてコスト意識が低かった文化側の担当者に、収支への意識を涵養する効果が生じている。スポーツ側の担当者は民間施設との競合があるので、収支に敏感だ。

【行政に期待する役割はいろんな制約の調整役】

・まちづくりにおける行政の基本的な役割は、いろんな制約をうまく調整して「やりたいことをやれる」環境を整備することだ。まちづくり活動に対して、行政が活動の自由度を低めるような支援を行うのはやめてほしい。特に行政の助成金に手を出すのは「禁断の果実」だ。一回手を出すと、やめられなくなり堕落する。助成金をもらうための事業に成り下がっていく例が多い。

・活動が失敗したときのセーフティネットの役割も行政に担ってほしい。何事にもチャレンジしやすい環境の整備を求める。

【県の役割は市町間の連携を促すこと】

・県（県民局）に期待する役割は個々の市がやっていることをつなぐこと。現在は各市が各々でまちづくりに取り組んでおり、連携が取れていない。似たようなことをやっていたり、一緒にやった方がもっと面白くなったりする場合があるはずだ。

【田舎は結構忙しい】

・田舎に住んでいて思うのは、人口が減っても集落の機能が維持できることが大切ということだ。

・のんびりしたいという意識で地方に移住してくる人がいる。来てみたら田舎はやることが多いと初めて気が付くような認識ではやっぱりダメだ。

【映画のロケを呼び込みたい】

・この地域が映画の舞台になったことがあった。私もエキストラとして出演した。集会所を貸したり、炊き出しをしたりして地域が大変盛り上がった。

【学校がなくなっても地域で運動会をやりたい】

・学校が統合されて、運動会で人が集まることがなくなったので、運動会的なイベントをやりたい。ありきたりの競技ではなくて、これまでやったことのないような競技で実施したい。

【同じことを単に繰り返すだけでは持たない】

・同じことを続けてやるのはやっぱり難しい。田舎暮らし体験にしても稲作オーナーにしても、ある程度人の様子を見て転換して新しいものを作り出していくことが必要だと思う。

【法人化によって責任感が生じる】

・次々にアイデアを実行していく理由として、振興会が法人であるというのもある。法人を維持するためには、やはり事業をしなければならい。

【行政はもっと地域の住民と話す機会を持て】

・県が地域と話をする場をもっとたくさん持ち、地域の取組に対してアドバイスしたり、それについて県ではこんな支援ができるといった話をするようになれば、地味な活動も活きていくだろう。

【田舎でも近くで習い事ができる環境を作る】

・淡路で習い事をしようと思っても選択肢が少ない。いい先生に教えてもらおうとすると島外に習いに行かなければならない。

・サッカーをやっている子たちが島外のチームは強くて自分たちはダメだという感覚を持っているようだが、こういう感覚を持たなくてもよいようにしてやりたい。

【窮屈さと安心感は表裏一体】

・この地域は窮屈さがある。しかしそれは安心感と

表裏一体だ。手を差し伸べてくれる人がいたり、祭りのように住民が一丸となって一つのことをやり遂げたりすることができるのは魅力である。

【地域課題の解決で対価を生む仕組みが必要】

・お互い気持ちよく活動できる関係性を作っていくためにも、社会課題を解決することで相応の対価が生まれる仕組みができたらよいと思う。

【地域の中で切磋琢磨する雰囲気が大事】

・若者が働く場が少ないと言うが、お客さんがたくさん来る有名な店もある。地域の中で切磋琢磨し、町を盛り上げていくことが必要だ。

・地域の中だけで頑張るのではなく、他の地域から多様なことができる人が入って力を合わせて運営していけるような組織づくりが重要。

【まず古い価値観を変えないといけない】

・古い価値観はどんどん変えていかないといけない。でなければ、子ども達は帰ってこない。若い人、女性が社会をリードしないといけない。

【守るべきものは何かを若者と共有する】

・堤防の草刈りなどは、して当たり前だと思うが、今の若い人は何でしないといけないのかと言う。地域を継承していけるのか心配だ。

・地域の溝掃除に出ると、平均年齢は75歳で、最高93才。話題は「田んぼを1円で売るから買ってくれ」。なすりつけられている気がする。

【婦人会は維持がますます困難に】

・連合婦人会という名前ではなく、自治会の婦人部という形で、女性の意見を市や社協に伝える方向に変える必要があると思う。

【新しい人を思い切り大切にする】

・新しい人が来たら、情報提供する。迎えに行く、誘いに行く。優しくしないと来ない。優しくすれば新しい住人が先頭に立って頑張ってくれる。

【最初の一歩を踏み出す人を増やす】

・それぞれの場所で最初の一歩を踏み出す人が増えたら、住みよい地域が増えていくと思う。

・大事なことは、外ばかり見て、あれもいいな、これもいいなと言っているだけでなく、一人ひとりが自分の身の回りから行動しようよ、ということ。

【起業でもソーシャルビジネスでもない地域活動】

・バリバリの起業ではなく、ソーシャルビジネスでもなく、その中間の活動がもっとあってよい。お金にならなくても、少し地域が面白くなればいいぐらいの感じで一歩踏み出してみる。こういう活動が増えたら、いろんな課題の解決が進むと思う。

【住民の意識が変わることがまず大切】

・兵庫の良さは、阪神・淡路大震災を機に、県と市町が参画と協働のまちづくりをやり始めたこと。何と言っても、この歴史があることが強み。

・自分たちで地域を作るという意識があってはじめて、何となく地域自治が機能するようになるので、ベースの取組として、市民を育む、自治意識を育てていくことが大変重要。

・意識の高い住民が多いと感じる地域は、だいたい生涯学習に力を入れている。この差が意外と大きく、非常に時間のかかる部分である。

【市民を育てる事業を地道に続けることが大切】

・公民館活動としてどこの市町も講座やセミナーはやっているが、問題はその中身だ。どういう市民を育てるかを考えて、きちんとした研修を行う。これを地道に続けることが大事だ。

・試案には「自分たちでつくる地域」の主体となる、地域の問題を自分事として考えられる県民をどう育むかの話が抜けている。

・プロセスの違いが住民の意識の違いを生む。やはり県民の意識を「耕し続ける」ことが重要。

【関わりたくなる地域コミュニティを作る】

・都市の地域コミュニティを元気にするためには、若者にとって、関わることが面白い、新しいことを学べる、新しい知り合いができる、そんなコミュニティに変えていく必要がある。

・若い人たちが地域に参加したくないと思っているわけではなく、そのきっかけが掴めないだけ。きっかけをうまく作らないといけない。

【つながりを良いと思うかどうかは人次第】

・田舎独特のつながりには、良い面もあるが、人によっては息苦しいと感じることもある。人のつながりが息苦しい人は都会で暮していたらよくて、無理に田舎暮らしはしない方がいい。

【田舎暮らしにはコツがある】

・移住者が立ち上げたコミュニティがあって、先輩移住者が後輩移住者の悩みや疑問の相談に乗るということが自然に行われていて、非常に新米移住者の支えになっている。

・やはり田舎のコミュニティや風習には、移住者には息苦しさを感じる面もあるが、手の抜きどころのアドバイスを受けることができるので、自身も助かっているし、すごく大事なことだと感じている。

【民間非営利セクターは自治の器】

・民間非営利セクター＝広義のNPOの存在価値

はまさに「自治」の器であること。何のためにNPOが存在するのかを考えることが大切だ。

【「参画と協働」に新たな展開を】

・近年、行政から「協働」という言葉を聞かなくなった。市民の公益的な活動に対して行政も一緒に汗をかくという意識が全国的に低下している。
・兵庫県は年々ボランタリー活動の分野に力が入らなくなって、今ではまったく目立っていない。
・県民交流広場を一通り整備した後ぐらいから、県のコミュニティ施策が停滞している。
・参画と協働は面倒なので、意識的にやらないと続けるのが難しい。今の兵庫県は、時間が経って、その意識が薄れ、文化がつながらなくなった状態。自然の趨勢とも言えるが、残念だ。
・県の「参画と協働」は、NPOなど組織のイメージが強すぎる。組織ではなくて、個人としての県民がどう県をつくっていくかを考えて、その手段を示していかないといけない。
・大事なことは一人一人の市民の参加であり、端的には個人の寄付がもっと盛んになるようにしていく必要がある。
・日本では寄付やボランティアは奇特な人がやるものだという認識がいまだにある。寄付が当たり前の支え合いの文化を作らないといけない。支え合いには色々な形があって、時間は割けないけれども、お金は出せるということもある。
・寄付は支え合いの一つの象徴だ。「日本一寄付の盛んな街」を5年ぐらいかけて目指さないか。

【ふるさと納税の問題点】

・日本の寄付控除の仕組みは優れているが、ふるさと納税と比べて見劣りする。ふるさと納税は莫大な寄付が集まっているが、問題の多い制度だ。中間経費がかかること、自治体間で税を取り合う仕組みであること、そして何よりも納税意識を毀損する制度であること。自治体側での工夫が求められる。

（4）集中から分散へ

（主なキーワード）

（主な意見）

21都市と田舎の共生

【しがらみのない田舎暮らし】

・都市で働かなくても好きな場所で暮らせるという状態がよい。一方、地域コミュニティが希薄な地方があってよい。神戸市が力を入れている六甲山で働く取組が良いと思うのは、六甲山には元々の地域コミュニティがないから。豊かな自然がある。しかも、しがらみがない。地域コミュニティが強い田舎に、そこでもリモートで働けるといって都市の人が入っていっても、馴染める人は少ないと思う。

【ローカル志向の押しつけ】

・若者のローカル志向は本当か。全体の中のごくわずかな動きに過ぎないのでは。そういうものを大きく取り上げること自体が価値の押し付けとも言える。

【連携して自立する分散型社会】

・「集中から分散へ」では、地域循環共生圏のような方向性が見えない。都市も田舎もそれぞれの地域が自立して、それぞれが互いを補完し合うという姿がよい。

・神戸は自然に近い大都会であり可能性がある。淡路や明石、芦屋、西宮、三田、宝塚など神戸都市圏全体として「グレーター神戸」と見て絵を描いた方がよい。

【人を惹きつける愛着・ストーリー・循環】

・移住のキーワードは3つ。愛着、ストーリー、循環。地元住民も、訪れる都市住民もその土地に愛着を持つようになり、その土地がストーリーを持ち、交流が循環することが大事。

・古民家を改装した宿泊施設として人気を得ている。強みはデザインやコンセプトで都会から人を呼べること。人を集めるのが難しいがそこはクリアしている。世代を問わずに支持してもらっている。3世代で来られることもある。親はグランピング、子どもはインスタ映えするので楽しい、おじいちゃんたちは昔こんなところに住んでいたということが言えるなど、それぞれに魅力がある。交流は企画の面白さが大事だ。地元住民もすごく興味を持っていて、よく来てくれている。

【田舎で開放的な交流を拡げる】

・田舎には2種類ある。新しい風が吹いている田舎と閉鎖的な田舎。判断基準は感覚的なものだ

が、移住者がいるかどうかが一つのメルクマーク。移住者を応援している市町は風が動いている。
・開放的なコミュニティをつくっていくことで、多様な人々が集う新しい田舎が実現していく。
・田舎はよそ者に冷たいと思ったが、お客さんと地元の人が勝手に交流を始める。お客さんが来ることで、地元の人が元気になっている。都会の人は地域の温かみには普段触れることはあまりないだろう。交流の循環が素晴らしい。

【移住者だけじゃなく元居た人にもメリットが必要】

・空き空間を分けるポイントは、「人の交差点になっている」かどうか。空き家を単純にリスト化するのではなくて、可能性がある場所と無い場所の仕分けが必要。

【田舎こそフロンティアに】

・コロナは分散型社会へ向かう非常にいいきっかけ。このチャンスをつかまないといけない。
・これまで田舎イコールダサいだった。そのこと自体を変えないといけない。僕たち自身の会社の一つの大きなビジョンにもなっている。
・今これだけ情報化社会になっていて、都市でも地方でも同じ情報がYouTubeにあるし、同じ情報がTwitterにあるし、どこまででも勉強ができるのに、田舎はまだそういう状況になっていない。何が田舎を田舎たらしめているかと言われると、結局は情報を取りに行かずに自分たちの身の回りにあることとテレビを見ている状況だと思う。
・農山村部が抱えている少子高齢化、過疎化の問題と、これから進むであろうテクノロジーの進展をどう絡ませながら良い状況を創りだすか。困難とどう向き合っていくのかが「集中から分散へ」というテーマの大きな課題ではないか。
・農山村部の課題は大都市の地域づくりとも連動していると強く感じる。都市からいかに若者や、創造的な人材を送り込み、逆に、その交流の中で、両方が良い関係になって発展していける状況をどうつくっていくかがポイント。
・田舎が「多自然地域」というかっこいい言い方に変わった。コロナを契機に交流人口から関係人口、新住民という流れをつくるには、住民の意識改革をしなければならない。
・学生中心に、観光プロジェクトを立ち上げた。田舎は資源がないと思われがちだが、人を惹きつけるポテンシャルは大きい。例えば、田んぼを一面見渡せるようなレストランや、森の中のカフェなど、都会で出来ない強いコンテンツを創れる。
・数年前に海外から戻ってきたが、なぜ戻ってきたかというと、何もないからこそ自分で作れるチャンスがあると思ったから。田舎はなんにもないからこそ自分で見つけて新しいものを作れるという面白さがあると気づき、すごくワクワクした。都市だと何でも買えばよくて、与えられるという環境があるが、田舎は自分で考えて自分で作らないといけない。田舎こそクリエイティブの集まり。自分自身が仕事をしながら発信していかなければならないと思っている。

【都市と田舎の役割・価値を改めて考えるべき】

・都会の役割と田舎の役割があり、何を残して、何を変えるべきなのかを慎重に考える必要がある。分散で人が集まって、もともと価値ある自然がなくなってしまうといったことは避けたい。分散にもメリットはあるが、慎重にしないと結局都市化してしまうのではないかと不安に思っている。
・県内各地に濃淡があるからこそ素敵な県全体になるのであって、ベクトルだけ集中から分散というのは危険。
・自然と都会は融合するのではなく独立・両立させるイメージ。今の神戸は都会の部分に自然を無理やり組み込んで中途半端な自然になっている。
・南海トラフ地震などの大災害のときにも、田舎は大阪や神戸など都市のバックアップができる。そうした役割分担や連携をつくっていくことが共生ではないか。
・都市と田舎がともに発展するというのは考えにくい。田舎は田舎として発展しないことが魅力。すべてが発展する必要はない。理想は便利な田舎。
・開発しない＝発展しないではない。開発しないことで、自然など残るモノがあり、それを使い発展や生活に必要なモノを得ることができるのではないか。
・都市から見れば、田舎の広い庭でゆったり過ごすことに大きな価値があり、そのような生活が丹波ではできる。

【都市と田舎の価値観の格差を埋める】

・「集中から分散へ」のためには、まず地方の開放性の徹底、都市と地方の開放性の格差をどれだけなくせるかが鍵に。都市ではジェンダーバイアスはそれほど感じないが、地方では差別的な発

言もあったりする。移住したい若い人たちが入ってきても、価値観を共有できず出て行ってしまうことが多い。自然も居住環境も最高だが前時代的なことを言われたりして耐えられないということで出ていく例も聞く。

・田舎の問題は、価値観の多様性がなかなか認められないところ。田舎が開放的になることができれば、必然的に都市から多様な人が移り住むようになる。

【なぜ若者が流出するのか的確な分析を】

・集中から分散へと昔から何度も言われているが、大学や働き口を求める若者は今も都会に出て行く。それらが補完できない限り分散は「絵に描いた餅」になる。今のチャンスを活かすにはもっときちんと分析が必要。

【多様な地域に都市と田舎の良いとこどり】

・一つの場所で生まれ育って一つの職場でキャリアを重ねていくよりも、一人の人生の中で、色んな場所で色んなライフスタイルを経験できたらいいなと思うことがある。都市にも田舎にも、それぞれ良いところ、悪いところがあって、良いとどりできれば嬉しい。

・田舎や都会に特化した暮らしが良いという人もいるが、多くの人は両方したいのではないか。特に田舎に特化して暮らしたい価値観はニッチな領域。こだわりポイントは、「都会も田舎も捨てない、両方手に入れる、良いとこ取りしたい」ということ。

・ポートランド、ヘルシンキ、ストックホルムのような暮らしがすてき。山や自然に近く、ほどほどに都会で、家が広く、30分から1時間でいける場所にセカンドハウスを持っている。そこで週末にサウナをしたり、気軽に自然の中に入ったり、農業をしたりして生活をしている。

・ものづくり県でありながら、瀬戸内海、日本海に面し、食材が豊富。自然豊かでリモートワークやサテライトオフィスに適した環境もある。神戸という大都市があり、大阪にも近い。洗練された文化があるし、優れた人材も多数輩出している。そういう多面的なアドバンテージを活かすことをもっと考えるべきだ。

【田舎でも不便を感じたことがない】

・田舎でも買い物は、アマゾンで出来る。遊びやレジャーだって、都会にいても毎日行かないのだから、特に都会の方が良いとは思わない。子どもの塾も、車で10分の送り迎えがあるだけ。都会にいて子ども1人で電車に乗せる方が抵抗がある。

【本当にしたい暮らしをする】

・人は、もっと自分の暮らしを大切にしなければならない。問題意識として、今の人は住む場所を決める時に、結構適当に選んでいる。本当にしたい暮らしをもっとめざすべき。

【地元の人も気付かない地域のポテンシャル】

・淡路島は、橋を渡った瞬間に全てが変わるのに、そのポテンシャルに気づいている人が全然いない。バレないと思って事業を始めたが、今、一気に島のポテンシャルがバレてしまって注目されている。

【煩わしさから生まれるつながり】

・草刈、溝掃除など半強制的な村の作業があることで、逆に近所付き合いが生まれてくる。都会はそうした煩わしさはないが隣の人が誰かすらわからない。そういう環境で育つ子供たちのことを考えると、不便でも人間的、子育て的に良い面があると思う。

【人口競争よりも本質的な議論を】

・もう人口の競争はしないでほしい。交流人口や関係人口を増やそうという議論にもなっているが、そうではなく、そこに住んでいる人がいかに幸せになれるかを考えるべき。

【開発規制の見直しを】

・この辺りの地域では、規制が強すぎて新たに家が建てられない。宅地であっても建物を建てることができないと聞く。移住希望者がいても、その規制を取り除かないことにはどうしようもない。

・田畑も高齢化で耕作放棄という感じのところが増えてきている。多少なりとも規制緩和で宅地転用にするとかできればいいが、農地はほぼ不可能である。

・田舎の自然を活かして、コンテンツ開発を進める際に、市街化調整区域の制限が大きなハードルになる。こうした規制は早期に見直していくべきだと思うが、一方で実際に開発を望まない住民もいたり、意図しない開発が起こることも心配。

22自然と共にある暮らし

【自然のなかにある体験は心を豊かにしてくれる】

・都市から田舎に移り住み、蛍が普通に飛んでいるのにびっくりした。「火垂るの墓」でしか蛍を知らなかったのに。近所の川沿いを歩いているとキジが歩いていた。桃太郎でしか見たことがないのに。そのような日々を過ごしながら、子供たちを相手に自然体験活動をしている。

・今現在、挙げられる課題として都市部では開発が進み自然が少なく、子供達が自然と関わる機会が少ない、農家や漁業、林業、狩猟など自然と関わる仕事をする人が年々少なくなってきているなどがある。子供達への自然との関わり、自然環境体験などは今よりもさらに充実させる必要がある。

【農や土にふれ暮らしに彩りを】

・但馬の耕作放棄地の有効利用により、安全安心な野菜作りを家族単位でも、出来るようにするなど、農地の貸し出しが可能なような「日曜家族農家」など実践できればと思っている。

・テクノロジーが進んで畑や土に触れなくなることはどうか。ただ、農業人口はどんどん減っていく。重労働や体に負担がかかる労働を抑えてしっかりとした収入があることが理想。将来も農業や農地に触れあえる地域であってほしい。

【兵庫が持つ自然のポテンシャル】

・六甲山と海を活用する。六甲山はハイキングもできるし、全国的に六甲山の縦走も有名。それから、海はマリンスポーツをはじめ、海水浴もでき、親しんでいるので、さらにもっと活用したい。

・神戸の都市と自然の近さは、交通網の発展したコンパクトシティーならでは。食も豊かで、川、海、山それぞれの幸が味わえるという魅力がある。これらを掛け合わせて、神戸だけでアウトドアができる「みんなの庭」にしたい。

・但馬も夏は海、冬はスキーもできて空気もおいしいし本当にいいところだと思う。不便かもしれないが、子育てにはもってこいの環境だと思う。

・神楽の魅力は、ふらっと訪れて自然をみてもらうことではないか。クリンソウやひめぼたる、今はミツマタが最盛期だが、そういった地域資源をいかしていきたい。

・スローワーク、スローライフなど淡路の特色を生かして発展していく方向性が良い。

・夜になると澄んだ空に見える満天の星がロマンチック。都会では味わえない自然の良さがあるので淡路が大好き。

【自然と暮らし人間と環境の調和を感じる】

・有機農業に込めるのは、自然や環境と、人間の暮らしの調和である。

・移住就農して、値崩れを避けるための野菜の大量廃棄にも大きなショックを受けた。

・都会でのハードワークで体を壊した経験などを通じて、エゴの渦巻く資本主義社会の闇を感じ、田舎での自然と調和した生き方を求めていた。

・自然と調和した農業を通じて、自然と暮らす気持ち良さを知ってもらったり、環境問題に興味を持ってくれる人を広げていきたい。

・田舎に移住して毎日自然を感じながら充実した生活を送っている。素朴で柔らかな雰囲気があって、地域に心を開いて思いやりを巡らせていくような、利他的な価値観を感じる。

・自然、地球環境、人の心、暮らしなど、いろんなものが「調和」する暮らしがもっと広がっているといい。特に東日本大震災以降の社会には、そうした価値観が人から人へ伝染して、広がっているように思う。

・自然を感じながら、ワインを飲む時間を楽しむ、というような暮らしができる地域。虫や草や、自然の力を借りながら営む暮らし。そうした文化的な側面を育むことで、人の心の豊かさが広がっていく。

・自然に対する考え方、自然破壊についての考え方を子どもたちに教育する。大人だけでなく、子どものころから自然について学ぶことにより、環境も変わっていくのではないか。

【都市の住人だからこそ自然の価値を感じる】

・海ほたるの観察イベントを実施しているが、地元の人はもともと関心がなかった。地域資源の価値は、外の人の方がよくわかる。私自身も外の人間なので、特にそう感じた。

【自然を活用する基盤整備も必要】

・情報通信網の強化が必要。山間部では未だにネットがつながらない場所がある。高台で景色が良いが、情報網が整っていない。それでは人は来ない。

・関西のワーケーションは和歌山が人気。淡路の

弱点は橋の値段が高いこと。ランニングコストが嵩むという部分の条件整備をしないと、淡路でワーケーションは増えない。
・若者がほとんどいない。若手に農業の魅力を伝えたい。また、若い人に来てもらうために、農業をデジタル化して魅力を高めることも重要。豊かな自然が若い人の活躍の場になることを期待。

23自由になる働き方

【学習を仕事に活かしさらに学びを深める循環】
・「自由になる働き方」では、能力開発が重要。大事なのは「学びと活動の循環」である。変革期だからこそ大切になる生涯学習、能力開発の方向性を提示すべき。

【デジタルデバイドが広がっている】
・ツールを使いこなせる人と、そうでない人で仕事の速さに大きな差が生じている。できる人は圧倒的にたくさんのことができる。そこの差が広がっている。ワクチン接種の混乱に見られるような問題、昔で言うデジタルデバイドの問題は依然としてあって、全体の底上げが進んでいると言っても、できる人とできない人の差は広がる一方だ。
・5年前、10年前と違うのは無料で使えるアプリケーションがものすごく増えたこと。できる人はそれらを使いこなして、お金をかけずにいろんなことができるようになる、できない人は全くできないまま、という状態になっている。

【広がるクリエイティブな働き方・暮らし方】
・東京を起点に海外で活動していた時に、丹波市出身の若手の人たちの中で、丹波市に移住したり、人口減少の中でも自分で事業を起こしたり、子育てを頑張ったり、空き家を活用したりというようなクリエイティブな働き方、暮らし方をしている人たちを見たから私もここでできると思った。
・今の世代には「こんな田舎の何もないところでは仕事がない」という感覚で外に出る人も多い。出る前に、どういうポテンシャルがあるのか、また、地元に帰ってくるという選択肢があるということを知ってもらってから外に出るということが必要なのではないか

【好きな場所で好きな人と仕事をする豊かさ】
・好きな場所で好きな人と仕事をするということ。それがストレスフリーなのではないか。

【プロジェクト型・ジョブ型の働き方の功罪】
・最近、ジョブ型の働き方が増えている。本来、時間をうまく活かして仕事をしたい人のための仕組だが、従来の雇用システムからあぶれる人が増えて、単にその受皿になっていくことが心配。
・従業員ゼロだが、一緒に取り組んでいるメンバーがいて、彼らは、大手企業の勤め人。年齢が大体50代で、子育てなどが一定落ち着いて、お金のことも気にしなくていい人たちが、プライベートで、自分のやりたいことや、キャリアップにもなるということで一緒にやってくれている。雇用関係は結んでおらず、給料も払っていない。当社の意義に共感して関わってくれている。
・新卒で外資系企業に入りマーケティングを担当している若者が、将来を見据え社内だけでは得られない経験をしたい、違う規模感の事業に関わりたいということで、今一緒にメンバーとして働いてくれている。
・プロジェクト型で働く若者たちは働くという意識はあまりなく、もっとソーシャルな取組に関わりたいという思いから関わってくれているのだと思う。新卒から30代の働き盛りの社会人もそのような働き方を求めている。そういう形でこれからも雇用の流動化は進んでいくと思う。
・ただ単に仕事を求めて来る人と主体的に目的意識を持って来る人では、本人のモチベーションが全然違う。
・メンバーはみんな、会社外の人と仕事をすることを求めて参加してくれている。デザイナーなど異分野の人とコミュニケーションをする中で相互に学びが深まっていくと感じる。
・事業のメンバーは完全遠隔勤務で、オフィスに来たことがない人が半分くらい。関東、関西他県から数名、学生もいる。会社に来たことがないメンバーもいる。

【心と身体をリフレッシュしながらの新しい働き方】
・新しいツーリズムの形としてワーケーションも可能性を感じる。最近、企業から10人規模でワーケーションをしたいという問い合わせをいくつか受けた。マリンスポーツや休息・美容を楽しみな

がら、ワーケーションしたいと言っていたが、面白いと思う。
・労働時間を減らして自由な時間をつくることが大事。結果として兵庫県が住みやすい地域になっていくことにつながる。
・建築工事の現場ではリモート対応はできない。単価も良くないので若者が入ってこない。60代でもまだまだ即戦力。夜中の3時まで仕事することも多く、余暇を楽しむ余裕がない。

【リモートワークで家族との時間・子育ての形も変わる】

・家族や子育ての時間を増やすため、徹底的にテレワークの導入が必要。

【ノマドワークで働き方のメンテナンス】

・田舎でのコワーキングスペースが増えている。働く場所を変えることで、働き方のメンテナンスを行うことができる。
・この施設の中は、どこでも無線のWi-Fiが使えるようになっている。自転車も貸し出し予定で、椅子などのキャンプ道具も貸し出しする予定。例えば海岸まで行って仕事をするようなことも気軽にできる。この地域は、コンパクトにまとまっているので、自転車でいろんなところに行くことができる。
・海外で働く経験をしてみて「渡り鳥」のように働くのは利に適っていると感じた。そのとき一番いいコンディションの場所で働く、ずっと同じ場所で働くのではなく、季節などに応じて働く場所を変えるということは、働き方として、効率も上がるし、本当に良い。

【働き方の多様性を意味するユニバーサルという概念】

・「ユニバーサル」は働き方の多様性という意味を含む非常に幅広い概念であり、バリアフリーはあくまでのその一部。ポイントは、働きたい人がスキルを磨くチャンスも働くチャンスもあって、稼ぐことができる道筋があるということだと思っている。さらに踏み込むと、ビジネスが安定し、職を失うことがないということも大事で、ここが今後の課題だ。
・働くことは生活の中で大変重要な要素。働きの中に人間の幸せがある。だから経済が大切で、経済が動かないと地域は主体的に動けない。だからこそ経済的な自立が重要だ。こうしたことをもっとニュアンスとして試案の前段のところに書いておくべきではないか。
・ジャック・アタリの『命の経済』という本に、お金の経済から命の経済へという話が書かれていた。病院で働く人や農業従事者、農産物を運んでいる人、販売している人、飲食店、介護、鉄道、インフラ関係で働く人など、ベーシックに必要で、実体の生活の中に一番いなければいけない人たちが今の社会ではコストとされている。そうした労働をする人をもっと大事にしなければならないという話に強く共感した。
・ベーシックインカムや最低賃金を上げろという話につながるが、みんなの最低賃金をあげて、ある程度健康に楽しく暮らしていける状況に持っていかないといけない。つまりコミュニズムの社会である。しかし、昔のコミュニズムとは違って、労働組合が単に権利を主張するのではなく、全員が経営者という感覚を持たないといけない。社会の形としては、サービスを提供している人たちに、きちんと給料が支払われる社会である。
・総務、人事、労務、広報等の業務を細かく切り出し、空いた時間に細切れにやってもらえるようにする「ショートワーク」がどんどん広がっている。すでに仕事はもっと自由になっている。

24軽くなる住まい

【精神的な居場所やつながりの大切さ】

・大学、社会人で一度但馬を出たあと戻り、今は結婚して阪神地域に住んでいる。但馬にUターンして3年ほど暮らしたが、その間、仕事を通じて但馬に新たな知り合いや横のつながりができて居場所がだんだんとできていった。都会に出てきて、居場所がまだ全然ないと感じた。新しい人が入ってきた時に受け入れていくような交流のできる場所があったらよい。
・住まいが軽くなる裏にある現実として、コミュニティの崩壊が懸念される。さらに、受け継がれるべき、文化が消失したり、つながりが希薄になったり、住まいが軽くなることによる負の側面を考える必要があるのではないか。

・今の若い人たちは家に関する考え方が重くない。土地に対する考え方がライトになっている。ショートタームであちこち移動するのが普通になるだろう。社会の変化と、家族構成の変化に応じて、いい条件があれば、すぐに住む場所を変える人が増えると思う。買ったら動けない。ずっと住むことを想定して家を買う人は減る一方だろう。

【住まいの流動化を阻害する壁とは】

・環境問題の観点から、住み替えにあたって住宅を建て替える日本の文化は非常にもったいない。
・最近、古民家の活用が盛んに言われるようになったが、一方で、新たに建てる基準として、どういうものを建てれば、リユースできる建物になるのか示していく必要があるのではないか。
・住居が軽くなることにより、ハードの家だけでなく、家制度から解放される。人口減少により、人と生活空間の比率が非常にアンバランスになるなかで、1人の人間では、多くを管理できない。人間が軽くなっているなかで、重い荷物を持たせることになる。空間の管理システムをどう作っていくかが課題。
・大きく二地域居住には、3つの壁がある。一つは仕事、二つ目はお金、三つ目が教育である。いずれもこのコロナをきっかけに変わってくるのではないかと思っている。

【多様な地域を味わえる二地域居住】

・二地域居住を進めるには、地方の受け入れ側に重要な役割があると思う。住んでみて思うのが、地方には独特のルールがある。顔の見える関係の中で、よそ者が警戒される。そこにはやはり、つなぎ役が必要だと思っている。
・大学院で二地域居住は避難に有効だという話をしても、教授からは二地域居住はお金持ちの政策でもっと一般の方向けの政策を考えるべきではないかと言われた。お金持ちの人たちのものというイメージは根強いものがあると感じた。
・二地域居住は別荘というイメージが強いのかもしれないが、田舎の家賃も安く一つの家を複数の気心のしれた仲間でシェアする形をとれば、負担は軽くなる。管理は地元の人が管理人として働ければ、地元の収入源にもなるし、利用者の経済負担も減少する。そうすれば無理のない形で二地域居住が実践できるのではないか。
・二地域居住は、いろんなことができるメニューをそろえて普段から二地域居住を進め、結果として、災害の時に役に立ったという形に持っていかないといけない。そういった意味で、デュアルスクールのような選択肢を提供していくことも考えないといけない。
・独身の人は多拠点居住のような動きも出てきており、勝手に動き回ると思うが、子育て世帯の人たちは動きにくいので、そういった人向けのメニューを考えて取組を進めたい。
・将来的には、兵庫県に住んでいる人はみんな家が2軒ある、極端な話、みんな別荘を持っているという状況になれば面白いと思う。東京、大阪からうらやましがれるのではないか。実際ロシアではダーチャというものがある。

【新しい住まい方】

・タイニーハウス（小さな家）に注目している。車輪をつけて動かせる家も出てきている。
・実験的に六甲山などで、気軽に別荘を持てるということをやっていきたい。選択肢として可動できる家もあるし、そこにいくのに、自転車やミニバイクを使うなど、お金のかからないアクセスの方法がある、そういう社会にしていきたい。
・家や別荘を建てるにはすごくお金がかかる。田舎に行くには車がいる。こうした障壁をなくせるようトレーラーハウスの活用を考えている。課題としては、浄化槽の問題と、停める場所の問題がある。それに合わせた法整備が必要で、トレーラーハウスを置く場所の基準の整備や建築基準法の緩和などが必要。
・お金がかからずに、みんなが別荘を持てる社会をつくりたい。トレーラーハウスはDIYでやれば300～400万円で作れる。例えば六甲山の山頂にそんな別荘があって、行き来は自転車でする。withコロナ時代の暮らし方だと思う。

25快適になる移動

【暮らしを一変させるモビリティのDX】

・空飛ぶ車もエネルギーをどう補給するかさえ解決すれば、30年待たなくていい。
・地域活力を高める要素は、自動運転車などデジ

タル技術の活用。加古川市のスマートシティ構想には期待している。

・移動の手段に不安を抱えて、家の中に縛られている高齢者も多く見受けられる。将来、自動運転専用レーンにコミュニティバスが回遊して、引きこもりがちな高齢者が買い物や病院に出かけるようになれば、人と合う機会も増えて活動の場が広がる。

【自転車が自在に回遊するシームレスなまち】

・どうやって動くかという概念が大きく変わるはず。自転車やキックボード、ベビーバイクをラストワンマイルに使うようになるだろうし、電車やタクシーも変わっていく。特に鍵になるのが自転車だと思う。自転車を車や公共交通機関に乗せられるようにするなど、自転車でどう動きやすくしていくかということをもっと考えないといけない。

・自転車の話が最近盛り上がりを見せている。神戸市も瀬戸内DMOもJRも取組を進めている。今度、神姫バスの前に自転車を乗せることができる器具を付ける社会実験を実施予定。神戸市営地下鉄や神鉄にも、自転車でそのまま乗り込めるようにさせてもらえないか話をしている。そういうことができれば移動の仕方がかなり変わるはずだ。

・折り畳める電動バイクで、小さいスペースに収納できるようなものもいろいろと出始めた。こういうものを柔軟に交通網に取り入れていくべき。

【高齢者の免許返納時代の病院・買い物問題】

・実家が新温泉町にあって、85歳の母が一人暮らししている。実は最近車の免許を返納した。過疎化したところにいると買い物すらいけなくなって、すごく困っているのを見た。

・スーパーに高齢者がタクシーで来ているのをよく見かける。近くに病院もないし、バスも一時間に一本しかなく、バス停も遠い。お年寄りに優しいまちになっていて欲しい。

・これから自動運転が都会を中心に導入されていくのではないか。田舎中心に5Gを整備して、自動運転を導入していくべき。病院が遠い地域は高齢者の足の問題が大きい。

26進化する自治体

【行政も住民も進化する】

・行政サービスはもはや自動販売機ではない。要望すれば応えてくれるというものではない。お金がない。行政に要望するだけでは物事は進まない時代なのに、依然声の大きい人は行政、行政と言う。そんなこと言っても無理だろうと若い人は思っていて、政治のやり方が変わらないので若い人が政治に無関心になる。この悪循環に陥っている。

・この状況自体を改める必要がある。行政のアップデートももちろん大事だが、それ以上に住民のアップデートが必要だ、ということを、これは役所からなかなか言い出しにくいことかもしれないが、はっきり書いてはどうか。

・病院や買い物など、やはり都市と地方で地域格差がある。地域格差をなくすための一つの提案は知事がもっと動くこと。神戸に県庁があるので、県民は知事がそこにしかいないと思っているし、どうしても県庁は神戸の発想で考えていると思う。知事が県内を動き回れば、県民の意見を直に聞くことができるし、県民にとっては知事の顔を知ることで、自分たちの意見を汲んでくれていると県を身近に思うことができる。

・進化する自治体とあるが、本当に進化するのか。日常の事務はオンライン化し、窓口から人がいなくなる。そのとき自治体は何をするのか。企画業務しか残らないのではないか。自治体がどうなるかを示す必要がある。一方で、県民が自治体に何を望むかを分けて考えることも重要。何でもかんでも自治体に丸投げでなく、自分たちで行う価値観の変化が必要。

・CRO(chief relationship officer:最高連携責任者)の設置と地域の人財をつなぐ人的基盤及び情報プラットフォームの構築を提案する。兵庫県によらず、行政最大のネックは人材の継続性とタテ割り組織にある。また、外部との連携・協働を図る際にも、細かく職務分掌された状態では、きちんと受け皿としての機能を発揮することは難しくなっている。

・税金のことをもっと大事に考えるべきだ。その視点がビジョンに入ったら素晴らしい。これだけ税金が必要な時に、これほど税金を払いたくないと

国民が思う国は非常にやばい。

・自治体が当事者の意見をしっかり聞き取って施策を考えることが大事。当事者の発意を大事にすること＝自治であり、それが自治体の施策の出発点であるはず。

・面倒くさいことこそ大事。当事者の声を必ず聞くという面倒くさいことをきちんとやる県、県民との間で開かれた相互理解の関係を作ろうと努力する県であってほしい。

【誰も取り残さない】

・公共サービスについて、アナログの方が勝る場合もある。発展すればするほど、アナログも大切。

・自治体がより機動的に効率的になることで、できるだけ多くの人を取り残さないことができるはず。

【社会のDXを自治体行政が先導する】

・シェアリングエコノミーが大事だと思うが、今流行っているシェアリングエコノミーは大企業が儲かる仕組み。移動、通信などのベーシックなインフラサービスは、本当は行政がやるべきだということ。少なくとも行政がコントロールすべき。スマホはもはや社会のインフラなので、高齢者のデジタルデバイドの話もあるが、強制的にみんな使うようにして、自治会の回覧もスマホで見るといった習慣に変えてもらうべき。交通もインフラであり、民間に任せきるのではなく、経済合理性に乗っ取りつつ、行政がもっとコントロールすべき。これはある種のコミュニズムで、目指すべきは民主的なコミュニズムだ。

【広域連携や首都機能の地方移転】

・地方創生には、首都機能の地方移転も有効な取組ではないか

・根本的な課題の部分は、どこの都道府県でも似ているので、課題を解決したいのなら、兵庫だけでやる、ではなくて、関西一円で手を組んでやる、ぐらいのことを考えないとダメだ。

・兵庫県だけ、神戸市だけでできるわけがないことを自治体の単位でやろうとしていること自体が間違い。同じ課題を抱えている者同士みんなで手を組んでやっていく、そういう発想をベースにできるかどうかが非常に重要。

・桁違いにでかい相手である東京に対抗しようという時に、京都、大阪、兵庫がバラバラでどうするのか。自治体間の壁をぶち破ることができるかどうかがものすごく重要なポイント。

【公民連携・自治体職員が殻を破る】

・民間との協働領域、半分ビジネスみたいな領域に大きな可能性がある。従来の自治体職員の殻を破らないといけない。

・行政の発想が古すぎる。アップデートが必要。個々の地方でできることには限界がある。抱えている課題は同じようなことなのだから、全国の地方がもっと手をつながないといけない。

（5）美の創生

（主なキーワード）

（主な意見）

27ともに創るまち

【住民起点で動く】

・震災後に良かったのは、協働の動きが芽生えたことだ。住民が行政に文句を言う形ではなく、住民はこれをするから、行政にはこれをお願いする、という形になった。

・これからは、まず住民の活動が先にあって、それを行政がサポートするという形にしていくことが大切。住民が自分たちの地域をどうやって良くするかを意識することが大事で、住民起点が基本。それに対して行政ができることは何かを考えるという関わり方が重要だと思う。

・「やってください」だけではなく、住民自身も動いていかないと情報は得られない。

・まちの資産価値を高めるには、街路樹などの緑の環境が大事。行政にすべて任せるのではなく、民間で植栽して、住民や所有者が行政に頼らずに管理していけば、自分たちで自分たちの街のステータスを高める形になる。

・産官学連携とよく言うが、市民の視点が抜けている。大きな主体に任せるだけではダメ。

・どうしたら集まりやすくなるか、つながりが増えていくか、考えていく必要がある。

【市民が主体的に学ぶ】

・市民も主体的に学んで、自分たちの思い描く未来に導いていく視点は重要。

【小さく始める】

・最初から完成形を目指さず、まず小さく始めてみることだ。最初から練り上げない。作り込まない。実験しながら修正していく方が面白い。大事なのは中身であり、自分なりのこだわり。

・若い人は小さいイベントを仕掛けて実績を作っていく。自分たちで練習ができて、どんどんできるようになる。それを許してくれる環境をつくることが大事。

【過程が大事】

・拠点をつくるまでの過程が大事。多くの大学生に手伝ってもらったが、無給で毎日ハードワークしながら完成して、最後に大学生が涙を流しながらスピーチをする。この町を身近に感じるようになると、住民税を支払うのも身近に感じる。分散が主流となったとき、こういう愛着を持ってもらうことが地域への移住のきっかけになるのではな

いか。
・DIYが楽しめるリノベーションパッケージがある地域になればよい。
・地域づくりや支援の仕組みづくりには、見せ方やデザインが大切。「築100年の古民家を再生して、学生の基地をつくろう」というとみんな集まる。

【面白ければ人はついてくる】

・面白ければ人はついてくるし、集まってくる。仕掛け方次第だと思う。
・地域のために頑張ってくれてありがとうと言われるが、私自身は遊びでやっている。
・本業があって、地域活動は主に土日にやっているが、レクリエーションであり、休みだと思っている。何かを犠牲にしてやるようなことではない。

【大人が楽しんでいる姿を見て育って欲しい】

・何もないけど自分たちで駅前にテントを張って、お母さんたちにご飯をつくってもらって食べる。そういうのを見て楽しそうだという感覚が頭の中に残っていたので、戻ってきたというのもある。大人が楽しんでいるのを下の世代が見て育っていってほしいと思っている。
・子どものころ、町内での放送は子供が行っていたが、「うるさい」等の意見が出て、なくなってしまった。子どものすることをつぶさないように年を取りたい。

【地域で活躍している人が活動しやすい環境づくり】

・移住されてきた方々を見ていると、それぞれ特徴のある得意分野を持っている。若い時から積み重ねてきた経験を、街のために、部落のために、お役に立ってもらう、そういう能力を発見する、能力を認める、そういう機会が必要。
・地域で活躍している人が活動しやすい環境づくりを進めることが、兵庫らしさを発揮していく上で必要だ。
・日本全体でも、一人ひとりが持っている個性や強みを掛け合わせるような国とか地域づくりができたらいい。
・ちょうどいい距離感でほっといてくれる。ある意味で自己中心的に「こんなまちにしたい」にチャレンジできる雰囲気が自然にデザインされていることが大切。

【多様な人々がつながれる場所が必要】

・多世代、多国籍、いろんな趣味を持っている方がつながれる公園ということで公園がグレードアップしている。
・一等地を使って市民に公園として安全な場を提供するという点と、いかに稼いでいくかということを考えていかないといけない。
・海浜公園の中に、明石にあるようなバーベキューサイトやグランピングの施設などがあれば、景色もいいし人が寄ってくるのではないか。

【地域課題をビジネスで解決】

・地域課題をビジネスで解決し、地域内でお金が循環することで、自分たちで地域をつくることにつながればいい。

【ものづくりをまちづくりに活用】

・子供たちがものづくりを体験できるファブラボを開設している。高砂の特性であるものづくりをまちづくりにつなげていきたい。

【エリアマネジメントが重要】

・灘の魅力を高めるためには、それぞれの地域でメリハリをつけていけばいいと思う。エリアの魅力を強く押すことが大事ではないか。
・北播磨各市町の特長を持ち寄り、スポーツ大会は小野、教育施設は三木、高齢者施設は多可、単身者でも遊べるところがあるのは西脇といった風に、最終的には北播磨全体で一つのテーマパークのようになればいい。
・例えば、おばあちゃんの里がある春日は観光を強化するなど、丹波市一律でバランスをとるのではなく、旧町の強みを伸ばすエリアマネジメントが必要である。

【歴史を大事にしながら、新しい要素を入れる】

・地域の範囲を決めて、そこに蓄積する資源や歴史を深掘りすれば、いくらでもアイデアは出てくる。これまでの歴史を大事にしながら、そこに新しい要素をどう入れていくかを考えるのが面白い。
・この街の状況が未来永劫続くわけではない。大事なことは、昔に逃げずに今の時間をどう有意義に過ごすかということではないか。
・道と川もキーワードだ。人の道、モノの道として、人間は道を作り、川を使ってきた。こういう道の形をどうデフォルメしてこれからの時代の形にしていくか、というのもおもしろい切り口だと思う。
・古民家カフェなど、資源の再活用で活性化につなげられたらおもしろい。
・空き家を、シェアハウスや短期間滞在ができる施設として活用できれば良い。シェアすることで低収入の人も入りやすく。二地域拠点の人も入

りやすい。
・高砂は小さい街だが、海もあり山もある。古民家を使うなど、レトロな昭和をもう一度つくろうと取り組んでいる。高砂市民にはコミュニティ力がある。

【自然の価値の再評価】

・摩耶山ではファンづくりの一環で「マヤカツ」をしている。これは摩耶山上で好きなことをしてくださいというもので、それぞれの団体が主催者になり、リーダーがいる。いろんなことをして関わる人を増やしていくことが重要ではないか。

【商店街にしかない価値の提供】

・商店街、市場はもはや物を売るだけの場所ではなく、コミュニケーションを楽しむ場所だと思う。行って楽しい場所という方向にもっと振っていくとよいと思う。
・市場は地域のコミュニティスペースでもある。コミュニティとしての商店街の役割は大事で、今後も大切にすべきものと感じている。
・小売業はネット宅配市場の拡大で厳しい状況。もっと各店舗にリアルな体験価値を付加していかなければならない。

28引き継がれる風景

【土地のストーリーを語る】

・食材を提供するにあたって、この黒毛和牛肉はこういう人が育てて、と言う話をしている。
・その土地にはこういうストーリーがある、ということが住む場所を選ぶときの決め手になる時代が来るのではないか。ビジョンや制度、改革にもストーリーが必要だ。視覚だけでなく、五感を通して心に響くようなものが求められている。

【美しい里山や田園風景を残したい】

・ブドウ農家をやりたくて神戸から三木市へ移住した。農業も楽しく子育てや暮らしの環境面でも恵まれていると感謝。この美しい里山や田園風景を残したいと心から感じる
・近所の地区に空き農地ができ、依頼があればすべて農地保全の目的で借り受けている。機械の更新負担が軽減されれば、景観の維持を少人数で行うことが可能になる。
・私が事業を展開している神河町も佐用町もこの景色を都会の人に見せたいと思ったのがきっかけ。佐用町で20年廃村だった集落を高台から見たとき、子ども達がいて川遊びして住民が交流していた姿が浮かんだ。

【デザインにこだわるまち】

・田舎だからこそデザインにこだわるべき。豊かな自然におしゃれな施設があれば最強のコンテンツになる。
・神戸の好きなところは、少し路地に入れば、玄人好みのお洒落なお店がたくさんあること。新しいまちづくりでも、この雰囲気をさらに広げていけば、住む人の愛着や誇り、来る人の満足感も高まっていくのではないか。
・岡山の問屋町のような、まち全体として景観に一体感があって、お洒落なお店が並ぶ街並みをつくりたい。若者が憧れる神戸にぴったりである。

29甦る豊かな自然

【自然の持つ「価値」】

・自然は“美しさ”の側面も当然あるが、生物多様性、生態系サービス等、自然の持つ「価値」に主眼を置く必要がある。
・現在も多く残る希少種や固有種のいる環境を適正に保護管理していく必要がある。

【自然を楽しむ】

・海沿いに親水空間ができると、昼は海、夜は山というような楽しみ方もできる。

【生活の中に感じられる自然】

・川中の道を歩いていると、18時ごろになったら摩耶山の方から山の匂いが降りてくる。また違う時間には河口から海の匂いが上がってくる。わずか数キロで山と海を結び、それぞれの自然を感じられる。

【流域単位のつながりを活かす】

・兵庫県は森から海までつながっている両方を持つ県でもあるので、流域の山の方の地域と海の地域、林業をする人、農業をする人、漁業をする人といった流域単位のつながりで考える地域ビ

ジョンにできないか。
・兵庫県は唯一瀬戸内海と日本海に面している県だ。二つの違う海をどう活かすのかをもっと考えたらよい。

【甦る豊かな自然の先進事例】

・「甦る豊かな自然」の事例で尼崎100年の森を使わないのか。火力発電が森になったわけで、そういう事例をうまく使うべき。
・自然の中で虫の一生を調べたり育てたりしているが、森の中で「生死感」を深く感じたりする。尼崎は昔、煙のまちだったが、今は緑や森で生きることや自然の豊かさを感じられる。
・水自体がきれいになれば、住んでいる人のイメージも変わるし、周りに建物をたてようという気持ちにもなる。若い世代が憧れるまちにしたい。

【自然美が守られながら、生業も活性化】

・多くの集落では、少ないながらも、集落営農や6次産業化などの生業の活性化と、地域の森林を守る活動など地域の自然環境を維持する活動がリンクしている。
・地域の自然美が守られながら、生業も活性化するということも考えていかなければならない。

【どのように自然と折り合うか】

・管理しながら自然と折り合っていたが、管理する人が少なくなり成り立たなくなっている。食べるためには、自然を活用していかないといけない。どのようにして自然と折り合っていくかが課題だ。
・人間が手を入れないと山が荒れてしまって、災害にもつながる。鳥獣害被害も出てくるだろう。

【山を守る】

・県全体で見たら膨大な量の材が蓄積されている。単なるチップだけではなくて、もっと付加価値の高い材としての利用を広げることも含めて考えないといけない。
・大切なのは、一体そこにどういう森を作りたいかだ。今まで闇雲に生産林を増やし過ぎた。兵庫の森の百年構想が必要だ。
・山が放置されて、持ち主の代が変わると境界がわからなくなる。知らない人が買いに来ても売ってもらえない。
・素材を生産して利益を出すだけでなく、山の手入れをすることにより山が若返り、きれいな森林、きれいな空気、豊かな水、豊かな食を生み出す。林業は国民全てに影響する産業である。
・山をよくすれば川や海のプランクトンが豊かになる。地域を守ろうとすれば山を守らないといけない。
・健全な山を作ることにより、山の保水力が上がり防災に役立つ。重要な1次産業だ。

【海を守る】

・豊かな海と言われた瀬戸内海の漁獲量が激減している。要因は栄養塩不足だけではない。温暖化の影響で、南方系の生き物が侵入するようになった。
・将来も自然豊かな地域であるためにも、砂浜を汚しているゴミをなくしていきたい。
・牛の糞尿の下水放流ができないか。下水は来ているので、許可が出たら、すぐ利用できる。バイオガスプラントの整備に比べてコストも安上がり。水産業にもメリットがある。尿から集めた成分を放流することで海への栄養補給もできる。

【養殖技術で世界をリード】

・絶滅危惧種を救うというような形で、兵庫が養殖技術で世界をリードするようなことも考えられる。
・海の上で農業をする海上ファームが進む。防波壁もあって、オートメーション化された水耕栽培の温室で、農薬や殺虫剤を使わずに栽培する。そして、その下で魚の養殖をする、という時代になるだろう。

【鳥獣害対策の必要性】

・鹿の被害がひどい。新芽を食べられてしまうため再生しにくい。
・木を切るだけなら自分たちでどうにかなるが、植林して鹿対策としてフェンスを張ったりというところまではマンパワー的に難しい。

【環境問題を学ぶ】

・小学校での環境体験学習などを通じて、身近な自然環境としての地球温暖化の影響や、適応策を知ってもらい、プラスチックのゴミ問題を伝えながら自らの行動につながるようにお願いしている。

30息づく芸術文化

【若い人の文化を周縁化しない】

・文化を議論するときに大事なのは、スケボー、ス

プレーペインティングなど若い人の文化を周縁化しないこと。正統的な文化だけを対象に議論していてもダメ。いろんな文化を活かしてつながりをどう作るか、という視点で考えていく必要がある。

【文化の振り返りが重要】

・いい文化を新たに作るだけではなくて、過去の歴史文化を振り返って、だからこうなっているという理解をするような、振り返りが重要だ。

【芸術はまちの魅力に大きく貢献】

・西宮は住みたい街に選ばれる文教都市。その魅力を高めている要素の一つは、9つの大学と、競争力の高い起業などの知的資源。もう一つは、モダニズム文化に代表される芸術文化資源。芸術は街の魅力に大きく寄与する。

【暮らしにアートが溶け込んで潤いを与える】

・瀬戸内芸術祭などのアートイベントで感じたことは、アートによって原風景を失ってはいけないのではないかということ。直島のようにアート作品だらけになるのも、それはそれで良いが、素朴な原風景を残しながら、観光だけでなく、地元住民や移住者の暮らしにアートが溶け込んで潤いを与えている地域がよい。

【暮らしの中で表現する】

・フラダンスをしていて、海辺で活動しているが、身近な植物を採集して編んで身につけたり、海をきれいにしたり、暮らしの中で表現することで、場所を大事にするとか、人と人とのつながりを大切にすることが大事ということが実感としてある。

【芸術にも他地域と連携が必要】

・豊岡演劇祭やおんぷの祭典をやっているが、芸術に積極的な阪神間や姫路など他地域と連携してやることも大事。

・阪神間には舞台芸術の拠点がいくつもある。一緒に何かやっていくことを考えてほしい。

【文化は協働するための有効なツール】

・協働という言葉に共感。そして文化は協働するための有効なツールでもある。コロナ禍においても、人の心を支えているのは、音楽や演劇や本など文化の力が大きい。

・地域の人が同じ方向を向いて、こんな地域をつくっていこうと心を一つに合わせられるのが文化である。文化は地域をみんなでつくっていくために大きな役割を果たす。

【伝統文化を仕事につなげる】

・伝統文化に興味を持っている人に対して教えることで、就職や後継者の育成に繋がっていけば良い。

31広がる生活文化産業

【過去の営みから見出す価値】

・高砂染は姫路藩の17個ぐらいの献上品の一つ。姫路藩は姫路市、高砂市、加古川市、播磨町が範囲だが、名前が高砂なので、なぜ他の市のことをしなければならないのかとなる。そういうことで、埋もれてしまっているものが実は多くあるのではないか。

・工芸品は人の営みとして作られてきたもので、その起源が、江戸260年の藩の営みの中にあるものはすごく多い。そういったものを無視できないのではないか。

・流域文化圏の視点も大事だ。加古川市でコットンを栽培するお手伝いをしているが、元々は姫路藩の家老河合寸翁が奨励してやり始めた。加古川の舟運に載せて、高砂港に集めて、北前船に載せて、大阪まで運んでいた。綿花の栽培地は、川に沿ってどんどん北に広がっていった。綿花の加工技術の流れで、加古川に靴下産業、西脇を中心に播州織が発展した。

【新しいことを続けて伝統を守る】

・丹波焼は、800年以上もの歴史があるが、その間ずっと変化してきている。伝統は守りましょうという思いは守っても、形は変化していて、その変化を認められることがこの産地の特徴。そうでないと伝統産業は生き残っていけない。

・これまでの伝統や技術を受け継ぎながら、デジタル技術の活用など新たな時代に対応した取組をどう両立させていくかが今まさに問われている。

・違うファン層を見つけるためのイベントを考えていると、助けてくれる人がたくさん出てくる。その中には若いお客さんが多くいる。

・人に会う機会が減るからこそのギフトを提案したり、インスタでお洒落に発信してもらうとか、或は、材料になる植物の種類も同じものばかり続ける

のではなく、多種多様な品種に対応できるよう改良・開発を続けている。技術はコモディティ化していくが、新しいことを続けていることに強みがある。

【色んなパターンが芸術の中にある】

・芸術一括りではなく、産地を守る分野の職人と、自己主張を主にするアーティストと色んなパターンが芸術の中にあるということを議論の出発点にしなければならない。

・作り手とプロデューサー業、販売業など分野別のしっかりしたシステムをつくる必要があることを提案する。

【産地の大切さ】

・50軒60軒あって、産地と呼べるのであって、一軒二軒に淘汰されてしまうと、一人のアーティストでしかない。産地としての大切さを一番に思っていただきたい。

【職人を守る】

・醸造職人は季節労働。冬しか稼げない。職人を守るには保障制度の充実などが必要。

【日本で唯一の皮革産業】

・日本で皮革産業は姫路にしかない。皮革産業も素材を提供するだけでなく自分たちで商品を作って姫路ブランドを世界に発信することが大事。世界のデザイナーが姫路に集まるような30年後を目指す。

【店舗以外の販売手段の強化】

・通販、宅配が急速に広がっており、店で物を売るだけの役割はますます小さくなる。店舗以外の販売手段をどう強化していくかが大きな課題。

・移動販売や、移動キッチンに可能性がある。いろんな成功事例が出ているので、我々も出向く商いを考える必要がある。

・県からこういう地域に行ったらどうか、こういうスペースを使ったらどうかと投げかけてもらったら、やる気のある方は、どんどん出かけていくのではないか。

【グループで盛り上げる】

・播州織博覧会に外から来た色んな人が、西脇を気に入ってくれて空き店舗を活用しだしている。一人ではできないけどグループだったら経営できると思っている人もいる。

【生活の充実が重要】

・神戸の観光は特に市民の生活と観光が重なり合っている。だからこそ、住みやすい、暮らしやすいという生活の充実がまず重要。

・暮らしの充実とは、結局市民一人ひとりがハッピーになること。いろんな地域、産業が元気になって、それに関わっている人がハッピーになれば、そこに人が惹き付けられる。

・人と人をつないでハッピーな状況を作っていく、異分野をつないで相乗効果を発揮させていく、コラボレーションを生み出す「つなぎ役」になることが観光部門の大事な仕事だと思っている。

【個人が面白いことをやっているところに行く】

・旅行でも、定番の観光地より、価値観が多様化する中で個人が面白いことをやっているところに行くという風にシフトしていっている。

【ごちゃまぜの形の観光】

・観光×○○の○○にはたくさんあって、いろいろ重ね合わせて「ごちゃまぜ」の形をつくっていくのがよいのではないか。

・古民家改修の宿泊施設は各所にあって増えているので、思い切って特化する方がいい。例えば「椎茸」に特化とか、「たき火」に特化とか。「林業」に特化とかもいいと思う。

【人を惹きつける魅力】

・瀬戸内は魅力が多い。昔は東京の広告代理店でないと出来なかったが、今は地元クリエイターで上質なPRができる。兵庫へはクリエイターの移住が進んでいる。そうした人との繋がりが新しいものを生む。

・コロナ禍に「生き方を追求する」をテーマに多世代の学習塾を開設した。東京、北海道、全国、海外からも参加がある。神戸はゲートシティだ。

【インバウンドで稼ぐ】

・淡路島を一つの小さな国と考えたら、インバウンドで稼ぐしかない国なので、そこは発想を変えてやっていくしかない。インバウンドで稼ぐという発想に切り替われば、あつれきがどうこうの話ではなくなるはず。

【サステナブルツーリズムの潮流への配慮】

・サステナブルツーリズムの潮流への配慮が必要。

・観光で人が増えたときに生じるオーバーツーリズムへの対応を地域で考えなければならない。そうしたコミュニティをリードしてくれる人材も必要。

（6）次代への責任

（主なキーワード）

（主な意見）

32人に投資する社会

【変化する学校教育】

・国際的に見て教育支出の水準が低い。EdTechを文科省ではなく、経産省が旗を振っていることが象徴的。文科省、学校現場が変革のスピードについていけるかどうか。経産省がEdTechをやっていることの残念さを教育関係者はどう受け止めているのだろうか。新しい施策に対する学校現場の抵抗感をどう取り除いていくかが課題。

・知識の伝達とそれ以外で教員の役割を分けるべきだ。教員の働き方改革の面から必要な取組。

・未来の学校では、先生はどんなことを教えていて、生徒はどんなことを学んでいるのか。2030年に消滅する仕事に、小中学校の先生がリストアップされていた。だとすると現在のように学校に子供たちを集めて知識移転を行う「学校教育」自体が大きく変革しなくてはならない。

・学力世界一のシンガポールで、オンラインで授業の動画を配信して習熟度に応じた学習ができるようにした方が、学力が高まるという研究結果が出ている。学校の先生はオンラインでできないことに特化した教育活動を行い、能力を高めたほうがいい。

・学校教育を否定するだけではなくて、社会が補う仕組みをしっかりと創らなければならない。

・学校の先生がいなくなるという議論もあるが、学校は認知教育だけを目指した場所ではない。効率化によってできた余白にもっと、人間らしいことを体験したり学んだりする教育にシフトする必要がある。

・GIGAスクール構想など、先生の多忙な業務に余白をつくるという視点が欠けている。余白をつくるのがAIやICT等のテクノロジーである。

【新たなスキルを獲得できる環境】

・テレビが悪い訳ではないが、受動的な媒体が多く視聴されていることが問題。スマホやパソコンでどこからでもアクセスできる現状にあるので、一皮むけると世界からも選ばれ、世界に出て行ける一つのリテラシーアップになる。

・AIによって仕事が奪われるというのは、実は止める止めない、良い悪いの次元ではなく、事実として起こること。その前提で考える必要がある。

・技術の進歩によって、仕事がなくなりそうな人が、

人から機械に置き換わる間に、別の仕事にスキルチェンジするために学び直しの場を整備していくことが大切。

【地域の活性化には地元人への投資が重要】

・地域は資源を活用して価値に変えるということをしていない。人がつながり、やりたいことがある人や地域にいる人を守ることが重要。
・自分たちで地域をつくるという意味でも、人を育てることが重要だ。
・教育において、地域社会という視点からどのように兵庫に還元していくかという仕組みづくりや工夫が必要。
・若手の育成で、即戦力となる人材を大学等から募集し、雇用することによって生産量を上げていこうという動きもあり、移住者が下宿するシェアハウスも視野に入れながら昔から持っている建物を活用するような動きがある。
・大学は人口百万ぐらいの街でないとできないと思っていた。人口が少ないところでも芸術文化観光専門大学のように特色があれば人を集めることができる。大事なことは人を育てること。高等教育やリタイア後の生涯教育の場がもっと必要だ。
・神戸は多国籍で、歴史も古く学べることが多いが、地元の人が神戸の良さをわかっていない。

【変化する職業】

・ドイツなどはマイスター制度など、職人の資格が重要視されている。ものづくりや農業をやっている人がすごいということがわかる認定制度を作ることを提案する。
・やる気のある人がどんどん伸びていくという意味では、TANBA STYLEが当てはまる。商工会にずっとお世話になっているが、商工会も十年ぐらい前からやる気のあるところをどんどん伸ばそうという動きになっている。TANBA STYLEを提案したら、予算をつけてくれた。
・2050年の社会は、AIなど先端技術が進歩し便利な社会になっている。一方で、AIに人間の仕事を奪われるのではないかと心配している。AIにはできない「考える力」、創造力を身に付ける必要がある。
・将来がこうなっていくから、今こういう教育をしているということを子ども達に分かりやすく伝えないといけない。
・未来では今は想像もできないような仕事が生まれている。急速に変化する時代でも力強く生き抜いていける若者を育て、そういった若者が集まるような地域にしたい。
・学ぶ場や学びを生かす場が少なく、教育格差も課題。めざす姿は、若い世代だけではなく全世代が教育を受けられ、ITに強くなること。多世代が自由に教育を受け、世代間交流が活発になればいい。

【自ら考える力を伸ばす】

・一人ひとりが自分をどうしたらいいかということを理解し、いろんなことを自分なりにできる能力を備えていることが必要。
・模範解答をすることがいいと考える若者が多い。
・ドラッガーの言葉に「顧客創造」というものがある。今見えているもの以外の課題を設定して、解決のために試行錯誤させる教育が必要。
・小さい頃から、何かに興味を持って、それを探求していくことが少ない。先に解答を教えられて、その解答を覚えることだけをしてきた。子どもたちの「なぜ、どうして」を伸ばすことが大切ではないか。
・STEAM教育の導入推進やGIGAスクール構想により、創造的アプローチによる問題解決の力を子どもたちが身につけていくことになると思うが、現状では「答えの決まったテストで子供の能力を測る」「学校の偏差値や学歴で優劣を判断する」など、子どもへの評価の社会的基盤はまだ整っていない。センター試験の廃止や各大学でのAO入試もしくはそれに代わる入試の仕組みの導入などが行われており、それらが普及・認知されていくことで、将来的には、子どもたち一人ひとりが持つ力を評価・発揮できる社会が実現できる。
・世の中はオールドタイプからニュータイプの過渡期である。デジタルネイティブと呼ばれる子どもたちは恐らくニュータイプの重要性について感覚的に理解しており、大人たちの認識を改めることのほうが課題。
・困難に向かって取り組む力など、学歴では分からないような力を地域や学校が親と一緒になって取り組む必要がある。
・これまで必要とされていた「知識を蓄える、正解を見つける、ルールに従う」などの能力ではなく、「アイデアを生み出す、問題を見つける、個性を尊重する」といった能力が必要になる。

【人が主役の社会】
・これ以上の成長や進歩は必要ない。これ以上進化すると人間が劣化する。開かれたという言葉も否定的に感じる。人が主役の社会をつくりたいからこそ、人がどう生きる力をつけるかが重要。
・幸福感や心の豊かさにつながることが大切。人を最大限に活かす。つまり、苦手を社会で補って得意を活かせる世界になればいい。
・「いい大学へ行って大きな会社に入って、出世することが幸せ」という、価値観は正しいのか。学校だけでなく、社会の価値観そのものを思い切って変えないといけない。
・不登校だった大学生が、淡路島で農業をやって自分を取り戻して行く。地域に育てられながら元気になって行く。その姿を見ていると、社会そのものが間違っていると感じる。

【多様な人が集まる地】
・海外の学校で学んだり、留学生を呼んだり、もっと気軽にできるようになればいい。
・アーティストインレジデンスの話があったので、市と一緒に講演会を開いたりしたが、みなが同じ方向を見ることができない。
・現在の過渡期を乗り越える方法を、具体的に検討していく必要がある。先進事例を兵庫県から生み出すことで、時代を生き抜く若者が集まる地域となる。

33開かれた学校

【個性に応じた教育を】
・個々の子供に合わせた学びに変わることで、教育のあり様が激変する。子供たちの成長をどう考えていくかが課題。
・今の学校は、教科の点数で評価する部分が大きく、自分のやりたい事で人に喜んでもらったり、達成感を感じたりすることが少ない。
・自分で何かをやってみようという機会を学校が与えていくことが重要だと思う。知識を与えるという意識を下げて、結果的に知識もついてくるという感覚。

【質の高い教育を等しく受けることができる環境】
・経済的な格差の問題が当然大きいが、県という単位で見た時には、都市と田舎の機会の格差、特に子供が出会う教育環境や子供の体験の格差に目を向ける必要がある。地域によって子供の体験の質、量が異なる。これを単に平準化するということではなく、子供が成長する中で体験すべきことのミニマムは何なのか、それをどう確保するか、ということも考える必要がある。
・田舎でも子どもたちに良い教育を受けさせられる状況が必要。Webで講師を呼ぶなど教育の充実が地域の課題。

【学習時間の確保】
・高校で体験的な学びの機会の確保が非常に重要。高校に地域コーディネーターのような職種の人がいると、直接体験の価値がものすごく高まっていく。
・帯学習や夏休みの日数を減らし学習時間を確保している。単純に授業数を増やすと学力が上がるというデータがある。

【流動性が学力の向上につながる】
・駅前再開発のあった区域の学校の学力が上がっている。新住民の増加の効果。旧来の地域の学力が上がっていない。学力の向上が評価を高め、新住民を呼び込み、新住民の流入が更なる学力向上につながるという好循環を期待している。

【経済格差が学力格差につながらないように】
・経済的に厳しい家庭や生活保護の受給率が高い地域は学力の水準が低い。長い目で学力を上げていくためには生活水準の向上に取り組まなければならない。
・経済的に厳しい家庭に生まれた子供が次に子供を産むときに、そうではない状態に持っていけるかどうか。次の世代まで見据えた教育施策が必要。
・食事を取れていない子供が学校に来ても勉強に手がつかない。学力の問題への取組として、生活環境を整えるところから進めないといけない。
・親の所得によって教育に差が生まれることはあってはならない。同じ子供でありながら、行かせられる学校や保育所が違ってくることに心を痛めている。子供を育てていくことを家族だけに任せてはいけない。

【学びの選択肢を増やす】

・不登校生徒が安心できる通所型（フリースクール）の施設を増やしたい。
・不登校施策は、学校に戻すというより、学校以外の学びの場を整備していく。どこにも行けていない子を減らしたい。
・認定制度を作った理由は、利用者から見えにくい状況を改善するということ、行くのなら少しでも良質な学びの場に行ってほしいから。また、学校側の、出席認定の手間を軽減するため制度化が必要だった。
・フリースクールは家庭が全部費用負担しないといけないので、経済負担を軽減する施策も考えないといけない。経済的に厳しい家庭の不登校の子供はどこにも行き場がないという状況は作りたくない。
・障害等によりフリースクールしか選択肢がない場合、高校進学の断念や大学に入る資格を取れなかったりする。
・日本の教育は、変わった子たちを変わった子達だけで集める。イギリスは、そうではなくて開放して、この子達こそ同じような環境で教育を受けて、資格を取れるなど次のステップに進めるというオプションが提供されている。選択肢があることがエンパワメントされていた。いろんな人が教育の分野でも選択できることが地方でも都心でも必要と感じた。
・枠にはめようとしている今の教育の限界に対し、不登校は子どもたちが一生懸命声を挙げてくれているのではないか。
・子供に好きな色、好きな大きさの画用紙を選べるようにすることで、子供の意識が変わる。
・画一的な学びではなく、いろんな場所で、いろんな人に出会い、いろんなことを知る機会があることが重要。

【先生の役割を見直す】

・教育現場は社会情勢の変化に鈍い。何か新しいことをしようとしても、ついていけない子がいるという変な平等主義がある。
・教育の現場では教員2人体制だが、授業を担当する先生と、生徒指導する先生のように役割分担するべき。
・先生の負担が大きすぎる。全てが中途半端になってしまう。
・全県一律にクオリティの高い教育が提供できれば、場所に縛られることなく住めるようになる。
・授業する先生は1教科につき兵庫県で1人の先生にすべき。子どもや親が先生を選べる時代になればいい。
・3月に休校期間がスタートしてすぐにオンライン授業をしてみたが、周りの教員がついてこられず、教育を変えることの大変さを改めて実感した。今は生徒達もパソコンを持っており、ネット環境も家に揃っている。急務なのは先生達のアップデート。

【学校のシステムは変わるべき】

・六・三・三制の意味を感じない。今の子どもの成熟に見合った柔軟な制度に改めるべき。
・学校ではいまだに詰め込み型の、昔の焼き直しのような教育をやっていて、断片化された教育になってしまっている。
・子どもの数が減っている。子どもの学びだけでなく、学校を持続可能なものにする視点も大切。
・優秀な子は飛び級で大学などに行けるような教育環境が必要ではないか。
・子ども時代は、みんな同じでないといけない、という学校教育に息苦しさを感じていた。
・知識の伝達はオンラインで十分となり、学校でしかできない経験、集団でしかできない体験をするのが学校の役割となる。
・子育て・教育の所管省庁を一元化すべきだ。

【原体験の大切さ】

・コロナで子供の遊びや外出が抑制されたことの影響は大きく、外出抑制が続けば、地域にマイナスの影響として出てくる。原体験を培うには、外に出て遊ぶ、土に触れる等が大事。
・妻が森のようちえんをやっている。認可外保育だが、教育の仕方もこれからいろんな形が増えてくるのではないか。森のようちえんで育った子どもの変化を見たとき、一般的な保育所とは違う個性も伸びてきている。

【自然とのふれあい体験】

・専門家が入ることによって、子ども達は自然との触れ合いが大事な体験であることに気づく。専門家の一言があるだけで今までやっていたことの意味が見えてくる。
・淡路で大阪と同じ教育をする必要はない。都会のマンション暮らしではできない体験、例えば、農業や漁業が体験できることが強みになるはず。
・坊勢島は漁業しかなく危機感が大きい。小学生を対象に学習体験の観光漁船を始めた。産業

を観光として見せるのは教育としても大切。地域の人々も徐々に前向きになってきている。

・自然に触れ、五感を刺激するような環境で子供を育てることが大切。但馬では自然の音とか匂いとかをすごく感じられる環境がある。そのような環境で育った子どもは、但馬に戻ってこなくても自分に自信を持って新しい地域で育ってくれる。

・コロナ禍で自然学校の日数が大幅に減らされ、日数が少なくてもいい、という声が出てきている。コロナ禍で減らしたのは仕方ないが、元の4泊5日に戻さないといけない。本当はもっと長くてもよい。それより短くては意味がない。長期のキャンプから子供が学ぶことの大きさを感じている。集団生活の日数が長ければ長いほど素を出さざるを得なくなる。素を出したときの葛藤、友達との軋轢をどう乗り越えていくかというところが自然学校の一番の価値。

【職業体験の重要性】

・トライやる・ウィークは素晴らしい取組だが、受け手側のクオリティが担保されていないことが課題。インターンシップの受け入れで成果を上げているNPOに話を聞くと、送り出し側の学校で学生の指導をすることも大事だが、それ以上に、受け入れ側の対応が大事だということがわかる。受け入れた学生とどう接するか、それ次第で学生の学びがすごく変わる。直接体験の質を担保するために、受け手側のクオリティをどう高めるかをもっと考える必要がある。

・トライやる・ウィークを就業体験の機会ではなく、たとえばビジネスを体験し、自分で事業を行う機会にするのはどうか。

・イベント出店した際に、小学4年生の娘に空間を使わせて、手作りしたチョコクランチを200円で売らせてみたら、すごく楽しかったようだ。屋台を置いて子供が物販できるような体験を子供の時からできたらいい。

・トライヤル・ウィークやインターンシップを受け入れ、子どもたちや若い人に接しているが、子どもたちが地域社会の中から、好奇心を伸ばしていくような取組が広がればいい。

・学生が、「何となく一般的な価値観で就職先を決めている」ことも問題。小さい時から、色んな選択肢を知る機会を与えるのは、学校や社会の役割ではないか。

・関学では、学生が社会人と接点を持ち、自分でプロジェクトを立ち上げる面白い取組が始まっている。スノーピークとの包括連携協定では、内発的な自由な発想でイノベーションを起こすことができる学生の育成を目指し、環境資源問題に取り組むためのオリジナルマイボトルの開発プロジェクト等がスタートしている。また、理系学生のビジネスマインド醸成を目的とする新しいカフェ「BIZCAFE」を開設した。社会人や企業と交流できる窓口となっており、企業から見ても、優秀な学生の採用につながるメリットがある。

・小学校～高校の間に、起業やボランティア、プログラミングなど、自分でプロジェクトを起こす、そういう機会を多く与えることが大切。

【正解は一つじゃない】

・答えは一つでない、いろんな考え方があっていい、ということは学校教育で教えられること。変えていってほしい。

・ICT教育なども、正解を目指すやり方をしている。ケガをしない方法を教えるべきで、あとは自由に使わせたらよい。そういう感覚がないと、新たな発見や創造、自分で調べるという子供が育たない。

・自分なりの何かを作っていくような子供を育てる教育を意識してほしい。

【地域で子供を育てる】

・総合的な学習の時間を活用して、地域の人を巻き込んだ活動がされている。小中は地元の学校という感覚が強いので、地域の人との連携も取りやすく、PTAなどの活動とも結びつきやすい。

・佐用では小学校と地域の連携は年々深まっている。住民が巻き込まれるような関係になってきている。ゼロから急に関係を作ろうとしても大変で、時間をかけて積み上げていくことが大事。

・子どもの学びに、地域の大人、特に50代、60代、70代ぐらいの人が関わって支えていく関係を作ることが大事だと思う。子どもが地域を知ることにつながるだけでなく、大人にとっても地域を見直すきっけかになる。

・地域での学びの話は、学校の先生が頑張れという話になりがちだが、それでは続かない。学校側ではなく地域の側にNPOや朝来の自治協議会のようなパートナーがいて、基本は地域の側が主体で、先生はそこと組むという形がいい。

・地域資源に着目したリソースの再活用など、もっとおもしろい関わり方があるはず。育っている若

者達が外に出ても、「兵庫県めっちゃおもしろかった」「自分たちの地域めっちゃおもしろかった」と振り返れたら、帰ってきたくなるし、地域貢献もしたくなる。

・「ひょうごエコロコプロジェクト」は、「子どもを真ん中に」、行政（兵庫県）と博物館(兵庫県立人と自然の博物館)と現場（保育所・幼稚園・認定こども園）が一体となって、乳幼児期の自然とのかかわり、子どもたちの環境体験の豊かさを育んでいくプロジェクト。多様な人を巻きこみながら、子どもの育ちの環境をつくり、共感がプロジェクトの熱となっていく点から余白の大切さを感じている。また、ワクワク感、ちょっとやってみたいと思えるような雰囲気づくりも必要。

・進学等で外に出てしまう前に、地域での経験をどれだけ積むかが大切。

・進学してしまう前に、地域のことを学ぶために、高校生を集め自主ゼミが行われている。子どもは地域の可能性。

・道徳、体育、美術、技術・家庭、総合学習などは地域と協力しながらできる。学校側から、それぞれの教科で目指す目標について、地域ができることを提示してもらうことでマッチングが可能ではないか。

・学びを、地域全体で提供する。祭りに「連中」「親分子分」「宮座」などという仕組みがあり、古くから地域を支えてきた人材育成のスキームには、学ぶところがある。

・地域の人が、朝は「おはよう」、学校から帰ってくると「おかえり」と声を掛けてくれる。都会よりも人のつながりが深いのではないか。

【地域と学校をつなぐ人材が必要】

・学校と地域の橋渡しを担うハブ役となる人材がこれからの時代には必要ではないか。

・学校に職種として地域コーディネーターを配置してはどうか。

・今までの焼き直しの教育から、地域の課題を解決するプロジェクトベースラーニングにシフトしようとしているが、地域の要望、地域団体の活動と大学を接続するコーディネーターの役割が重要。課題を解決するイノベーションは、地域で活動する人の力と学生の新たな発想をミックスしていく方向性を持つことが大切。

・IT化により、学校の学習時間に余白ができるからこそ、先生が大事になる。経験を積んだ社会人として、社会の教育資源を子供たちに繋いでいく役割を先生に果たして欲しい。

【教員の職場環境の改善】

・学校の教員には、本当に大変なのに、助けてと言わず、自分で頑張ってしまう人が多い。助けを求めさえすれば、地域に助けてくれる仲間がいることが見えてくる。先生方が声を上げやすい環境づくりが必要。

・教員の疲弊が問題になっている。日本の教員の働き方は世界でもワースト一位と言われ、部活などで土日も出て行かないといけない過酷な状況なっている。市民が関わっていかないといけない。

・忙しい状態にあるにも関わらず、STEAM教育、GIGAスクール構想など上から降ってくる新しい課題に対応しなければならない。それらの半分を地域が担うことで、先生方が新しい教育や、子供のことを考えることに時間を割けるようにする必要がある。

・環境教育、自転車の安全教育、消費者教育など様々なことを学校でやれという話が次々と来るが、それは学校でやることかという視点を持つ必要もある。学校以外の場で、学びができる環境を作っていくことの方が重要。全員に教えないといけないと思うから無理が生じる。

【経験が子どもを強くする】

・壁にぶち当たったときにそれを乗り越えるには、地域での学び、地域での経験が必要ではないか。

・直接体験の重要性が高まることは間違いない。知識の伝達はオンラインで十分となり、学校でしかできない経験、集団でしかできない体験をするのが学校の役割となる。

・様々な人との関わり合いがあってこそ社会性をを育むことができる。人とコミュニケーションを取らないオンライン授業だけで社会に出て行ってしまうことに問題を感じている。

【海外の教育から学ぶ】

・海外の同じ年代の子どもたちが、何を考えてどんな暮らしを送っているかを知ることも大切。

・理想の教育環境と言われるフィンランドでは、教師の労働時間が平均6時間とされており、日本の教師の労働時間の平均11時間に比べると大きな差がある。近年の国際学力調査（PISA）では、フィンランドも順位の低下こそあれど、労働時間が少ない中で質の良い教育環境が生まれてい

ることについては、その仕組みについて見習うべきことが多い。
・教育の未来においては、教師の社会的地位を高め、人員を増やすことで教員一人あたりの仕事量を減らしながら、時間と心の余白を増やし、その時代に必要な取り組みを創り出すことが重要。
・ニュージーランドの学校では、ラーニングストーリーという形で子供の成長記録を作っている。アプリを使い先生と親が情報を共有しやすくしている。

【子供と地域社会の接点を増やす】
・子供たちと社会の接点が少なすぎる。学校のクラスと部活が、子供の世界の全てになっている。
・自分は、大学生になって、地域で活動したいという思いがあり、三田市の事業に応募して、はじめて社会やユニークな人たちとの接点を持つことができた。これも自分から求めていったからで、ほとんどの学生は何もせずに就活を迎える。就活の時点で、社会との接点を持とうとしても遅い。
・子どもたちが塾や勉強に忙しくして、外で遊ぶ子が少なくなっているのもさみしい。子どもに歴史や自然など、いろんな体験をさせられるように地域が取り組んでいければよい。

【フリースクールの可能性】
・フリースクールを3つぐらい掛け持ちしている。デンマークの教育スタイルであるフォルケスコーレを親と一緒に見学に行ったときに、小学校に行くのをやめると子供が言いだした。小学校に属してはいるが、フリースクールの掛け持ちをして通わせている。
・一つの学校に縛られないということもありではないか。学校を選べる柔軟な選択肢を用意できればいい。
・30年後、我々が受けた教育とはまったく違った教育に変えていかなければならない。でないと、時代の流れと乖離していってしまう。
・将来のことを思ったら勉強しないといけないと親が言うのは古い考えではないか。AIなどの技術の進歩についていけなくなってしまう。劇的に社会が変わるゆえに、大人世代がちゃんとしていかないといけない。
・フリースクールもオンライン化が進めば、海外の子供たちと一緒に学ぶことも可能になる。オンラインで世界の子どもたちと会話して違う人種の人がいることを知るだけで、可能性が変わってくる。
・子供たちが一定期間、都市や地方に移住・転校するというデュアルスクールの制度は、大きく価値観を変えるインパクトがあって面白い。
・西脇市に廃校になりかけた、遠方からでも通える双葉小学校という小学校があり、校区外からも入学が可能になっており、特徴的な教育を実践している。発展形の教育施設ではないか。

【特別支援学校は変わらないといけない】
・今の特別支援教育ではチャレンジをする教育をしていない。こういう場所こそ、大きく変わらないといけないし、最先端のことを教えるべき。

【異なる文化の共有が子供の成長につながる】
・他の地域で友達を作ることによって、地元の良さも分かるし刺激も大きい。異なる文化を共有し合えることで、ぶつかって喧嘩もするが、心の中に何かが残っている。大人になって社会に出るといろんな人と出会うので、小さい頃からいろんな人を見ていたら、強くなったり自信が持てるようになったりする。
・価値観や文化の違いを子供時代に味わって、試行錯誤できることは新しい可能性を広げてくれる。都市が、人が多いから色んな価値観に触れているかと言うと、決してそうではないと思う。
・学校の範囲の狭い社会だけでなく、都市や田舎など色んな場所があって、色んな生き方や働き方があることを体感できれば、もっと生きやすい社会になるのではないか。

【生きていく上で必要なお金の知識】
・金融資産をどのように保有するかは個人の自由であるが、小さいうちから金融教育を行うことで金融・経済の知識を養い、投資や運用についてのリスクやリターンについて学ぶことは、生きていく上でも起業する上でも有益。小中学生や高校生に対し、金融教育を推進すべき。
・「未来の商人＝個人事業主」を育成するイメージで、学校教育の中にお金の教育を埋め込んでいくべきではないか。

【多様な人が経験を語る】
・年を取ると新しい人や子供たちと関わる機会が極端に少なくなる。地域住民などの一般の人が先生となり自身の体験を語ることができる機会を設けてはどうか。日常では関わることのない新しい交流を設けることで大人も子供も成長できる。
・日常的に教室に地域の大人がいる感じにしたい。

・完全オンラインになった授業で社会人メンターにリモート参加してもらって、それぞれの専門分野から学生を指導してもらった。その結果、「主体的行動力」「リーダーシップ能力」「人間関係構築力」「地域問題理解力」「コミュニケーション力」「プレゼンテーション力」などの向上が見られた。
・「やれる学校とやれない学校ができる」などということを懸念するのではなく、あえて格差を見える化して保護者に選択肢を提供することで、学校も子供たちも地域も向上させていくべき。

【夢を持つきっかけ作り】

・子供たちがやりたいこと、好きなことを早い段階で見つけられるよう職業体験ができる環境を作る。多くのことを体験し改善点を子供たち自ら考察し行動することで、将来なりたいイメージを持つことができる。
・中小の製造業や建設業には人材が集まらない時代になっている。小学校の社会科で地域産業に触れる機会が大事ではないか。小さい時から見聞きする経験が、子ども達の夢や地域への愛着を育む。
・子どもに夢を与えたいとの思いで、一人一人が主役になれる体験をさせてあげたいと思っている。感性を養うことが自由な発想につながる。たくさんの自然を教育の中に取り入れることが大切。

【働くことを学ぶ】

・最近の子供の夢でYouTuberが増えている。それでいいのか。若い時にものづくりのすごさを感じることや、働くということの価値を教えていくことが必要。
・漁業見学船で、魚離れの進む小学生向けに漁業の現状・魅力を発信することで、将来の漁業従事者が出てくることを期待している。

34未知の領域への挑戦

【兵庫県の資源を見直す】

・理化学研究所の研究者は播磨にゆかりがない人ばかりなので、兵庫県の企業が知られていない。地域のリソースをもう一回見直し、連携の仕方を考える必要がある。
・宇宙開発に関連する企業が多いことも兵庫の強み。

【テクノロジーの在り方を考える】

・進歩した技術は、何のために、誰のために使うのか。できる人が贅沢な暮らしをするためでなく、生活弱者が暮らしやすく、働きやすくなる方向でテクノロジーが使われるようになることを願う。
・テクノロジーの進化で良い未来が来ることをイメージしたいが、どうなるだろうという不安が付いてまわる。

【夢が広がる技術革新】

・宇宙開発、海洋開発は、人類の夢が膨らむ。いずれ人類は地球から脱出して月や火星へ移住すると言われ続けてきたが、いよいよ現実味を帯びてきた気がする。
・兵庫の企業の活躍により、月を足がかりにして火星の開発を進め、さらにハビタブルゾーン（生命居住可能領域）を目指す。
・情報通信の次は宇宙か。地球とそれ以外の星との間の何かとか、地球でできなかったことをどこかの星でやっているとか、そんな状況になっているのではないか。30年後は、SF的な世界になっていると思う。
・人体の分野では、医療産業都市が生きるはず。新しい社会システムへの移行もある。持続可能な社会に向けた社会構造変化はどういう段階をたどるのか、興味がある。

【新たな技術が様々な問題を解決】

・いかに少ない資源エネルギーで、食糧を生産・加工し、資源を循環させるかという宇宙開発に伴う高度な技術が、食糧問題の解決にもつながる。
・宇宙技術で、完全自動で多様な植物を生産するという植物工場も出来る。農業従事者不足の問題の解決につながっていく。
・海洋開発も、メタンハイドレートなどの資源開発だけでなく、洋上風力発電などの海洋再生可能エネルギー開発にも期待が寄せられる。

35地域のエネルギー自立

【脱炭素への新しい動き】

・竹での発電に注目している。新しい再生可能エネルギーが出てきてくれるといい。

・車の排気ガスから出るCO_2をメタンガスに変えて燃料として使うメタネーションが始まる。

・エネルギーの関係をもっと記載すべき。例えば、ため池の太陽光などもあるが、河川での水力発電の取組など、自然エネルギーの活用はもっとできるのではないか。

【エネルギーの地産地消をめざせ】

・電気・ガス・石油を買うことで地域からお金が出ていく。生活を支える基盤は捨てられないので、エネルギーの自立により、お金が地域内で循環する形を作っていくことが重要。

・木材チップや廃棄物などのバイオマス、太陽光、風力などを活用して、地域のエネルギー循環をめざす、マイクログリッドの構想に期待している。

・地域が自前でエネルギーや食料を調達できるようにならないといけない。

・エネルギーを自治していくことは重要。すべてが自治の流れになっていく。地域でエネルギーを自給するのは自治体の役割となるのではないか。

【水素が地域経済を活性化する】

・福島県浪江町では、世界最大級の水素製造装置を備える「福島水素エネルギー研究フィールド」が稼働している。太陽光で発電した電力で水道水を分解している。これからはCO_2フリー水素が電力源の主流になるのではないか。

・産業面で稼ぐ力の弱い田舎の地域こそ、再生可能エネルギーを活用した水素の自給に大きな役割を果たせる。緑でCO_2を吸収することも大切だが、積極的に水素の供給源を担っていくことが重要。

【太陽光発電に一定の規制を設けるべき】

・太陽光事業に危機意識をもっている。太陽光事業がダメだとはいわないが、無秩序にされると農業にも悪影響が出てくる。事前に太陽光ができる土地と農業をする土地との区分をつけておくべき。

【山林資源をもっと活用する】

・地域の活性化はもちろんのこと、今後の地域環境、ひいては地球環境のためにもCLTの活用が重要。兵庫県には未利用の森林が多くある。それらを利用することで地域内での価値の循環、地球環境の循環を実現できる。

・バイオマス発電に本気で取り組めないか。建材とチップと山をデータ化して稼げることを示し、山に入る人を増やしていかないといけない。

【エネルギーは異分野と掛け合わせる】

・エネルギーは単体ではなく、掛け合わせで考えていくことが大事。「エネルギー×農業」「エネルギー×福祉」「エネルギー×交通」など異分野の掛け合わせを中心に据えたビジョンが必要。

36カーボンニュートラルな暮らし

【若者のローカル志向・ミニマリスト志向はサステナブルな社会の形成にも通じる】

・若者のローカル志向は経済的動向の影響が大きい。若者自身がより少ない収入でも幸せな生活を送るためにはどうするかと考えて行動した結果、ローカル志向になってきているということではないか。デフレ下で育ってきたので物価は上がらないと思っているし、給料も上がらないので、モノを買うよりは貯蓄しておいた方が得策だと思っている。経済的には最悪のパターンだが、価値観としてはありだし、よりサステナブルな社会につながる考え方でもある。

・カーシェアリングが広がってきた。車を持たない人が増えるのは間違いない。

【環境問題が様々な課題に直結する】

・カーボンニュートラルは、何としても達成しないといけない。これを達成しないと、他の課題も達成できない。

・兵庫県内の気温の上昇について、100年後には4.3℃上昇するという記載に衝撃を受けた。私自身が奄美でも仕事をしているので、そうなれば、沖縄、奄美は更に日中は出歩けず、車でしか移動しない地域になる。暑さで暮らし方が変わる。採れる野菜も変わってくるだろう。

【一人ひとりができることをする】

・環境問題でも、ペットボトルが出来たのが40年前。

それが今の深刻なゴミ問題に繋がっている。40年間放置したのかと、子どもたちに責められても何も言えないほど、重大な問題になっている。
・生ゴミの自家再生など行政だけでなく個人の力で解決していくことが今後ますます重要になる。

【技術革新が環境問題を解決する】

・水素エネルギーの活用など新しいエネルギー供給の研究のためなら大量に二酸化炭素を出していいというわけではない。これらの研究が早く成功して一日でも早く実用化してほしい。
・産業界は「脱炭素」へ向けて大きく舵をきった。水素発電に関しては、県内企業が中心となってオーストラリアの褐炭から水素を取り出す技術を活用した事業を展開している。実現に期待したい。
・カーボンフリーは実現すべき目標ではあるが、今の技術レベルでは実現できない。社会全体で仕組みができないと実現できない。技術ができれば世の中が大きく変わり、「C」を出さずに暮らすことができる。2050年のあるべき姿と2030年に実現できる姿を区分けして議論していかないといけない。

37危機に強い地域

【つながりが防災力を高める】

・災害の経験に言及するのはよいが、阪神・淡路だけの話ではないこと留意すべき。これからは他の被災地と連帯して問題に取り組む姿勢が大切。
・ひょうご防災リーダー養成講座に参加して防災士の資格をとった。持続的に活動をやっていくため、たつの防災士の会を設立した。資格を得たが活動の場がない、さらにスキルアップを図る場がないという声に応えていきたい。また、各地域の団体と連携をとりながらスキルアップしていきたい。
・災害は人を強くする。人と人とのつながりが地域の団結力を強める。この辺をしっかりと見つめながら進めていけたらと思う。
・阪神・淡路大震災に加え、未来では、南海トラフ地震を経験し、世界一災害に強い島になっていたらよい。消防団をはじめとする自治防災組織が継承され、移住者や生活弱者との情報ネットワークも確立していてほしい。
・アナログな地域の人との繋がりも大切。災害が発生した時、周りの状況の確認や連携、どこに障害のある人やご老人がいるのかを把握するのが簡単になる。

【ハード面の防災対策が遅れている】

・地震の発生確率と比較すると、ハード面での対策は明らかに遅延している。
・消防車や装備の性能は向上しているが、更新に費用がかかることが課題。

【ソフト面の防災対策が重要になる】

・試案の中には、ハード対策が書かれているが、ソフト面での避難や安否確認のあり方など、人に対してどうなのかという部分が書かれていないと感じた。
・南海トラフで津波が発生したとき1番の被害を受けるのは沿岸部に住む住民。津波が発生したとき、六甲アイランドやポートアイランドの人工島に住む人は安全なのか。そして避難はうまいことできるのか疑問。
・南海トラフ地震が発生した際に予想される死者数の内のほとんどが津波によるものだという事に衝撃を受けた。こうした予想をもっと広めるべき。
・ソフト面での対策の活動に参加している住民の多くは高齢者であり、地域防災の主力となりうる若年層の参加が少ない。参加率を上げるために、企業等を通じて地域防災活動への参加を促す仕組みが今後必要である。
・データの活用は南海トラフ地震などの自然災害の対策にも役立つのではないか。過去のデータなどを有効活用すると、地震の予測やハザードマップの作成がより確かなものになる。
・兵庫が世界の防災拠点になっているというところはすごく共感するところ。防災減災が特別なことでなくて日常の当たり前の事になって欲しい。
・二地域居住をどんな人に対して、どのようにアプローチしていくかについては、特に子ども、子育て中の家庭をメインターゲットに考えている。災害時には、子どもが最も影響を受けると考えており、関連死などもあるが、そういった弱者に対する支援がしたい。

【技術革新による防災・減災】

・豪雨や地震などによる被害をより軽減させるために、情報テクノロジーを活用すべき。豪雨の予想や災害での被害の迅速な把握が可能になれば良い。空を観測するためのカメラを設置し、情報を集め、具体的な予報や被害状況を住民に発信、共有することで、より一層被害が少なくなり、減災に繋がっていく。
・インターネット環境を整えることが大切。インターネットの活用により、南海トラフ発生時の情報共有、情報提供、配給のスムーズ化などが期待できる。
・台風予測のように、テクノロジーの進化によって、災害予測の高度化が期待できる。例えば、データ化された過去の災害記録と、進化した検知技術をうまく融合していけば、もっと有効な災害予測ができる様になるのではないか。

38安全を支える強靭な基盤

【未来を見据えたインフラの維持管理が必要】
・新しいインフラの整備よりは、今あるインフラを安全に維持していくことが大事。
・既存のインフラが老朽化するのは目に見えている。どこかで取捨選択する必要がある。
・将来的に生活インフラである上下水道の老朽化が進み、補修が必要になってくる。 人口減が激しい中山間部では、一軒の家をどこまでフォローするかが問題になるだろう。受益者負担の問題が出てくるので、どう運営していけば良いのか先が見えない。
・農業に携わる方が減っていて、水路などのインフラの維持が難しくなっている。人口減少や高齢化のなか、地域の力を維持する必要がある。
・IoTの導入により、昼も夜も時間と場所を選ばず誰でも農業ができるようになることは非常に重要。水門をIoTで管理すれば、台風の時に水面を見に行った高齢者が流される事故などもなくなる。
・但馬空港を但馬の拠点にすべき。防災対策の拠点にもなるし、人が集まる拠点、地域のつながりの拠点になればよい。

【安全安心で世界をリードする存在になる】
・スーパーコンピューターの「富岳」をはじめとした最先端技術が兵庫県には数多くある。医療技術の発展やあらゆる危機予測に活用して、より安心安全で快適なまちづくりを目指し、兵庫が日本だけでなく世界をリードできる場所になればと思う。

【暮らしを守る交通インフラのあり方を考える】
・健康を守るうえで交通インフラの問題は考えていかなくてはいけない。障害を持たれている方、高齢で運転が困難な方にとっては、現在の但馬の交通インフラでは健康を守り切れない。私達自身の生活と健康を守るためにも、その地域に合った交通の便としてどういうものが必要なのか考えていかなければいけない。

39受け継がれる地域

【地域での役割、出会いが地域への愛着を育む】
・郷土学習とか地域教育の充実と記されている。それで地域愛が育まれると考えてはいけない。地域の中で今生きている大人と出会うこと、地域の中で役割を担った思い出を作ることが大事で、そういう機会づくりを考えるべき。そういう場として祭りは非常に良くて、老若男女が一緒になって祭りを作っていく経験をした子供は地域愛が強い。知識として学ぶのではなく、何かに参画して役割を果たしたという体験が大事だ。
・コロナにより2年連続で祭りがなくなった。こういうことが続くと子供たちはどこで原体験を培うのだろうと心配になる。育った環境の中で刷り込まれる原体験があるからこそ、ふるさとを思うとか、いつか帰ろうと思う。地域に入ろうとする若手はそういう原体験を持っている人が多い。だが、原体験がなく、バーチャルなつながりだけで育っていくと、住む場所はどこでもよくなってしまう。
・愛着には2大要素がある。一つは、そこの場所に行けること。二つは、そこの場所で思い出をつくること。神戸市のキーナの森は、生物多様性の拠点にしようとつくったが、手をかけないと維持できない。管理するのではなく、子ども達が関わって思い出をつくる仕組みを作っている。

・地域の魅力を知った人にアプローチする方が早いという考えからいくと、兵庫を出る前に兵庫の魅力を知る機会をどんどん作ることが重要なのではないか。
・子供たちが地域に対する責任やコミュニティが大切だと思うかどうかは結果であって、目的にするのはおかしい。地域で愛されて育った子が地域に感謝の気持ちを持つ、愛着を持つことは良いことだが、手法として教育に期待しない方がよい。

【体験が地域とのつながりをつくる】
・関係人口は、人口の帳尻を合わせるために急に言われだした話で、評判が悪い。
・人は、単に景色がきれいだとか、祭りに勢いがあっていいな、ということではなく、そこでつながっていた人の思い出も含めた風景や祭りを、五感、身体全体で記憶している。こうしたものが地域とのつながりを生み出すのではないか。
・但馬地域では、高校生が地元の食材を使った商品を提供したり、地域マップを作るなどの取組が盛んに行なわれている。そのことに触発されて自治協議会も活動に加わっている。先生たちも地域と交わる時間がない中で、こうした授業を通して地域との交流が増えている。

【主体的な若者を寛容に受け入れていく】
・若者は、ネットで調べて好きに自分の世界を広げ、様々な人と色々な場所で関わっていくということに慣れている。地域での若者の受け入れ体制も少し寛容になってきているのかなと最近は感じている。

【未来の地域への責任は若者にとっては負担】
・若い人も次代への責任を考えながら生きていかないといけないのか。若い時にみんなそんなこと考えて生きていたのか。個人主義の人が増えていく。今生きている社会を自分の子どもの世代へバトンタッチすることは考えても、未来の地域社会への責任まで背負って若者が今を生きることはないと思う。みんな今を生きるのに精一杯のはず。
・次世代にツケを回さないという言い方が流行ったが、賛同したのは年寄りだけ。次代への責任を果たすのは、まず年寄りが頑張ったらよいことだ。若い人に向けたメッセージとしては変だ。

【自分の軸を持てば排他的にはならない】
・伝承が途切れると島が島でなくなる。排他的な考えの人が多いのは、自分軸が弱いからだ。譲らない自分自身の軸があれば他人のことはそんなに気にならないはず。伊弉諾神宮の神楽の伝承を通じて「和合」の精神を培う心づくりをしていきたい。

【住民が力を合わせて地域存続に取り組む】
・子どもたちだけでなく、大人に対してもふるさと教育を徹底することが、地域の存続にとって必要。
・人が減っていっているので、村の役は高齢の私もしないといけない。成人したら消防団に入らないといけないが、今は70歳の人も入らないと人がいない。
・人口が半分になったら使う家が半分になり、空き家が増える。そのとき景観がどうなるか。屋根が落ち、壁が崩れという家が増えるだろう。今でも廃村はあるが、これから先もっと増える。田舎の将来は一体どうなるのか。

【夢を持てれば後継者は育つ】
・後継者が少なくなっている理由も、価値観の違い。経済的な部分が大きいが、夢が持てない。お金の面なのか、発表する場がないなど物理的なものなのかわからない。
・丹波焼は一人の名前が出せる。播州織などは、業者が間に2、3軒入っていて、自分の名前は出て行かない。名前が出ない職業で子供に夢を与えられるのかと思う。腕一本で自分さえしっかり頑張って目標を立てれば生活も成り立つ。
・そもそも作り手の苦労を全くわかっていない。
・仕事をしている姿を子どもが見ることにより、それが教育にもつながっている。

【祭りがまちづくりの中心】
・祭りを軸にまちづくりを考えるべき。祭りはどこのまちにもあって楽しい。
・全国からもたくさんの人に来てもらえる祭りをつくっていきたい。淡路の人も、島外の人も集まって交流が生まれる。また淡路の良さもみんなに知ってもらえる。
・祭りで外の地域から人を入れるのは違う。その地域の人が地元に帰って神輿を担ぐ仕組みであるべき。

【地域で受け継いできた文化を残す】
・兵庫には歴史がある。例えば樹木信仰。日本全国にいろんなものがあるが、兵庫でも、滅びかけているがまだ残っているものもある。未来に目を

向けるだけでなく、つないできた歴史の中に、地域の愛着づくりに活かしていけることがたくさんあるのではないか。

・伝統がなくなってしまっていることも問題。例えば、加東市の鬼踊りは、高校生が鬼の中に入っているが、大学などで進学すると都市部に出て行って担い手が問題になる。西脇市でも暴れ太鼓というものがあって、こちらも担い手が高校生で将来が心配である。

【地域住民と協力し文化を存続】

・地域を守り、継承していくのは大変な作業だが、自身を見つめ直すきっかけにもなる。多様な人がたくさん意見を述べて互いに刺激し合っていくことでよいものが作り出されるのではないか。

・地域のアイデンティティを共有する、文化を知って、ローカルプライドを持つなど、伝統を残す部分と変えて行く部分を見極め、伝統と進化の循環をおこすことが必要。

・文化や伝統の継承は、大事なテーマであり、子供たちへの教育が重要な役割を果たす。しかし、今の子どもたちは勉強で忙しすぎる。

・地域や村という小さい単位の祭りはなくなっていく。若い人は仕事に忙しくて帰ってこられないのが現状。

・神戸は、古くから守られてきたものの価値が見過ごされがち。例えば、生田神社。参道から繁華街に繋がっていることについて私たちにとっては、日常であるが、全国では珍しい神社。新しいものを開発していくことも良いが、今ある資源を生かしていくことも大切。

・城崎は秋祭りの盛り上がりがすごい。観光客を呼ぶ祭りではなく、地域内の人が結束するお祭り。若い人にとっての魅力にもなる。

・竹野でもお祭りをやっているが、誰をターゲットにしているか分からなくて盛り上がりがない。補助金を貰っているから続けています、という負担感が大きい。

・自分の住む地域にも加茂遺跡という歴史遺産がある。その歴史遺産を引き継ぐために加茂小学校の生徒をターゲットに加茂遺跡を含めた地域の良さ、加茂地域の良さを伝えていきたい。

（7）大潮流、その他

（主なキーワード）

（主な意見）

【大潮流：人口減少・超高齢化】

・途上国の人口の伸びが都市化により鈍化している。世界人口は低位推計で動いていくのではないか。

・今後、人口が減り消費や生産が減る中で、成長や進歩ではなく、休憩や撤退という考え方も必要ではないか。

・近年、但馬にも新しい人が移住してくるようになっている。新たな市民も参加するコミュニティにシフトしていっている。

・人口減少社会になっていくことを考えても、江戸時代の藩は今後の行政単位としてもすごくいいのではないか。

・都市から地方への人の流れが世界的に生じているが、若い子たちが実際にその場に行ってみて感じることが大事だ。

・新しく来てくれる人たちは自分で仕事ができる人。インターネットで仕事ができたり自分でお店を開いたりできる人たち。

・高齢化が進んで厳しい環境になってきている。絶えず兵庫県は先進県であってほしい。

・同じ団地の中でも30年住んでいる人がいれば5、6年住んでいる人もいて、住民の年代の差がある。

・建設業は若者が集まらない。若者へのアプローチとともに、熟練者の活用の両面で考えていかなければならない。中高年が能力を出し切る社会システムの構築を。

・Iターンは資金が難しく、田舎特有のしがらみもある。

【大潮流：自然の脅威】

・SDGsやカーボンニュートラルは国から言われてやることではないはずだが、国・地方の上意下達の垂直的ガバナンスの中でやる取組と受け止められている。

・世界的に言えば「脱炭素社会」とSDGsの「誰も取り残さない社会」の大きな2つのストーリーがあるのではないか。

【大潮流：デジタル化】

・人の移動が大きく変わってくる。自動運転が広がってくると、これまで以上に遠くから移動してくることが考えられる。

・デジタル化で人による生産性の差は小さくなる。その時、その人の存在的価値を見ていくような時代になるのではないか。

・障害者向けのタブレット学習は、今では視線入力もできるようになっている。こうした技術開発は

今後さらに進んでいく。

【大潮流：世界の成長と一体化】

・GAFAなどが情報を独占し、強いところが技術を独占していく。国の再配分機能、監視機能も必要ではないか。

・世界の成長と一体化していった時に、県単位で考えることの意味はあるのか。場所に縛られることは減っている。

【大潮流：経済構造の変容】

・これまで企業は、CSRで社会に貢献してきた。今は、障害者を雇用して、事業をすることで、持続性のあるものにする形に変わっている。

・貧者と富者の分断、都市と地方の分断など、いろんな分断が目立つ。分断を生まない社会づくりがこれからは大事だ。

・経済のあり方の背景にある価値観、特に若者の価値観が変わってきている。

・2030～2040年ぐらいに経済の中心は日本にはない。お金を中心とした経済から脱却しないといけない。

【大潮流：価値観・行動の変化】

・日本はいろんな民族がいて当たり前の社会になっていく。移民の受け入れは、多様性を売りにする兵庫県らしい取組になると思う。

・定住しなくなる未来はいいなと感じた。

・今後、多自然地域で人口が減ってくると、共有資産が増える。今の価値観は、所有ではなく共有することに移っている。

・SDGsの「誰ひとり取り残さない」が全然できていない。インクルーシブ教育が全くできていない。

【兵庫らしいビジョン】

・昔から交流と連携で発展してきたのが兵庫。交流と連携で発展していくのが兵庫県の方向性だと思っている。

・兵庫県独自のシナリオをつくっていくことが大切。キャッチーなオリジナリティが必要。

・兵庫県に何年後に何人いるかという人口を決めるのがまずベース。その人が食べていくのにこれだけの産業が必要で、街はこういうふうにする、こういったことが合わさっていって全体としての兵庫県がある。その時にそれが、岡山でもなく、広島でもなく、大阪でもなく、兵庫であるということが言えないといけない。

・県が作るものだということを考えると、地理や気候、歴史にもっと目を向けた方がいいのではないか。

・震災を機に人とのつながりを重要視するようになったからこそ参画と協働のビジョンができたと思う。全県で参画と協働をやっていること自体が兵庫らしさではないか。

【地域への着目】

・里山、六甲山など自然の豊かさというのは阪神地域に共通した強み。そうしたものの価値にまず気付くことが大切。

・兵庫県は、五国と言われるが、それぞれの文化、食、気質も全然違っている。人の面、物の面含めて大変多様である。

・但馬地域の住民は、考え方や判断、暮らしが全然違う。多様性がある。

・神戸・阪神地域は、国際的に開かれた地域。世界でも、都市部としては、はじめて大災害を経験して、立ち直った地域。

・大阪が元気になったら、その影響は必ず神戸にも及ぶ。

【実態を捉えたビジョンを】

・全体に子どもや教育の関係が少ないと感じる。

・新聞に載っていないような、もっとリアルな実態をきちんと捉えて記載してほしい。個別ケースは増えているのに数字に出てこないようなことはたくさんある。

・厳しい現実に近づけて、こんな現実も考えられるということを考えていく必要があるのではないか。

・試案の内容は、暮らしている当事者の感覚とは少し乖離していると感じた。もう少し人の思いや見えにくい部分、気づかれていない部分を可視化していく必要がある。

・視点が古く感じる。見る人がジェネレーションギャップを感じてしまうと、自分は関係ないと思ってしまう。

・未来を考える前に、目の前の課題が多すぎる。

【価値観の提示】

・ビジョンの中に人々の理想を盛り込んでいくことが重要だ。

・これまで積み重ねてきたもの、無くしてはいけないもの、守るべきものとか、そうした価値が全県ビジョンでしっかり語られていていることが大事。

・地域でこんな活動ができるよ、とか、中学・高校で起業したっていいんだよ、というような選択肢を示すことが大事ではないか。

【新ビジョンの検討方法】
・市町のビジョンをもう少し意識した方がよい。
・自治体の役割は何かという議論が大事だ。どんな地域を作っていくかのビジョン、イメージはないといけない。
・ビジョンの作成で採られているバックキャストの手法は大変良いと思う。
・まずやるべきことは、みんながあきらめている問題を抽出することだ。

【県民とともにつくるビジョン】
・行政のビジョンではなく、県民のビジョンなのだとすれば、価値観を共に創ろうというスタンスが基本にあるべき。
・県民参画型でやっているビジョンづくりは他に例がなく、知事が替わっても続けるべきだ。

【多様な視点から考えることが必要】
・若い人の意見を聞くことがとりわけ大事。
・地域ビジョン委員を生涯学習の機会としてきちんと発展させること。地域づくりに関わっている人たちの考え方を更新しないといけない。
・検討の場は、ジェンダー平等でやらないといけない。また、有識者ばかりでなく実務者のワークショップのようなものをたくさんやっていくことが大事。
・とにかく勉強が必要。海外の地域政策の動向をもっと知る必要がある。
・学生と接する立場から、若い人の意見が反映された未来ビジョンにしてほしい。
・人によって思い描く将来は随分と違うということを前提にして考えていくことが大事だ。
・2050年に活躍するのは子ども達で、ワクワクしたものを作らないと子ども達が困るので、責任を感じている。
・海外からの移住者の声は聞いたのか。もっと多様な人から話を聞き、そうした人の思いも取り込んだビジョンにしてほしい。

【分かりやすいビジョンを】
・シナリオ間の関係について、示されている関係図のように理解できる人はいない。
・ビジョンがもっとシンプルで理解しやすいものであることが大事だと思う。
・まとめすぎると足りないと言われ、網羅的にすると広すぎると言われる。難しいところ。
・行政がやることと、市民がやることと主体を示せば、もっとわかりやすくなるはず。
・カタカナ用語など、聞きなれない言葉がたくさん出てきた。分かりやすさに配慮してほしい。
・あいまいなビジョンは要らない。突き抜けた価値を示して、他の県がついてくるような兵庫県になってほしい。
・使い古された言葉が多い。基本になるものの考え方が変わってきている。
・試案は、シナリオがたくさん示されているが、いったいどういう方向で進みたいのかという哲学が必要ではないか。

【方向性を示すこと・示し方について】
・一つの方向性を示すということが、そもそも必要なのか。ある方向を示して、それに向かうのが本当にいいことなのか。
・方向性よりも、おそらく個々具体の取組の中身の方が大事な社会になっている。
・大きな方向性は知事や市長が選挙公約で示すものぐらいで十分ではないか。
・各地域の特色が、地域ビジョンの方に展開していければ、楽しいものになるのではないか。
・39のシナリオから、自分たちの地域にあったもの、大事なものは何かを考え、選び取っていくことが大切だと思った。
・大きく変わることを求めていない。新しいものを作ることだけが、将来に向かってのビジョンではない。
・試案は、かなり各論の話に入り込んでいる。ビジョンで大事なのは、少々新たな事象が出てきても変わることのない、もっと骨太な価値を示すことではないか。

【未来シナリオについての意見】
・「開放性の徹底」は良い。いろんな多様性を持った市民が集まっている県であることが兵庫の強みなので、「多様性」がありながら「開放性」のある県という方向性は非常に兵庫県らしい。
・1～6の柱の関係性をうまく見せることが大事。感じとしては、次代への責任が一番の柱になると思う。
・「個性の追求」は、個の成長、発展を支える視点の方が大事。
・「次代への責任」の肝はサステナビリティ。自分たちで本当に必要だと考えてやることに意味があって、だからこそローカルアジェンダが重要。
・「次代への責任」として、このビジョン委員の仕組みを次代へつないでいくべきだと思う。

【実現可能性のあるビジョンを】

・ビジョンを使って自治体が戦略的なマネジメントをどう展開するかが大事な点。
・大事なのは、どういう価値を実現したいか。価値の議論を排除せず、価値を大いに議論できる場をつくることが重要。
・生み出したプロジェクトを大切に育てることが大事。プロジェクトを生み出すビジョンにしてほしい。
・未来を考えるだけではだめ。ビジョンを実現するための行動をどう作っていくかをしっかり書かないといけない。
・ビジョンでも実現可能性は大事にしないといけないが、すべてが実現するわけではないという前提は共有しておく必要がある。
・ビジョンに具体的な政策を詳しく書きすぎると、結局県がやる話だ、と県民にとって他人事になってしまう。
・ビジョンを作った後どうするのかが重要。広報や活用方法などをもっと議論すべき。
・淡路島でしかできない事業をやる、他でできる事業はやらないということを徹底すべきだ。30年後などと言わず、1,000年後にも影響を及ぼすようなビジョンを考えてほしい。
・高齢者はまだまだ保守的な人が多い。将来の持続可能性といった観点で物事を考えていないようだ。そのためにも明確なビジョンが必要ではないか。近い将来こうなる、というのがあれば、協力もしてくれるのではないか。
・ビジョンを人の行動変容にどうつなげるかをうまくデザインする必要がある。

【実現可能性を高めるための仕組みづくり】

・新しいものを広げていく目的を掲げてお金を集める仕掛けを考えたらよいと思う。
・シナリオを実現するためのプロジェクトを地域から募集して、参加したいプロジェクトに自分も参加できるような仕掛けを作ったら面白いのではないか。
・シナリオ間のつながりを認識しながら考えないといけない。コラボレーションできる環境を作っていくことが大事。

【未来への展望】

・高齢者や仕事をリタイアした人に優しい町にしたい。卓球バレーや高齢者向けの移住を推進したい。例えば浜辺を車椅子でも走行可能なユニバーサルビーチとして整備したい。
・地域の活性化については、観光地化するというよりも、移住者が増えてほしい
・インターネット、デジタル化の部分はこれからますます重要視される部分。年齢などは関係なしにこのインターネット社会に参加できるような仕組みができればいい。
・30年後の未来は、パラダイムシフトが普通に起こっているはずだ。今では考えられないような未来や、これを読んだ人がワクワクして「それやりたい！」と思ってもらえるようなビジョンであってほしいと思う。

参考　意見聴取一覧

1 ビジョンを語る会(合計 92 回、2,094 人)

地域	年度	日付	市町	人数	備考
神　戸	2020	8/28(金)	神戸市	18	地域デザイン会議関係者
		9/2(水)		8	青年農業士関係者
		10/6(火)		9	神戸市小売市場連合会
		10/28(水)		15	神戸地域関係者
阪神南	2020	8/4(火)	尼崎市	21	阪神南都市型ツーリズム推進協議会
		10/3(土)		18	森の会議関係者
		11/1(日)	芦屋市	24	こくさいひろば芦屋関係者
		11/17(火)	尼崎市	17	尼崎商工会議所
		11/18(水)	西宮市	16	西宮青年会議所
		11/28(土)		22	大学生等
		12/14(月)		30	西宮商工会議所
		12/16(水)	尼崎市	14	尼崎経営者協会
	2021	8/18(水)	尼崎市	10	尼崎市市民運動推進委員会、西宮市青少年愛護協議会、芦屋市自治会連合会
阪神北	2020	8/31(月)	三田市	10	こみんか学生拠点関係者
		9/16(水)	伊丹市	15	伊丹経済交友会
		10/14(水)	三田市	15	区自治会連合会役員会
		10/20(火)	宝塚市	22	宝塚商工会議所青年部
		11/5(木)	川西市	15	川西商工会青年部
		11/20(金)	三田市	23	三田市商工会
		12/25(金)	宝塚市	100	シニアカレッジ１年生
	2021	6/16(水)	オンライン	13	川西市コミュニティ協議会連合会理事会
東播磨	2020	9/8(火)	高砂市	5	銀座商店街関係者
		9/8(火)		14	高砂商工会議所青年部
		9/11(金)	加古川市	8	30～40 代の若手事業家等
		9/17(木)		8	農業協同組合関係者
		12/11(金)	高砂市	16	高砂商工会議所
		12/25(金)	加古川市	41	各商工会議所青年部
	2021	6/29(火)		50	東播磨高校生
北播磨	2020	8/24(月)	多可町	15	加美特産品クラブ
		8/24(月)		16	多可町商工会女性部
		10/10(土)	西脇市	10	西脇商工会議所青年部・西脇青年会議所
		10/10(土)	三木市	13	吉川町商工会
		10/10(土)		8	三木商工会議所青年部
		10/14(水)	多可町	21	多可町八千代区コミュティグループ
		10/21(水)	加東市	11	北播磨管内農業関係者
		10/21(水)	小野市	13	小野商工会議所
		10/21(水)	加東市	13	加東市商工会青年部
		10/23(金)	加西市	13	加西商工会議所
		12/3(木)	加東市	9	子育て支援ルームの母親グループ
		12/17(木)	西脇市	10	播州織関係者、移住者等
中播磨	2020	8/25(火)	神河町	39	神河町区長会
		9/5(土)	姫路市	22	地域デザイン会議関係者
		9/19(土)		14	観光業関係者
		10/4(日)	姫路市	14	自治会関係者等
		10/12(月)	福崎町	16	区長会
		11/3(火)	姫路市	23	産業関係者
		3/22(月)	市川町	15	区長会
	2021	7/7(水)	姫路市	13	姫路青年会議所
		7/11(日)		14	姫路市内の大学・高校生
		7/27(火)	市川町	12	ＰＴＡ、消防団関係者

地域	年度	日付	市町	人数	備考
西播磨	2020	8/18(火)	たつの市	14	龍野商工会議所青年部
		9/7(月)	赤穂市	23	赤穂商工会議所
		9/14(月)	たつの市	21	たつの市商工会
		10/1(木)		11	龍野商工会議所女性会
		10/9(金)		31	まちづくり関係者
		10/27(火)	宍粟市	24	宍粟市商工会
		11/9(月)	太子町	16	太子町商工会青年部
		11/10(火)	相生市	7	相生商工会議所青年部
		11/16(月)	上郡町	14	上郡町商工会
		11/24(火)	佐用町	17	佐用町商工会
		11/25(水)	上郡町	380	県立大附属高校１・２年生
		12/16(水)	たつの市	35	高齢者文化大学講座
但　馬	2020	6/28(日)	豊岡市	19	地域ビジョン委員
		9/6(日)	朝来市	15	自治会関係者
		11/19(木)	豊岡市	38	但馬４青年会議所
		11/26(木)	朝来市	17	但馬地域農業経営士・女性農業士研修会
		11/29(日)	新温泉町	15	地域住民
		12/03(木)	豊岡市	39	但馬地域未来創生会
	2021	6/16(水)	オンライン	16	子育て世代
		7/16(金)	豊岡市	10	芸術文化観光専門職大学学生
		8/17(火)		9	但馬地域へのＵＩターン者
丹　波	2020	9/27(日)	丹波篠山市	11	シリ丹バレーキックオフミーティング
		10/22(木)	丹波市	17	丹波青年会議所
		11/2(月)		17	農業経営士、女性農業士、青年農業士
		11/2(月)	丹波篠山市	11	丹波篠山青年会議所
		11/23(月)		13	子育て中の母親グループ
		12/19(土)	丹波市	18	丹波の森大学講座
	2021	6/24(木)	丹波市	10	ふるさとづくり協力隊メンバー
		8/4(水)		5	地域ビジョン委員 OB
淡　路	2020	10/6(火)	淡路市	11	地域住民
		10/26(月)	南あわじ市	10	農業女子グループ
		11/9(月)	洲本市	7	洲本温泉組合
		12/2(水)		11	建設業協会
		12/22(火)	淡路市	118	淡路高校２年生
	2021	6/7(月)	洲本市	13	淡路青年会議所
		6/29(火)		15	パソナグループ社員
		7/20(火)		13	島内３市の若手市職員
全県	2020	10/14(水)	全県	15	中小企業団体中央会若手経営者の会
		10/16(金)		29	県商工会連合会
		11/17(火)		16	神戸商工会議所女性会
		12/10(木)		9	ひょうご大学生観光局
		3/16(火)		43	兵庫工業会

2 地域未来フォーラム（合計7回、476 人）

地域	日付	人数
神　戸	2021/2/23(火)	56
阪　神	2021/8/1(日)	114
東播磨	2021/8/8(日)	70
北播磨	2021/2/20(土)	58
但馬	2021/2/27(土)	72
丹波	2021/3/14(日)	71
淡路	2021/3/13(土)	35

3 ビジョン出前講座（合計 16 回、1,763 人）

年度	日付	学校	人数
2020	11/18(水)	県立出石高校	14
	12/9(水)	県立村岡高校	27
	12/17(木)	県立洲本実業高校	20
	3/3(水)	県立川西明峰高校	22
2021	4/13（火）、4/15（木）	県立三田祥雲館高校	200
	4/28(水)	県立篠山産業高校	147
	5/11（火）、5/18（火）	県立兵庫高校	40
	5/26(水)	神戸大学農学部	22
	5/28(金)	神戸大学大学院工学研究科	40
	6/10（木）、7/1（木）	大阪市立大学	8
	6/16(水)	神戸山手女子高校	220
	6/24(木)	グッドホールディングス株式会社	10
	6/29(火)	兵庫教育大学	40
	7/2(金)	灘高校	38
	7/9(金)	関西学院大学	870
	8/25(水)	甲南大学	45

4 グループインタビュー（合計 10 回、75 人）

■インタビュー①（フォーカスグループ：「集中から分散へ」）

・2021年3月25日（木）10：00～11：45（兵庫県民会館）

地域	氏名	所属等
阪神	谷口　文保	神戸芸術工科大学大学院准教授
東播磨	矢嶋　巌	神戸学院大学人文学部准教授
北播磨	林山　祐子	(株)オイコスジャパン所属
中播磨	小野　未花子	中播磨地域デザイン会議メンバー
西播磨	伊藤　一郎	第 9 期地域ビジョン委員長
但馬	松岡　千都	新地域ビジョン検討委員会委員
丹波	清水　夏樹	新地域ﾋﾞｼﾞｮﾝ検討委員会副委員長、神戸大大学院農学研究科特命准教授
淡路	横山　史	おのころデザイン研究所代表

■インタビュー②（フォーカスグループ：「つながりの再生」）

・2021年3月30日（火）10：00～11：30（兵庫県民会館）

地域	氏名	所属等
神戸	戸谷　富江	神戸常盤ボランティアセンター勤務
阪神	川中　大輔	龍谷大学社会学部講師
中播磨	髙嶋　惠子	第9・10期地域ビジョン委員、地域デザイン会議メンバー
西播磨	野村　久雄	第10期地域ビジョン委員
但馬	山縣　奈緒子	新地域ビジョン検討委員会委員

■インタビュー③（フォーカスグループ：「個性の追求」）

・2021年3月30日（木）19：00～20：30（兵庫県民会館）

地域	氏名	所属等
阪神	定藤　博子	阪南大学経済学部准教授
東播磨	小野田　陽子	第10期地域ビジョン委員会委員
北播磨	國吉　美理	播州織産地博覧会実行委員会
中播磨	合田　勝彦	新地域ﾋﾞｼﾞｮﾝ検討委員会委員、姫路観光ｺﾝﾍﾞﾝｼｮﾝﾋﾞｭｰﾛｰ常務理事
但馬	木築　基弘	第9･10期但馬夢ﾃｰﾌﾞﾙ委員長､新地域ﾋﾞｼﾞｮﾝ検討委員会委員
淡路	松岡　優司	南あわじ市地域おこし協力隊

■インタビュー④（フォーカスグループ：「次代への責任」）

・2021年3月31日（水）10：00～11：40（兵庫県民会館）

地域	氏名	所属等
神戸	新田　宜功	鈴蘭台まちづくりプロジェクトチーム実践部長
阪神	山中　詩子	三田市有馬富士自然学習センターコミュニケーター
東播磨	小林　大輔	第10期ビジョン委員、新地域ビジョン検討委員会委員
北播磨	小笹　雄一郎	NPO法人シミンズシーズ
中播磨	和﨑　宏	第1期ビジョン委員長、インフォミーム（株）代表取締役
西播磨	田野本　満男	第8期ビジョン副委員長、地域デザイン会議メンバー
但馬	関　綾乃	第9・10期但馬夢ﾃｰﾌﾞﾙ委員、新地域ビジョン検討委員会委員
丹波	本多　紀元	一般社団法人BEET理事、いなかの窓代表

■インタビュー⑤（フォーカスグループ：「開放性の徹底」）

・2021年3月31日（水）19：00～20：40（兵庫県民会館）

地域	氏名	所属等
阪神	近藤　清人	㈱DtoD代表取締役
東播磨	山村　けい子	第10期地域ビジョン委員、兵庫短期大学部教員
北播磨	山本　早希	まちの駅たか所属
中播磨	西尾　章子	第8期地域ビジョン委員、第9・第10期地域ビジョン副委員長
西播磨	浅野　一裕	第9期地域ビジョン副委員長
但馬	宮下　友香	Qumクリエイト代表、新地域ビジョン検討委員会委員
丹波	中川　ミミ	新地域ビジョン検討委員会委員、一般社団法人Be代表理事
淡路	木戸　隆一郎	第10期地域ビジョン副委員長、新地域ビジョン検討委員会委員

■インタビュー⑥（地域デザイン会議関係）

・2021年4月2日（金）13：00～14：30（兵庫県民会館）

地域	氏名	所属等
東播磨	小林　大輔	新地域ビジョン検討委員会委員
北播磨	秋田　護	県立大学大学院経営研究科所属
中播磨	山下　裕太	地域デザイン会議メンバー
西播磨	金井　貴子	第9期地域ビジョン委員会副委員長
但　馬	松岡　千都	新地域ビジョン検討委員会委員
丹　波	細見　勇人	地域デザイン会議コーディネーター
淡　路	木田　薫	地域デザイン会議コーディネーター

■インタビュー⑦（フォーカスグループ：「美の創生」）

・2021年4月2日（金）19：00～20：40（兵庫県民会館）

地域	氏名	所属等
神戸	毛利　宗玄	会社役員
阪神	古武家　善成	環境研究 Lab 代表、第 8 期地域ビジョン委員長
北播磨	三村　尚暉	県立大学学生
中播磨	佐藤　慎介	新地域ビジョン検討委員会委員
但馬	太田　　博章	新地域ビジョン検討委員会副委員長
丹波	上甫木　昭春	新地域ビジョン検討委員、大阪府立大学名誉教授

■インタビュー⑧（地域ビジョン委員会関係）

・2021年4月6日（火）13：00～14：30（兵庫県民会館）

地域	氏名	所属等
神戸	井上　哲	第 10 期地域ビジョン委員長
	森田　愛梨	神戸地域デザイン会議メンバー
阪神	松元　一路	第 9・10 期阪神北地域ビジョン委員長
	山中　智仁	地域デザイン会議グループ代表
	佐久間　壮仁	第 9・10 期阪神南地域ビジョン委員長
東播磨	大川　保	第 10 期地域ビジョン委員長
北播磨	大嶋　俊英	第 10 期地域ビジョン委員会企画部会委員（分科会長）
中播磨	藤本　忠義	第 9･10 期地域ﾋﾞｼﾞｮﾝ委員長､新地域ﾋﾞｼﾞｮﾝ検討委員会委員
西播磨	石井　靖敏	第 10 期地域ビジョン委員
但馬	木築　基弘	第 9･10 期但馬夢ﾃｰﾌﾞﾙ委員長､新地域ﾋﾞｼﾞｮﾝ検討委員会委員
丹波	瀧山　玲子	第 10 期地域ビジョン委員会副委員長
淡路	山本　益嗣	第 10 期地域ビジョン委員長

■インタビュー⑨（新地域ビジョン検討委員会関係）

・2021年4月13日（火）19：00～20：30（オンライン開催）

地域	氏名	所属等
神戸	乾　美紀	新地域ビジョン検討委員会副委員長、県立大学環境人間学部教授
北播磨	奥貫　麻紀	関西学院大学准教授
中播磨	小野　康裕	新地域ビジョン検討委員会委員
西播磨	門田　守弘	新地域ビジョン検討委員会委員
但馬	草郷　孝好	新地域ビジョン検討委員会委員長、関西大学社会学部教授
丹波	角野　幸博	新地域ビジョン検討委員会委員長、関西学院大学教授
淡路	山本　聡	新地域ビジョン検討委員会委員長、県立大学大学院緑環境景観ﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ研究科教授

■インタビュー⑩（地域ビジョン委員OB関係）

・2021年4月14日（木）15：00～16：30（兵庫県民会館）

地域	氏名	所属等
神戸	北川　有里紗	第 6～8 期地域ビジョン委員グループ代表
阪神	八木下　榮一	第 7 期阪神北地域ビジョン委員会委員長
阪神	沖　けい	第 7 期阪神南地域ビジョン委員会委員長
東播磨	畠山　恵子	第 4・5 期地域ビジョン委員会運営アドバイザー
北播磨	藤原　孝三	NPO 法人北はりま田園空間博物館代表理事
中播磨	三村　晴美	第 7 期地域ビジョン委員長
西播磨	松村　晋策	第 7 期地域ビジョン委員長
但馬	太田　博章	第 8 期但馬夢テーブル委員長

5 個別ヒアリング(45 人)

年度	日付	氏名	所属等
2020	3/2(火)	畑　正夫	兵庫県立大学地域創造機構教授
	3/10(水)	渡辺　元樹	（一財）神戸観光局観光部長
	3/17(水)	岡本　慎二	豊岡商工会議所会頭
		宮崎　裕紀	旅館「海の音」経営、Ｕターン者
	3/19(金)	諸富　稜	Ｗｅｂデザイン・広告企画会社代表
		下村千登勢	NPO 法人「子育てサポート☆きらり ing」理事長
		大野　篤史	古民家宿泊施設「glaminka」代表
	3/25(木)	石原　淳平	(株)グリーン興産代表取締役
	3/26(金)	小川　敬生	移住者（赤穂「浮田みかん園」で修行中）
	3/29(月)	記村　忠勝	「かこがわ人の会」代表者
2021	4/2(金)	足立　仁	神楽自治振興会理事長
	4/5(月)	宮村　賢治	いたみ・文化・スポーツ振興財団
	4/6(火)	市野　秀之	丹波立杭陶磁器協同組合理事長
	4/7(水)	福永　枝美	加西市でワイン造りに従事（元地域おこし協力隊）
	4/13(火)	江本　暁宣	コミュニティスペース「エモラボ」運営、Ｕターン者
		赤松　清子	NPO 法人あわじＦＡＮクラブ代表
	4/20(火)	大地　但	大地農園代表取締役（元丹波市商工会会長）
	4/23(金)	大森　一輝	グリナリウム淡路島代表
		富田　祐	(株)シマトワークス
	5/11(火)	今西　学	川西市特産の一庫炭（菊炭）生産農家
	5/14(金)	中西　雅幸	NPO 法人コミュニティリンク代表理事
	5/18(火)	慈　憲一	摩耶山再生の会事務局長
	5/19(水)	東　朋子	NPO 法人コミュニティ事業支援ネット理事長
		佐藤　敬生	一社 まち・ひと・未来創造研究所代表理事
	5/24(月)	菊池　信孝	(株)フードピクト代表取締役
	5/25(火)	寄玉　昌宏	(株)Sydecas 代表取締役
	6/9(水)	能島　祐介	NPO 法人ブレーンヒューマニティー顧問
		竹中　ナミ	（社福）プロップ・ステーション理事長
	6/15(火)	玉木　幸則	西宮市社会福祉協議会相談支援アドバイザー
	6/16(水)	中島　眞紀	NPO 法人フードバンク関西理事長
	6/18(金)	小泉　寛明	神戸Ｒ不動産
	6/21(月)	高田　誠司	（一社）よみがえる兵庫津連絡協議会会長
	6/23(水)	伊藤　真美	地域おこし協力隊（家島）、Ｉターン者
	6/29(火)	白濵　貴之	竹中工務店開発計画本部､ひょうご NEW NORMAL LIFE ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ
	7/2(金)	前田　利蔵	（公財）地球環境戦略研究機関(IGES)関西研究ｾﾝﾀｰ
		高岡　浩三	元ネスレ日本㈱代表取締役
	7/26(月)	今井　紀明	認定 NPO 法人 D×P 理事長
		名須川　知子	桃山学院教育大学教授
	7/27(火)	実吉　威	（公財）ひょうごコミュニティ財団
	8/5(木)	柏木　登起	（一財）明石コミュニティ創造協会
	8/11(水)	坪井　俊輔	(株)サグリ
	8/19(木)	増原　裕子	明石市政策局 SDGs 推進室
	8/20(金)	牧村　実	川崎重工業(株)顧問、新産業創造研究機構理事長
	8/25(水)	小笠原　舞	合同会社こどもみらい探求社共同代表
	8/26(木)	佐藤　慎介	佐藤精機(株)代表取締役

6 オンライン意見交換ツール「Decidim」（338人）

■地域別

地域	市町名等	登録人数	割合
摂津	神戸市	171	50.6%
	尼崎市	6	1.8%
	西宮市	23	6.8%
	芦屋市	12	3.6%
	伊丹市	9	2.7%
	宝塚市	2	0.6%
	川西市	1	0.3%
	三田市	6	1.8%
	小計	230	68.0%
播磨	明石市	9	2.7%
	加古川市	21	6.2%
	稲美町	2	0.6%
	播磨町	1	0.3%
	西脇市	2	0.6%
	三木市	1	0.3%
	加西市	2	0.6%
	加東市	1	0.3%
	姫路市	13	3.8%
	神河町	1	0.3%
	市川町	1	0.3%
	たつの市	1	0.3%
	赤穂市	1	0.3%
	宍粟市	1	0.3%
	上郡町	2	0.6%
	佐用町	1	0.3%
	小計	60	17.8%
但馬	豊岡市	5	1.5%
	朝来市	2	0.6%
	香美町	1	0.3%
	新温泉町	1	0.3%
	小計	9	2.7%
丹波	丹波篠山市	3	0.9%
	丹波市	3	0.9%
	小計	6	1.8%
淡路	洲本市	7	2.1%
	南あわじ市	1	0.3%
	淡路市	6	1.8%
	小計	14	4.1%
他府県等	埼玉県	1	0.3%
	千葉県	1	0.3%
	東京都	5	1.5%
	神奈川県	2	0.6%
	京都府	1	0.3%
	大阪府	7	2.1%
	不明	2	0.6%
	小計	19	5.6%
合計		338	100.0%

■年代別

生年	登録人数	割合
1940年代生	2	0.6%
1950年代生	8	2.4%
1960年代生	16	4.7%
1970年代生	25	7.4%
1980年代生	35	10.4%
1990年代生	32	9.5%
2000年代生	220	65.1%
合計	338	100.0%